君と往く戦記

がらんどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と往く戦記

【Ｎコード】
Ｎ２９１８Ｘ

【作者名】
がらんどう

【あらすじ】
神災と呼ばれる現象で、空高くに逃がされた僅かな土地。
人智の及ばぬ脅威にさらされながらも、そこでは人が生き、歴史を記していた。
神の光を授かりし大陸と呼ばれるレーネルダンの大地を舞台に記される歴史。
その中心には常に歴史に名を残した、ある女性の姿があった。

1―1（前書き）

異世界トリップではなく、純粋なファンタジー・戦記です。
現代日本人の異世界活躍譚をお読みになられたい方はご注意下さい。

1―1

世界は、あまりにも唐突に変化を受け入れてしまった。
あの日のことは今でも夢に見る。
私だけではない。友も、すれ違う顔見知りも、名も知らぬ誰かも。
みなが等しく忘れられぬ悪夢に苛まれ続けている。
世界を覆ったあの光。
望みもしないのに与えられた力。
空高くに浮かぶ僅かな土地。
それでもなお、人々はこの大陸に付けられた神へ縋る名を捨てられない。
希望と皮肉を現実からの逃避でないまぜにしたまま漂う土地。
レーネルダン（神の光を授かりし）”大陸”、と……

レーネルダン大陸のほぼ中央には、地の果てまで広がる平原が広がっている。
初夏の香りをはらんだ風が駆け抜け大地と山々の緑を揺らす。北の山からおりてきた風は畑の稲穂と踊り、そして海へと駆け抜けていく。
海に面した小高い山から伸びる川に沿うようにして、壁一面が白く輝く城がそびえ立っていた。
エスト王国の首都であり国王の住まう城ラトリアだ。
山の中腹付近で突き出している中央塔を中心に、半円を描くように城壁が2重に張り巡らされている。一番内側の一ノ郭の中には城がそびえ立ち、二ノ郭との間には貴族が、その外には一般市民たちが住む城下街が広がっている。
郭には関所が設けられており、山の上から下に降りるのに許可は

必要ないが外から内に向かうにはそれなりの許可証が必要となる。早朝と深夜については許可証を持っていても通行を許されないのが常で、昼には全てが繋がり動き出すこの大都市も、朝の早い時刻では郭毎に動きが異なっている。

朝日が登ってからまだ間もない早朝。朝の早い農家の家庭でも、ようやく起きだすかという時刻に、最外殻である城下町を出発しようとしている馬車があった。

馬車には華美な装飾が施されていて、それを引く馬も艶のある黒毛を風になびかせている。堂に入った名馬ぶりは、人々が起きだして確認すれば騒がれてしまうことは間違いない。馬の見事さと馬車に付けられた刻印から、それがラトリア王城の馬車であることは一目瞭然だったからだ。

だがその時間ではさすがに人々は起きだしておらず、街の中で動いているのは朝食の用意を始めているパン屋ぐらいだ。通りにある人影は馬車に乗り込もうとしている少女と、中で彼女を迎え入れようとしている妙齢の女性。そして開いた扉を支える御者だけだった。

「宜しくお願い致します」

馬車の中で背筋をまっすぐに伸ばしている女性に、少女が深々と頭を下げる。

卸したばかりの真白い女官服に身を包んだその体は、奉公に出されるには十分に成長しているが女としての主張はやや足りない。

けれども彼女を幼い子供扱いする者はいなかった。

まとめ上げてなお腰元まで垂れる長い銀の髪。化粧を施していなくとも男たちに息を飲ませる整った顔。そしてどこか柔らかさを感じさせる佇まいが、立っているだけでも見て取れる。

あまりにも整いすぎた彼女の空気は侍女とは思えないほどで、彼女こそが奉公を受ける貴族ではないのかと思わせるほどだ。

書類では見知っていたものの初めて見る彼女の様子に一瞬息を飲んで、それでも由緒あるラトリアの女官長は柔和な微笑を浮かべて正面の席に座るよう手で促した。

「こちらこそ宜しくお願いしますよ、フィオ＝ランペントライト。私はラトリア城の女官長を務めるミリアム＝グリーンヒルです。さぁお乗りなさい。城に着くまでに話しておくべきことは山ほどありますからね」

フィオと呼ばれた少女は一礼してから馬車に乗り込む。御者は扉を閉めると、御者台に腰を収め、手綱を軽く引いてゆっくりと馬を歩かせ始める。

城下町の家々の間を通る土の道では揺れが酷かったが、城へと続く石畳の大通りに出ると、馬車の中はやや静かになった。

車輪が石畳を踏みしめる音が腰から伝わる中、ミリアムはじっくりとフィオの様子を観察していた。

ランペントライト家は商家だという報告を受けている。隣国との間で貿易をしていた家だと聞いているが、昨今の情勢もあってエスト王国内に店舗を持ち、根を下ろして商売を始めているらしい。

商家から送り込まれる侍女の目的は明確だ。貴族とのコネを作り、有力貴族の息子の種でも貰ってくれれば、その家とは良い付き合いが出来る。ランペントライト商店は貴族相手にそれが出来るだけの資本と名声を持っていると報告書では上がっていた。

目の前のフィオからは、少女といった幼さを残しながらも”あどけなさ”はあまり感じられない。

かといって宮廷内の女性が繰り広げている女らしい”陰惨さ”を備えているようにも見えない。

箱入り娘といった風情ではないが、十分に豊かな生活をしてきた彼女が飢えた獣のように貪欲な女達の中に放り込まれるかと思うと多少心配になる。

通常の新人であれば新人らしく若手の中で針仕事をさせたり力仕事をさせるので、そのような心配は必要ない。徐々に侍女の世界の知識を得て、十分な経験を積んだ段階で貴族たちに直接お仕えするようになるのが常だ。

だが、手元に握りこんでいる羊皮紙に書かれている彼女の着任先

は現在の宮廷において最も暗く、最も厳しい世界だった。
（今更心配しても始まらないでしょうね……）
ミリアムは表に出さぬように心のなかで盛大に肩を落としながら、手元の羊皮紙を広げて読み上げる。
「フィオ＝ランペントライト。あなたは本日より、栄えあるエスト王国の中心たるラトリアを支える侍女の一人となります。暗闇の中でか細い火を灯し、針を持てますか」
「は、はいっ！」
ミリアムが読み上げ始めたのは、侍女として働き始める女に贈られる決まり文句だ。
ただ相手の言葉に返事を返すだけなのだが、フィオの声は裏返り、たった一言の返事ですら噛んでしまうほどに緊張している。
だが、それすらも侍女長にとってはいつものことだ。
今まで何人もの新人を落ち着けてきた柔和な笑みを顔に貼り付けると、ミリアムは再び読み上げ始める。
「高貴なる人々の影に侍り、彼らの生を支えられますか」
女官長の優しい瞳に見つめられて、フィオの肩から力が抜ける。小さく長く息を吸った彼女はしっかりと女官長の瞳を見つめ返して顎を引く。
「はい」
それから幾つかの問答を全て肯定して、女官長は羊皮紙を丁寧に畳み、フィオに手渡した。
「その羊皮紙にも書かれていますが、貴女は私の直接の部下となり、あるお方のお世話をして頂きます」
「ミリアム様の下で直接、ですか？　お針子から始めるのでは……」
不安そうに聞くフィオに、ミリアムはゆっくりと首を横に振った。
たとえそれが女官でなくても、新入りは若いものが面倒をみるのが常識だ。組織とは、それを繰り返すことで繋がっていく。それがいきなり組織のトップの部下として働くとなれば、どのような気丈夫であっても目眩の一つも起こして当たり前だと言えよう。これが

男なら新米の見習い騎士がいきなり国王の近衛師団長を任されるようなものだ。
ミリアムとてそれは重々承知しているが、年若き王子がいればこれもまた若い女が側女として着くことも必要不可欠な常識だった。
であればこそ、羊皮紙に綴られた上辺の言葉の下に何が隠れているかをおおよそ感じ取ったフィオが動揺するのも彼女の予想通りであった。
言葉も出ないまま青ざめるフィオの顔は、その髪で光を反射していることも相まって陶磁器のように白い。
ミリアムは注意深く彼女の様子を見守る。
定まらない視点と、それでもミリアムからみられていると分かる緊張に、フィオが目線を外に向けたその時、王宮馬車は二の郭の間所を抜けた。
軽い上り坂に入って背中が彼女の人生で最も柔らかい布に押し付けられる中、手狭に繋がっていた家屋の壁が途切れて下界が視界に飛び込んでくる。
「わぁ……きれい……」
フィオの目に映ったのは美しい海とそこへ繋がる巨大な河川。その川辺に連綿と続く城下町。その全てが顔を出し、高くのぼり始めた朝日に照らされていた。
「……ミリアム様。私、こんな綺麗な場所に住んでいたんですね」
二ノ郭の外に暮らす国民は、ラトリア城を見上げて美しく思うことはあっても自分たちの住む街を上から見下ろす事はない。
城に登城して初めて知る自分の街の美しさ。この街がこんなにも美しいのは自然の偉大さだけではない。
侵略してくる敵国や、災害から人々を守る国が有ってこそ、この街は存在している。
宮廷の暗い部分を知り尽くしているミリアムでも、この景色を見ては心を洗われている。
だからこそ、若干詐欺めいた刷り込みではあるが本心から新人に

言葉を贈るのだ。
「そうですよ。そしてこの城と、この国の美しさを損なわぬ為に、我らが国王とその一族は在るのです」
ミリアムの声に引き戻されたフィオの視線がしっかりと自分の目線に向きあうのを確認して、彼女は鷹揚に頷いて続けた。
「私たちは女です。私たちは剣を持ちません。諸外国と交わす羊皮紙にその名を刻みもしません。神託を授ける神父でもありません。それでも私たちは、この国を支える方の礎と成れるのです」
神妙な口調のミリアムに釣られて、フィオも頷く。
この子は大丈夫そうだ。そう判断するとミリアムは城までの景色を楽しみなさいとだけ伝えると、御者台の間の窓を開けて御者と相談を始めた。
感動半分ほうけが半分といった表情で外を眺めるフィオは、けれども頭がしっかりしている女性の様だと侍女長は判断した。
自分も他人を管理する職に付くまではまったく何も考えずに生きてきた田舎者だったが、この娘はどうやら違う様だ。
それゆえに、妾として、しかもあの王子の元で彼女が保つかどうかが心配になった。なまじ何も考えないで環境を受け入れるだけの女であれば……。
そこまで考えてミリアムは頭を降った。フィオや彼女が特別なのだ。だからこそ、ふとした思考の隙間にとある人物の顔が浮かぶ。
城に戻って日が中天まで登れば、起き出してきた貴婦人達と利権を貪りあう貴族様がたのお相手をしなければならない。
せめて、フィオがそのような環境の中で心折れずにいてくれればと思う。そして、できるなら仕事を教えるのに手間がかかりませんように、とミリアムは思ったのだった。

やがて馬車は長い坂道と最後の関所も抜け、脇道にそれる。王城へ繋がる石畳を馬車で傷つけないために、脇道にそれてすぐのとこ

ろにある厩舎に辿り着く。
ゆっくりと止まった馬車から先に地面に足をつけたのはミリアムだった。
「さぁ、着きましたよフィオ」
ミリアムが促すとフィオは頷きを一つ返して馬車を降りた。
そして、今までの中で最大級の驚きを顔中に広げることになる。
この城を始めて訪れて見せる、お決まりの反応の最後の一つ。
ラトリアの美しい街並みは上から見下ろして華美が極まるのはもちろんのこと、主たる王城は朝日を受けて荘厳たる威厳を放っている。
だが、ミリアムはフィオの表情に見慣れぬ色を見つけた。
畏怖と感動以外の色。そしてその残り一つを知るために彼女の目線の先を追う。
原因はすぐに理解できた。心のどこかで「やはりそうか」と思いつつも顔には出さず、恭しく頭を下げる。
「ミリィ、その子が新しい娘か？」
自分よりもはるか年上の侍女長をして若い娘の呼び名のようにミリィと呼ぶ。
「えぇ、そうですよアイラ様」
猛るように赤いルビーの髪をなびかせるその女性。
この人こそが、彼女らの仕えるその頂点の一人。
「フィオ、この方が第一王女のアイラ＝ミラ＝フォン＝ノワール様です」

1―2

エスト王国の第二継承権を持つ、第一王女アイラ＝ミラ＝フォン＝ノワール。

侍女であるフィオからすれば例えようもなく高貴な相手であり、畏怖を感じるのも当然だ。

だがしかし、アイラに対面した人々が彼女に感じる畏れのほとんどは彼女の血筋によるものではない。

封建制のエスト王国において、王女という存在は継承権という存在からかけ離れている。

言わずもがな、彼女たちの生涯の意味は『誰に娶られるか』という一点のみにある。既に逝去しているが現国王ギルバルトの妻だったアーシェ王妃は隣国の王女であった。他にも例を上げていけば枚挙に暇がない。

見事な治世を敷いているギルバルト王の娘であるアイラがどこに嫁ぐのか、生まれたその時から貴族たちの間で何度も口の端に上ったのも当然だったのだが、現在のエスト王国……少なくともラトリア城下においてその話題を口にするものはいない。

燃えるような赤い長髪、並の男性よりも頭ひとつ抜ける長身。そして”武術で鍛えた”引き締まった身体は、力強さを感じさせても女性としてのバランスを失っていない。

人物判断で名を知られる賢人が宮廷にて謁見した際に、

「端的に述べて質実剛健、書に記すのであれば勇猛果敢な将の才覚、実際に対面して言葉で表せる例え無し」

と彼女を評したことがある。

本来ならか弱くたおやかさを強調されてしかるべき一国の王女に対しこの様な批評をすればどうなるか。本人ですら首を飛ばされる事を覚悟で述べたというが、実際は国王と王女が揃って彼の喩えを気に入るという珍事は、民の間にまで話が広がった。

決して見た目だけの話ではなく、実際に剣の実力を証明した噂話（と言っても実話の方が噂よりも悲惨な結果を迎えた方が多いのだが）もつぶさに存在するのだが、それこそそちらも枚挙に暇がない。

ともあれ、女だてらに武術に精を出し、積極的に政治学を学ぶ賢く強かな彼女は、その兄と比較に出された上で「次の王座が相応しいのは誰か」といった議題が酒場で上がってしまうほどに有名なのだ。

そして、そんな彼女がいきなり目の前に現れてしまえばただの少女がその威圧感に慄（おのの）くのも当然だといえる。

心の準備をした隣国の武人ですら彼女の挑発には剣を”抜けない”のだ。

さて、どうやってフィオに救いの手を差し伸べようか、とミリアムが考えだしたが、その心配もとりあえずは必要なく、フィオは勢いよく頭を下げた。

「あ、あのっ！本日よりミリアム様の元で働かせていただきます、フィオ＝ランペンライトです！」

許しが出るまでは、顔を下げ続ける。最低限の礼節ではあるが、彼女の前でそれがしっかりと実践出来るらしいと知って、多少なりとも感心した。

なにせしっかりとした男でさえも、中途半端に下げた顔を反らせてアイラをみようとするのが常だ。それほどまでにアイラの放つ魅力の吸引力は強い。

フィオの態度に満足しつつも、ミリアムはため息をついた。振り返らなくてもアイラが不機嫌な顔をしているのがわかる。

恐らく、この方は偶然ここに来たのではあるまい、と確信しているからだ。

城内の事情、そして早朝から執務室を空けている侍女長、次に召し抱えられる侍女の噂、その全てを耳に入れて彼女の脳内で合わさ

った瞬間、フィオが何の為に王城に連れられてきたのかを看破したはずだ。
とはいえ、幼い頃からアイラの成長を見守ってきたミリアムも勤めは勤めとして果たさねばならない。
「アイラ様……」
「ミリィ。先に言っておくが虚偽は認めんぞ。彼女は兄上の側女にするのか？」
本人を前に無造作に言う事ですか！と声を上げそうになってそうではないと口をつぐむ。
アイラの声と表情に怒りは見えない。それ故に発せられる冷酷さが、研がれた刃の様に周囲を無造作に突き刺している事に、彼女は気づいているだろうか。
ここ数年の彼女の成長ぶりは目を見張るものがある。その動機になったのは間違いなく大陸を襲った神災だと周囲は考えているが、アイラがその心の中を明らかにしたことは一度もなかった。
そしてただ一人で研ぎ澄ませた抜き身の刃は、眼光だけで新米の侍女一人を怯ませるに足るほどになっていた。
さすがに顔を白くしている本人に答えられる事でもないと判断して、ミリアムは半歩横にずれてミリアムを自分の影に隠し、毅然とした表情でアイラを見上げた。
「左様でございます。側女を勤めていたシェラは病をこじらせて家へ戻っていますので、代わりが必要なのです。しかし、今は他の者を回せるだけの余裕もありませんので……」
通り一遍等な回答でアイラを納得させられるわけがない。それを承知していながら、ミリアムもこの程度の返答しか返せない。
言い切ったままやるせなさをこめたミリアムとしばらく睨み合ったアイラはため息をついて表情を和らげた。
幼い頃から自分を叱り続けてきたミリアムがこの程度の事しか言えない。
彼女の回答自体はさておき、それは事実なのだと分かれば十分だ

ったからだ。
「フィオ、面を上げて」
先ほどまでの威圧感はどこえ消えたのか、一転して女性らしい優しい声でアイラが声をかける。
けれど、フィオの身体はいっこうに起きようとしなかった。礼儀に頑なすぎるのかとミリアムとアイラは同時に心のなかで思案したが、緊張から身体が言うことを聞かないのだと思い当たるとあろうことかアイラは自ら地に膝をつけ、下から彼女の肩を押し上げる。
「緊張するなというのは難しいだろうが、そこまで固くならなくてもいいぞ」
肩に手を当てたままアイラはすっくと立ち上がり、フィオは今度こそ正面からアイラの瞳を受け止めることになった。
王女はその風貌もそうだが、何より尋常ではない威圧感を持っている。気圧されて口も開けないでいる少女を手助けしようとミリアムが口を開きかけたその時、アイラがとんでもないことを提案した。
「ミリィ。この子は私が貰う」
空いた口がふさがらないとはこの事だ。開きかけた口がそのままの形で動かなくなる。
それでも一瞬で咳払いをして王女を睨みつけたのは長年の付き合いがある教育係兼侍女長の経験の賜物(たまもの)だろう。
「ではライアス様の側女についてはいかがなさるおつもりです」
「世話係には普通の世話だけさせればいい。”夜の世話”が必要なら、兄上は下に降りて自分で何とかする。お付きの奴らが金を出すのを見ないふりすればいいだけだ」
ミリアムがそのアイデアを聞いて思い切り顔をしかめる。
アイラはアイラで、そんなミリアムを見て楽しそうに顔をほころばせる。
「ははっそんなに難しく考えるなミリィ。私に側仕えがいないことに苦情を言っていたじゃないか」
「それは単純に貴女が婦女らしからぬことを好まれるおかげで、普

通の侍女達がついていけなかったからです」
　無論、嗜みとして踊りも音楽も女として人並み以上にこなせるだけの実力はあるのだが、それ以上に彼女が打ち込むもので実績を上げているだけに人々の印象はそちらに偏り気味だ。
　目の前の会話でよくよく見れば今の彼女が専用に誂えたドレスでは無く、乗馬用のシャツとズボンという服装だった。
　ミリアムが油断した一瞬でアイラは素早く動き、フィオを抱えて厩舎の中へ駆け込む。
「ふ、フィオ！？大丈夫ですか！？」
　アイラの事を歯牙にもかけず侍女の心配をするとは侍女長として失格ではあったが、アイラ相手の対応としてはこの上無く正解だ。アイラはフィオを自分の前に置いて腰を麻紐で結び、馬に乗って飛び出してきたからだ。
　もはや（今回も）説得は不可能と悟ったミリアムはこれだけは伝えなければとアイラを呼び止める。
　フィオを左手で支えながら、右手のみで手綱を捌いたアイラが急停止して振り返る。
「……夜にはフィーデル卿との会食です、お忘れなきよう」
　合間に「遊びに夢中になって」と内心で付け加えながらミリアムは頭を下げる。
　あぁと微妙な期限の声を出しながら一瞬目を閉じたアイラは、結局約束の相手を思い出せなかったらしく素直にミリアムに問い返した。
「それはどっちの卿なのだ？」
「グルフ様の方です」
「……それはまた気が重い。今の内に軽くしておかなければ」
　そう言うとアイラはムチを使わずに足で軽く蹴って馬を走らせる。
　フィオを抱えたその姿は瞬く間に視界の外へと消えて行き、ミリアムとしてはもう二、三伝えておきたい事があったのだが呼び止める暇もなかった。

王女が気を晴らしに行ったのとは逆に気が重くなった侍女長は、もう一枚用意してあった羊皮紙を取り出してため息をついた。

「まったく、国王も意地が悪い」

そこには先ほど読み上げたフィオの名を書いたものと同じ内容が書かれていた。唯一違うのは専属者氏名。アイラの名が書かれたそれを懐にしまってミリアムはもう一つため息をついた。

仕える主人の命で、王子の名のついた羊皮紙を隠れて削らなければならない。王女が王女なら王も王なのだった。

1―3

ミリアムが執務室に戻って侍女達へ指示を出していたその頃、ラトリア城の一の郭では全速力で飛び出した馬の背で赤と白の人影が揺れていた。

お気に入りの愛馬にフィオを乗せたアイラは、ちらほらと人が現れ始めた大通りを一度も減速せずに駆け抜け、あまつさえ衛兵が詰めていた関所も一息に突破した。

最後など衛兵が「今日こそ我らが誇りを見せろ！」などと叫んでいたが、フィオは聞こえなかった事にした。まして彼らの兜に（ラトリア城に詰めている国軍の主力の）近衛師団章など決して見えなかった。

猛スピードで駆ける馬上で風が耳を打つ。アイラの前に座らされ、手綱を握る腕の内で抱えられるように支えられている。余計なお世話だというのにお互いの腰を紐で結ぶおまけつきだ。

身をよじる事すらできないというのはむしろ危険なのではと思わないでもないフィオだったが、アイラの剛健ぶりがあまりに噂通りだったためにむしろ安堵すら感じ始めていた。

封建国家における王族の女性は、剣の代わりになる道具でしかない。

侍女誓約の際に侍女長が言っていた事が事実だ。

女は国の剣にはなれない。

代わりとして盾になるのか毒になるのかは女次第だが、アイラはそのどれにもなりそうにない事で有名だった。

曰く、ラトリアの赤獅子。

曰く、金羽の胡蝶。

他にも色々な勇名で知られる彼女に背を預けて不安であれば、他に背を預けられる者などそうはいないだろう。

これほど身に余る栄誉もまたとないと開き直り、どこに連れて行

かれるのかは分からぬままフィオは王女に身を任せて流れる景色と追い越す風を堪能することにした。

◆

どれほど走っただろう。

アイラが馬を止めたのはラトリアから流れ出ている川の支流がつながっている湖だった。

昼過ぎになれば釣り人で賑わう湖岸も、朝食を取っているような時間では人っ子一人居はしなかった。

湖岸から反射してくる光に目をすぼめながら、ようやく紐を解いてくれるのかと息を吐き出す。他人の操る馬に長く乗るのは酔いやすく疲れやすい。

腰に巻かれた紐や、背を一国の王女にくっつけている緊張から開放されたいフィオだったが、アイラは微動だにしない。

そのままの姿勢で馬を降りることもなく、もちろん紐を解くこともなかった。

「アイラ様……その、」

「随分と可愛らしい声だな、”フィー”」

どすの効いたアイラの声に体が少しだけ跳ねる、のをフィオは精神力で抑えつけた。

王女の声には並大抵の男でも出せない鋭さがこもっていた。

分かるものには分かる類の”殺意”がこめられた一言は、若い少女一人を震えさせるには十分だろうとフィオは判断した。

フィオの動揺と反応の差は、外から見れば分からないほど小さかったが、体を繋いだアイラには隠しきれるものではなかった。

「何のことでしょうか、アイラ様。私の名前はフィオで御座います。その……子供につけるような愛称で親しく呼んでいただけるのは嬉しいのですが、私如きには恐れ多く……」

”震える声”で見上げるようにして問い返すフィオに、アイラは

余計な判断を加えるまでもなく「下らない芝居はよせ」と切り捨てた。

「お前が何の目的で戻ってきたのかは知らん」

フィオの言葉を途中で遮って、アイラの声は更に険しさを増す。

「”男”のお前がそこまで見事に変装しているくらいなんだ、よっぽどの事情があるんだろうよ。だが王女の私がそれを敢えて無視するとしても、私の前で幼馴染が別人でのように振る舞って知らんふりというのは許せん」

自分の判断に一切の予断を挟まない態度。

そして何よりもフィオを抑えつけるように抱きしめているアイラの右手が、すぐにでも腰の左に下げた剣の柄へと触れられる位置にあった。

正体がばれそうになった時のため身につけさせられた何通りもの言い訳と話術。そして今までの経験から振り絞った全ての選択肢に逡巡するが、この状況を脱するには能(あた)わない。そう判断したフィオは肩をすくめて溜息をついた。

「いったい、いつからバレていたのですか？」

何にとは言わず、女性かと間違えるほど美しい声が打って変わって親しそうな響きで少年の口から出る。

それに満足したのかアイラは満足そうに一つ頷くと、フィオの体に回していた手をほどいた。

顔なじみという事は別にしても、女装した男が王城の中に入り込む。

彼らのことを何と呼び、何をするものなのか分かっているかなど、はわざわざ問うまでもない。

それでもアイラの態度はまったく堅くならなかった。

「最初からに決まってる。えらく髪が伸びているのと女装が似合っていたのに驚きはしたが、友を見間違えるわけがないだろう」

侍女長のミリアムですら騙せた変装で、しかも六年ぶりの再開だ

というのに全く通用しないとは。呆れて声も出ないとはこの事かと思い知る。
昔からアイラは賢く常人離れした子供だったし、数々の逸話から今も変わらない事は知っていた。
そしてそれすらも騙しきれると思っていたのだが、どうやら自分の見積もりは大分甘かったらしい。
反省しなければなるまいとフィオは内心で心に刻みながら、幼い頃の記憶を自然と思い出していた。

◆

フィオの故郷は、王族が避暑地として訪れる山の麓の村だった。
アイラとフィオと、そして何人かの友人たち。
警護の兵もついてきているとはいえ、子供同士は放って置くという国王の方針から、幼い彼らは半ば放置された状態で遊び回っていた。
代々王族の護衛を排出してきた家に生まれたフィオは同年代という理由から彼らが危険な目に合わぬよう目付としてそれに付いていった。
とはいえ、一人身分の違ったフィオはもちろん一歩引いた立ち位置を守っていたし、声をかけることもなかった。
その輪の中に対等に入っていけた……というより入らざるを得なかったのはアイラが引き込んだからだった。
あの頃は本当に楽しかった。アイラもフィオも言葉に出さずとも同じ思いを抱いていた。
けれど、それはお互いが幼かったからだとフィオは結論付ける。
あれから六年。
身分どころか存在そのものを偽って王城に入ろうとする者を放ってはおく理由はない。
むしろ近しい関係の人物を間者として”仕込む”事はよくある。

現にこうやってお互いの体を紐で縛っているのが自分を間者とみなしている証拠だろう。
相手の姿も見えなければ体を相手から離せない体勢を固定されていれば、どんな達人でも攻撃や反撃はおろか防御すらもままならない。
女性にしては大柄なアイラに対して、男性の中でも（女性になりきれるほどに）小柄なフィオは、アイラの首から下にスッポリと収まってしまっているのもその一員だ。
顔は動かさないように目線だけで彼女の左腰に下げられた剣を見やる。
一切の装飾排除された鞘と、柄に巻かれた布の綻びを見る限り、どう考えても式典向けではなく実戦用の武器だと思われた。
その上で一国の王女かつ国内最強の一角とまで言われる武芸者が身に付けているという事実を加味すれば、おそらく人の首と胴体を切り離すには十分な業物であることは間違いない。
体勢の不利に加えて体格差と武器の有無ときては、どうしようもない。
せめて自分が得意としている武器さえあれば、抗うこともできるだろうが、武器は城内に侵入できてから支給される予定だったため手元にない。
一通り抵抗の可能性を考えて放棄してから、冷静になれと深呼吸をする。
そもそも、自分の目的はアイラを害することではない。
領主から直接に賜った指示を果たせないのは無念だが、余計な人物を殺す事は厭われる。それも幼馴染を手にかけるくらいなら任務を放棄して脱領者となり、野垂れ死んだ方がマシというものではないだろうか。
本当にそれで後悔しないか。
自分に問いかけて返って来た答えは考えるまでも無いという本心だった。

となれば、まずはアイラを油断させて縄を解いてもらわないといけない。
アイラが縄をほどいた時点で、馬を飛び降りて脱出しよう。馬に追われても湖の畔にある森の中へ駆けこんでしまえばなんとかなるはずだ。
そう考えてフィオは全身から力を抜いてアイラにもたれ掛かった。
男としては非常に情けない事この上ないとフィオも思うが、女装を幼馴染の異性に見られている時点で情けなどかけてもらいたくない。
不安で胸が苦しくなる程に無防備な姿を晒す。
一流の実力を持った相手だからこそ、フィオが無防備であることを悟ってくれるはずだ。
だが、フィオのそんな思いは再び打ち砕かれる。
十年ぶりに再開した幼馴染は、油断をすることなく一際鋭い言葉の刃を振り下ろしてきた。

「で、殺しに来たのは私か。それとも兄か？」

目線を合わせられずに、顔を伏せてしまった。
まずい、という焦燥が外に出るよりも早く、アイラが言葉を紡いでいく。
「ラオの連中がいまさらお前を私の目の前に送る以上、狙いは十中八九私だと思うが……それにしては無遠慮すぎだ」
「……」
「分かっていると思うが、沈黙はある意味での肯定にはなっても返答にはならないぞ。アイラである以上お前は私の友だ。だが」
王女は刺客を、赦しはしない。
突然口をつぐんだアイラが何を言い淀んだのか。
会話を続けてそれを引きずりだそうかとも思案したが、フィオはその前に背中の熱さに気付いた。

姿勢にも口調にも変化の見えないアイラだったが、先程よりも熱く、そして強くなっている彼女の体に気づいてフィオは自分でも気づかぬ内に唇を強く噛み締めていた。
アイラは何とも思わずにこうしているわけではない。
この熱は、自分の中にあるものをひたすら意志で抑え込んでいる彼女の溜めだ。
あれ程までに苛烈で勇壮な王女が抱くこの熱の正体は何なのだろう。
真実を推し量る事はできなくとも、背から伝わる事実は間者として教育された自分を嘆息させるに十分だと認めざるを得ない。
フィオの口から漏れたのは、答えでもなく、かといって意味のある質問でもなかった。
「強くなられたのですね」
ただ漏れでた言葉への返事は沈黙で返し、アイラはそれ以上口を開かなかった。
そして、フィオにもそれ以上自ら語れる事はなかった。
沈黙がどれだけお互いの心を削っただろう。
最後まで沈黙を保ったフィオに対してアイラが持ちかけたのは恭順でもなければ服従でもなかった。
「まぁ今は事実を教えてくれなくてもいい。だが、私は私で動いているから、フィーに邪魔して欲しくはない」
私も無茶をいっているな、と苦笑しながら吐き出された言葉は、「貴女は馬鹿ですか」とつい口に出してしまいたいほど滑稽な内容だった。
「だから取引をしないか」

◆

「父が……国王が崩御し、その後の情勢が見えるまでは、私にも兄にも、手を出さないでくれないか。私たちのどちらが居なくなって

も、どちらが優秀かをハッキリせずに王位についてしまうのは、いずれエストという国を内側から滅ぼす事に繋がる。少なくとも私はそう考えている。
だから、お前が殺すべき相手と、そして選ばれるものがどちらにしても、私たちをその日まで生かしてもらえないか」
アイラの提案の意味を、飲み込む事はできた。
けれど、フィオに返す言葉はない。
言葉どころかどうすればいいのか考える事も出来ず、ただ頭の中の熱が強くなっていく。世界は白い光でやたらと眩しく自分を照りつけて、未熟な自分を晒し出しているような錯覚すら覚えた。
後々思い返せば、アイラの提案に即答出来なかったのは、彼にそれを判断するための情報が与えられて居なかったからだ。特定の状況下で人を殺す術は教えられていても、人殺しの組織を束ねるような考えはフィオには与えられてこなかった。それは人として生きていなければ、自ら思いつくものでもない。
そして、理由は教えられていなくとも、なぜ彼がこの時期に送り込まれてきたのかを察すれば、どちらにしろ色よい返事など返せないのは明白だ。
『もう一方の王権を確固たるものにする』。
その為には国王が死んで争いが起きてしまっては手遅れなのだ。
だから、フィオにはそもそも選べる選択肢などただ一つしかなかった。
自分の出身を知っているアイラに、自らの存在が気づかれてしまった。
そして、アイラの視線の色が示しているのは、疑いではなく信頼の緑。
その2つを認識した瞬間に体が動き始める。
後ろ回し蹴りの要領で、膝裏にアイラの体を巻き込むようにして体全体を捻(ねじ)る。腰の部分を縛られているために、腰椎が折れ曲がりそうな激痛を感じるが構わずに振り切る。

剣で斬られるかも知れないが、落ちていく方向から逆らうように剣を抜くのは至難の業だ。体制を崩したアイラの顎に、落ちながら肘を打ち込めば、気を失わせてその間に逃げることができる。
そのまま首の骨でも折ってしまうつもりで放たれた全力の一撃は、しかしアイラの体が容易く受け止めていた。
「なっ」
「そう無理な体の使い方をするんじゃない。アレの影響で育ちきっていないお前の体では、私はビクともしないぞ」
打撃ではなく押し出すつもりの足技を、折りたたんだ腕で受け止められていた。それどころか足できつく馬を締め上げることでアイラは上体を揺らすこと無く佇んでいる。
馬が苦しそうに嘶いているし、どんな馬鹿力ですか……。
数秒硬直しながら呆れたフィオは、アイラの手が剣の柄に触れるのを見て今度こそ本当に万策尽きたのだと観念した。
けれど、フィオはここから更に彼女の豪胆さに驚くことになる。
フィオが呆然としている間に腰の剣を軽く抜いたアイラは、お互いを結ぶ縄を切り裂いたのだ。
つまり、アイラはこう言っているのだろう。
全力でやってみろ、と。
悔しさも屈辱も感じなかった。後ろ向きな思いに心が捕われるよりも早く、フィオの中に怒りが湧き上がった。
体のバネだけで飛び上がると馬から数歩離れた位置に着地する。
フィオが構えをとるのを見て馬から降りたアイラは、ゆっくりと腰の剣帯を外しながら、言った。
「さて、私がどれだけ強くなったか。君にも見てもらいたいなフィオ」
「余裕ですね、アイラ様。このまま私が逃げるかもしれませんのに」
「殺し屋が任務失敗して逃げたところでどこに行くと言うんだ。私をまだ世間知らずのお嬢様だと思ってるのか？」
肩を回しながら本気で怒った顔で、王女はこちらを指さしてくる。

「幼馴染が様付けなんかで呼ぶんじゃない。あの頃も呼び捨てにさせるのに散々苦労させられたが、私はまた同じ苦労をしなければならんのか？」
そうじゃないだろうという思いと、懐かしいという思いが同時に去来する。
従者の家系に生まれたフィオは、避暑として訪れていたアイラ達に対して敬語で付き従っていた。それは至極当然の事だったのだが、何度命じられても言うことを聞かないフィオを、アイラは木の実集めというかわいらしい勝負で打ち負かし、勝者の権利として自分を呼捨てで呼ぶようにフィオに命じたのだった。
フィオにとっては純粋な人としての生の最後の輝きだった。
それをアイラが覚えていることに一抹とはとても言えないほどの嬉しさを覚えたが、それも目の前で不敵に笑う彼女を見れば、怒りにかき消されてしまう。
「もう二度と、チコの実取りで遅れは取りませんよ。もちろん、腕っ節でも」
「ルールはあくまで素手だ。これは君にとっては対等だが私にとってはハンデだ。頼みにしている剣を手放すんだからな。よって、私が勝ったら君に2つ言うことを聞いてもらう」
自分に対して付き出した一本の指を二本にする。
（こういう形式から入る所は昔から変わりませんね……）
内心若干気落ちしながらも不利な約束をするわけにはいかない。
「2つ、ですか？」
「そう2つだ。勝者の権利が一つ。そして同じ条件で戦ってやることで一つだ」
「戦ってやる」の一言が更にカチンと来る。
フィオが思い出せる限り、幼い頃のアイラは徒手空拳ではフィオに一度も勝ったことがない。
しっかりした騎士の流儀を習っていたアイラにフィオが勝てたのは、彼がアイラの癖を見抜いていたからだった。

今でも思い返せばその時の事を思い出せる。そして成長した体でリーチは変わったものの、彼女の構えは昔と寸分違わぬ癖が出ている。

武器を左の腰に下げているからだろうか、左の肩が下がっている癖がより顕著になっているのを見て取ってフィオも腰を落とす。

湖から流れるひときわ強い風が吹き当たった瞬間、フィオが体を低くして飛び込んでいった。

腰よりも低い位置に拳を届かせるには腕を上に引いての叩き落し（チョッピング）か、相手の下からの突き上げ（アッパー）だ。

身長差を考えてもアイラは拳を使うのならば振り下ろすしかないが、腰だめに据えている右を引き戻すほどの余裕はない。

となれば、来るのは蹴りだ。

幼い頃と同じ狙い。フィオはアイラを一撃で地に伏せさせた記憶をイメージする。

だが、アイラも彼と同じことを覚えていた。

右拳を正拳ではなてるように左足を前にしていたアイラは、左足を体半分後ろに引いて重心を移した。

フィオが左足に目線をやった瞬間、浮いた右足でフィオを踏み抜く軌道の蹴りが放たれる。

壁をも粉砕できそうな勢いの一撃が急速に顔に迫るが、フィオは動じなかった。

視えているものに対して体が動くのであれば、怖れることはない。

８年前、この大陸を襲ったあの災厄。その際に望みもしないのに備わった彼の力。

相手の視線が視えるこの力は潜入任務にも便利だが、近距離の格闘戦でも無類の効果を発揮する。

アイラは昔と同じ構えをとった瞬間から、自分の体よりも右側に意識を集中させて目線を送っていた。

さらに、右足で踏み抜くために左足を下げる先の地盤をも確認し

ていた。
狙いがわかっている攻撃を誘発させる事は、フィオにとって難しいことではなかった。
攻撃を確認した瞬間、体をはねおこして宙に舞った。
「っ！」
体を捻るように飛んだ彼女は全力の後ろ廻し蹴りをアイラの顔面に向けて放った。
けれど、直撃すれば首の骨に異常が出るほどの破壊力で放たれた蹴りはまたしても防がれていた。
両うでを交差させるように顔の前に突き出す事で、拳を壊すこと無くしかも両腕に分散して蹴りを受け止めていた。片足で受けたためによろめいたものの、すぐに右足を引き戻して腰を落とす。
先程は片腕で受けられたものが両手になっている時点で本気のフィオの一撃がどれほど違うかは明らかなのだが、必殺の一撃を防がれてしまうとさすがのフィオにも動揺が走る。
続く一撃が放てずに着地したフィオに対して、アイラは声もあげずに構えをなおすと改めて右の正拳をつきだす。
一瞬、手元が発火したのではないかとフィオは錯覚した。
それほどのスピードで放たれた拳は受け止めず、左の拳で内側から弾く。
腕を内から外に弾くように打つことで軌道をずらす技術は、「相手の拳撃を如何にして受け止めるか」と研鑽を積んでいる騎士達の流儀にはない。
蹴りを受け止められたフィオに続いて今度はアイラが驚く事になった。
同じ隙がアイラを襲うことはない。直感で悟ったフィオは決着を付けるために一足でアイラの懐に踏み込んだ。
アイラの顎を下から全力で打ち上げるように、右の拳でアッパーを打ち込む。
届いたと思った瞬間、急激に暗くなった。

痛みを感じるより先に、悔しさが募る。
届かなかった。
首に打ち込まれた感触から何度目になるか分からない諦めを覚える頃には、既に足に力が入らなくなっていた。
地面に倒れこみながら光が失われていく意識の中、フィオはアイラの声を聞いた。
「すまない。だが今度こそ、私がお前の事を何とかしてやる。だから今は眠ってくれ……」
その言葉の意味を理解することは出来なかった。
目が覚めた時、ただでは済むまい。
ほぼ確実に罪人を囚える北の尖塔に送り込まれるだろう。
覚悟を決める間もなく、フィオは意識を手放した。

1―4

自分の父が誇りだった。
彼女に出会うまで、心の中で一番崇高なモノは常にソレだった。
父親の居ない食卓で母が父の職務の素晴らしさを何度も話してくれたから。
嫌でも空いてしまうその席がたまに埋められる時の幸福感から
だけど、与えられてきたその誇りは、自分で見つけた太陽より高くはなかった。

彼女達が来た。
自分も父を見習って彼女たちを守らなければならない。大人相手では無理でも、日頃飛び回っているこの山と森で、彼女達が怪我をしないようにはしないといけない。
そう思っていつも列の最後尾を必至に走って付いていった。
背の高いお兄さんたちも居たけれど、一番前を走るのがまだ小さいアイラだったので、自分もついていけた。
一年目の景色は、常に端っこからのものだ。
変わったのは次の年から。
湖で遊んでいる皆が見える位置で日向ぼっこをしながら寝転んでいると、いきなり顔に水をかけられた。
「おい、お前！」
自分を覗き込んだその顔を、今でも覚えている。
「私と、勝負しよう！」

◆

はじめに感じたのは自分を包む優しい温度だった。
背中が何か暖かいものに寄りかかっている。まるで母親の膝の上

に居るみたいだと眠りの中で思う。そして自分の手を包む優しさにもどことなく懐かしさを感じる。
しばらくその感覚に浸りながらこの優しさは何なんだろうと問いた瞬間、一気に意識が覚醒した。
習慣で目を開けずに気配だけで周囲の状況を感じ取る。
妙に柔らかい場所に寝かされているが、かなり開放的な場所にいるらしい。気持ちのいい風が体を撫でていく。人の気配は自分の頭の後ろに居る一人のみ。
恐る恐る目を開けてみれば、そこにいたのは予想通り、彼の幼馴染だった。
「おはよう、フィー。やりすぎてすまなかったな」
「……おはようございます、アイラ様。ところで、この状況は……？」
気を失う前に考えていたことを思い返す。
ラトリア城は山を繰り抜くように作られてはいるが、やはり大規模な地下施設を持つのは難しい。
そのため、罪人を投獄するための牢は断崖絶壁に建築された塔が用意されている。
自分も勿論の事、目が覚めたら悪名高いその塔に叩きこまれているものだと思っていたのだが……。
フィオは王女から警戒しつつも視線を外し、部屋を観察する。
どことなく質素すぎる部屋だったが、数少ない調度品は全て一級の物が揃っている。特に今寝かされているベッドは格別すぎる。こんなに柔らかいベッドで、こんなにさらさらとした抵抗の無いシーツは初めてだ。
ともすれば、答えなど問わずとも決まっているのだが、フィオの考えを先読みしたかのようなタイミングでアイラが勝手に答えていた。
「気にするな。私の過激な馬捌きに気を失ってしまった少女を私が直々に看病している。という事になっている。ここは私のために用

意された城の裏にある別棟だ」
自慢気に胸を反らせているアイラの顔は、彼女の膝の上からでは確認できない。
相変わらずズレた人だと思いながら、フィオは嘆息しつつも体を起こした。
首元がやや痛む。自分で触ってみて気づいたが、首の前面側、気道の左右にある血管の辺りが酷く痛む。肌を出さないために首元まで隠れている侍女服のお陰で傷は露出していないが、多分相当ひどくアザになっているはずだ。
呼吸と血の巡りを止め、意識を失わせる人体の弱点。まともな武術のみを習っていれば知らない知識だ。
アイラがそれを知っていた事にもフィオは驚いたが、高速で飛び込んでいった自分に対して、的確に反応したことに更に驚ろかされる。
彼が推測した通り、アイラは親指と人差し指を開けてYの字で喉を突いたのだが、上体から飛び込んでくるフィオに対してアイラからは喉元が見えなかった。その状態で的確に人体の弱点をつけたとなると、彼女はこの手の技術についても一流のものを身に付けている事になる。
これらの事実に気づいたのが介抱された後だというのだから、刺客としては情けない事この上無い。
無いが、恥じるよりも先に知らねばならない事がある。王女の命を狙った刺客が何故こんなところでのうのうと寝かされていたのか。
「何故、私を生かしておくのですか。私はアイラ様を」
「そこまでだ、フィー」
けれども、振り返って相対しながら紡いだ言葉は首元に押し当てられた剣で塞がれてしまう。
座った状態から一瞬で距離を詰め、フィオの肩を抑えながら押し倒し、逆手にもった剣を彼の喉に触れる位置で支え留める。
決闘の際に抜かなかったその剣は、フィオの予想をはるかに上回

る美しさと、そして実用性にあふれていた。刃の腹は磨かれていて鏡のように透き通っていたが、数多の傷がこの剣の過去をも証明している。
軽く首に触れただけでも薄皮が裂け、うっすらと液体が滲んでいるのが分かる。彼女が少しでも力を入れれば、喉元を裂かれる事は想像に難くない。
緊張から全身が軽くこわばるフィオだったが、肝心のアイラは人を殺せる剣を構えているなどとは微塵も思わせない微笑を浮かべて言った。
「約束のことは覚えているか？」
一瞬、十年前の記憶が彼の頭をよぎった。
直ぐ様思い直して（どれくらいの時間が経過しているか分からないが）先ほどの決闘の発端を思い出す。
とはいえ、約束をしたという事以外アイラの真意はつかめていない。
フィオに返せるのはオウム返しのような意味のない答えだけだ。
「貴女の命を訊け、というのでしょう。私が聞き入れられる事でしたらお聞きいたします。ですが、雇い主のことを話せと命じられても何一つ漏らさないことは、予め断らせて頂きますよ」
恐らくそれが目的だろう、と目星をつけてアイラを睨みつける。
端正に整った顔を歪めた王女は、目の前でほとほと残念そうな顔で溜息をついた。
「お前がどこの刺客だとかそんな下らない事はどうでもいい。まったく、寝言で私の名前を呼んでくれたからてっきり分かってくれるものとばかり思っていたのに……」
「……ぅ」
思わず顔が赤くなるのを自覚する。起きた途端に忘れてしまえれば良かったのに、残念ながら夢の内容はわりとハッキリ覚えていた。
彼が呆然としている間にアイラは体を一旦離すと、手を引いて上半身を起こさせる。

何をするつもりのか。彼がじっと見ていると、王女は二人の間に刃を下にするようにして剣を突きだしてきた。
鍔の部分を顎でさして「支えろ」と言われ、横に伸びた鍔を下から両手で支えるようにして持った。
王女は自らの剣に親指を強く押しあてながら、まるで式典における教会長のような厳かな声で口にした。
「一つ。必要な時を除いて、私のことは様をつけずに呼び捨てること。もう一つ、私の侍女として仕えること。あの決闘と、私の剣と魂に誓って他のことは要求しない。そしてお前のことを誰にも漏らさぬと誓おう」
自らの血が十分に剣を流れると、アイラはその指を離した。そして柄の部分を支え持ち、刃の反対側をフィオに差し出す。
実際にやったことは一度しかないが、フィオはこの儀式を知っていた。
古くから伝わる剣士の誓約。剣を奉納の対象とする戦の神タリフェスに、剣士の魂である剣を証として誓約を誓う。
今ではめっきり使われなくなっている古い習慣で、エスト王国では騎士団長の就任式典の際に国王と団長が行う以外は正式には行われていない。
そんな重々しい誓約をいきなり何故……と混乱しながら、勢いのままに自分の手を伸ばしかける。
慌てて首を横に振りながら手をひっこめて、王女を問い詰める。
「暗殺者だと知ってなお私を仕えさせるなんて……何が狙いなんですか」
「いやぁ、女っぷりが私より様になってるなフィー。なぁに、理由は簡単だ。普通の侍女じゃ私にはついてこられない。レミダンの山賊退治の話は聞いたことないか？」
「……領主が手こずっていた山賊をアイラ様がを殲滅なされたという……」
齢１５にして王女が剣をとって先陣を切り、廃棄された砦を根城

にしていた山賊団を攻め抜いて砦を陥落させた……という愚にもつかない噂話のような実話の事はフィオも耳にしていた。
フィオが「それがどうした」といった表情で返せば、アイラは苦々しげな顔で首を振った。
「戦に出るというのに、やれ身の回りの世話をする女だの、湯浴みだのとふざけた事ばかりに気を回される。それでいて部屋には剣を研ぐための道具すら用意されていなかったんだぞ！信じられるか！結局地方の貴族の家で湯を浴びて、そこを早朝に出てまた軍に合流だ。小さな山賊の集団相手だったから良かったものの、これが他国の正規軍との戦だったらどうなっていると思う！」
そうじゃないだろう。という正直な思いと侍女長の苦労に涙を忍ばせるものの、握りしめた拳を豪奢なベッドに叩きこむアイラに生半可な反論は出来ず、フィオは必至に顔を縦に振った。
「そこでだ。私に侍女としてお前が付いていてくれれば、うるさい元老連中は黙らせられるし、腕のたつ奴が横にいてくれる。こんなに安心することは他にないだろう」
アイラがどうだと言わんばかりの笑顔を浮かべる。血のしたたった剣を支えながら。
この常識知らずが、と心の中で罵りつつも、確かにと思わないこともなかった。
フィオ自身は戦場を経験したことはないが、剣で人の首を刎ねた事ならある。
また、高貴な人間は戦場にて近くに小姓をおかせ、武具や取った首などはそれらに持たせたりする事も知っていた。小姓たちは武器も扱えないような者たちがほとんどのため、戦場では自らの身を守る事も出来ずに立つことになる。
側仕えが武器をとれるのであれば、どちらの立場にとっても良い事だ。
その側仕えの責務に、身の回りの世話がなければ、だが。
「……私が男であると分かった上で、身の回りの世話をさせる、と

？」
王女が戦場に立つのがおかしいことはさておくとしても、女性の身の回りの世話をするのは、当然の事ながら小姓ではなく侍女だ。
だからフィオも男としてではなく、女として城に潜入したわけだが……男が女と偽って王女の世話をするのも既に大罪だが、正体が男だと分かっていてなお側におくのも正気の沙汰ではない。
ならば、なぜ。
流れ始めたアイラの血は遅々とした速度だがゆっくりと刃を伝い、剣先に溜まり始めている。
誓いを立てるのか。抗うのか。
その全てを貴女の応えに任せたいと念じて、フィオはアイラの瞳を正面から見つめた。
彼女は信じるに足る幼馴染で、尊大だが賢い王女だ。けれども今の自分では自ずから仕える先を選ぶ力もなければ、その枷を外す事も出来ない。
だから、信じる。
陽の光を浴びて金のように光るその双眸は、燃える赤髪と絡み合って眩しいほどの輝きを湛えていた。
挑むようなフィオの視線を正面から受け止めて、アイラは応える。
「世の中を、どうでもいいものとそうでないものに分けるとしたら、お前は後者だ。フィーがフィーだから、私はお前を側に置く」
その答えが、フィオの欲しかった答えと同じだったのか。
違えども納得させるだけのものだったのか。
フィオはそれを明かさなかったし、アイラも答えを知ることは無かったが、今もその後も、二人にはフィオの応えだけで十分だった。
フィオの指から流れ落ちる血が、剣先で一つに交わる。
その重みで血がシーツに滴る前に、アイラは剣先を鞘に納めた。
「……血の雫を杯か何かで受け止めるのが習わしなのではありませんでしたか？」
「お前と私の血はいつでも私たちがこれから流す血と一緒だ」

一緒に背負えという事ですか、と肩を落とす。なんと気軽にとんでもないものを背負わせてくれるのだろうか。
フィオが頭をうなだれている間にベッドから立ち上がったアイラは、自然な動きで剣を腰に下げてフィオに手を差し出した。
「精々、血に汚れたシーツを処分する作業がなくなっただけでも良しと致します」
少しだけ赤くなった顔でフィオも手を握り返す。
アイラは苦労する気配もなくフィオの体を引き起こした。六年前は同じ背丈だった二人も今はこんなに差がある。
彼女と同じ時間を過ごせていたら、今の自分はどうなっていただろうか。
もはや肩どころか正面から見つめると胸が正面にくるくらいの身長差になってしまった幼馴染を、若干のうらみを込めながら見上げる。
アイラが面白そうにこちらを見ているのも若干癪に障った。
この程度の事で心を見だしてしまうなんて、今まで刺客として鍛えられた自分はどこに逝ってしまったのか。
そう思いながらもこの程度の事で自分の心を掻き乱せるアイラという存在が、それほど大きく、そして期待に似た何かをはらんでいるという確信も有った。
今は、答えを出すのはやめよう。
彼女についていけば、いずれその答えが手に入るはず。期待しているものかは分からないがそれだけは確実だ。
とりあえずの答えを胸の内にしまい、フィオは服装を整えて言った。
「まずは、ミリアム様に報告に参ります。私一人では止められてしまいますから、一緒に来て頂けますね？」
「それは構わないが……おい、敬語はやめる約束じゃないのか」
「おや、誓ったのは貴方様を呼捨てに事だけではありませんでしたか、アイラ」

何かが喉につっかえた様な顔でアイラの体が一瞬強張る。
ふむ、と一瞬何かに納得して首肯すると、おもむろに剣の柄へと手が伸びる。
「ではもう一勝負といこうか」
「ご遠慮させて頂きます。それとも素手の相手に剣をお抜きになられるおつもりですか？」
言いたいことだけ言ってフィオはアイラに背を向けて前を歩き始める。
まったく、正面から勝負を受けてもらえないと弱いのは昔のままなのですね。
１０年前の風が胸の内から触れてくる。
してやった心地よさを表にはださず、侍女を追い抜いて大股で歩く王女を早足でおいかけていった。

1―5

城勤めの侍女の朝は早い。
自領の土地を管理するだけの小貴族や女性貴族の大半は、昼過ぎに起きだし、夜遅くまで社交界という名の遊興に耽る生活をしている。彼らに仕える従者たちもまたそのリズムに合わせて生活することになるため、必然的に朝早くから活動することはない。
しかし複数の領を統括する上位貴族はそうはいかない。仕事の量が増え、昼からで終わらないのであれば朝からやるしかない。そして彼らの大半は情報の中心であり王都であるラトリアに登城しているため、ラトリア城で勤めを果たしている従者達は地方貴族の従者よりも勤勉に働かねばならないのだ。
そして侍女長たるミリアムは侍女の中でも最も早くから起きだして働いていた。
今日の一番初めの仕事は、一の郭の中に住む娘を侍女として連れてくるものだったが、アイラの登場によって関連する仕事は全て取りやめにせざるを得なかった。
なんとか日常通りの業務はこなすものの、一番頭が痛いのは放蕩振りが極まっているライアス王子に、侍女が居なくなった説明をどのようにつけようかという事だった。のだが、昼を過ぎた辺りで件の元凶が更なる頭痛の種を連れてやって来た。
失神したフィオをアイラが担ぐようにして帰ってきたのだ。
「フィオ！？」
年甲斐もなく若い娘のような声で驚くミリアムを、アイラは空いた片手で御して言った。
「失神しているだけだ、死んでない」
そういう問題じゃない！とは、恐らく言っても通じないだろう。
アイラは自分に関することであればとかく無茶をするが、今までついていけなかった侍女たちも不慮の事故などには合わないように

最低限ではあるが気をつかわれていたのだから。
他人を納得させられるような理由付けではなかったが、ミリアムはフィオが無事であるならば息災と自分を（無理やり）納得させる。
なんと言い訳して医務室に彼女を連れていこうか侍女長が考えている間に、機先を制すのが得意な王女はもうひとつ頭痛の種を巻いて去っていた。
「この子は私の侍女にする。起きるまでは棟で休ませるから、まだしばらく預かるぞ」
それだけ言うと唖然としているミリアムを置いてアイラは侍女長の執務室を去っていってしまった。
心の中でフィオに深く詫びると、ミリアムは机へと戻り腰を落ち着ける。
不幸中の幸いだが、昨晩のライアス王子はアイラの言うとおり下町へ降りて遊女と一晩を過ごしていた。日の出前に帰ってから眠ったままで、この分だと起きてくるのは夕方になるはず……。
「であれば、アイラ様がライアス様に直接お話をつけていただけるのが一番助かるというのに……」
恐らくそれは叶わないだろう。ないがしろにしているわけではないだろうが、アイラはどうもライアスが眼中に無いようだとミリアムは常日頃やきもきしている。
当然のことながら王族としてのプライドを持っている王子の事だ。今まで何人もの侍女を（精神的に）潰してきた王女が自分の寝屋を共にするはずだった美少女を連れていったと知ったら、どんな苦情を言いに来るだろうか。
火の粉が降り掛かってくるのが分かっているのなら、火傷をする前に自ら振り払いに行かなければなるまい。
ライアス付きの侍女に彼が起きたら伝えるように言い渡すと、ミリアムは侍女長として各仕事場の監視の為に城の中を歩きまわった。

◆

各所を見てまわり、その進捗を確かめては次の仕事場へと向かう。
それぞれの仕事場を任されている侍女達の状況を確認し、他部署との取りまとめを行うのが彼女の侍女長としての仕事の一端だ。
一流の貴族であっても侮れない年季の入った経験と人脈の繋がりで、ミリアムは様々な問題を片付けつつ城内を一周した。
浴場、洗濯場、厨房、針子部屋、各駐留貴族たちの寝室……数え上げれば暇がないほどの距離をいつもどおりミリアムは歩き詰め、その全てが滞り無い事を確認する。
執務室に戻る頃には既に時刻は昼を過ぎており、吹き抜けの廊下を歩けば熱と生気をはらんだ風が優しく身を打つ。
季節は春を終えて初夏を迎えようとしていた。城から見える山の斜面には一面に緑の葉が広がり、太陽の光を浴びて踊るように風に揺れている。
どれぐらいその風景に見とれていたのだろう。突然後ろからかけられた声で、急激に現実に引き戻された。
「調子はどうかな、グリーンヒル」
年経て低く乾いた声。けれどもその芯に揺らがぬ権威を感じさせる声の主は、誰あろうエスト国王ギルバルト＝フォン＝ノワールその人だった。
「ご機嫌麗しゅう、ノワール様」
慌てること無く頭を下げたミリアムは、衣服の上からでも彼の足が以前より大分細くなっている事に気づいた。
ミリアムが侍女として城に仕え始めたのは、ギルバルトが即位する前からだった。
まだ若輩と呼ばれながら王子として国交関係の改善を行っていた若々しい姿も、国王として精力的に活動をしていた姿も、子供が生まれた時の優しい父の姿も、全てを後ろから支えてきた。
齢も５０を数える彼は老人と言っても差し支えないが、それにしてもここ最近の体の衰えは尋常ではない。

威圧感を感じるほど力に満ち満ちた肢体から筋肉は削げ落ち、その状態であつらえた服は幅がありあまっている。
ミリアムがすぐに侍女の姿を探して視線を泳がせるのを見て取ったギルバルトは、手を上げてそれを制する。
侍女の名前など一々覚える必要のない国王としても、自らが王位につく前から侍女長として城の裏側を取り仕切るこの女性については、名以上に多くの事を知っていた。
「最近の調子はどうだ」
声にハリやツヤが無くとも、賢さが窺えるその言葉にミリアムは微笑を浮かべながら答える。
「全てつつが無く。何も問題はございません」
「ハッ、お前がそう答える事くらい分かっておる。では我が王子と王女については、どうだ。手を焼いていないとでも言うのか？」
ミリアムの応えを面白そうに待つギルバルトの表情を見て、ミリアムは喜びと心労をブレンドしたため息をつく。
「えぇ、お二人ともますます血気盛んになっておられますよ」
国王に対してこのようなぞんざいな口のきき方を許され、また出来る女性などミリアムを除いて他には居ない。
堅苦しさと建前の無い率直な言葉を聞いて、ギルバルトは愉快そうに笑った。
「で、あろうな。全くもってお前には迷惑を掛けてばかりだ……だが、今の状況はさして問題でもないだろう。国にとって真の問題は、余が死んだ後になるだろう」
ギルバルトの言葉の中に隠された思惑は、はっきりとした形では表には出ない。
しかし、長といえどもこのような話は侍女にするべきものではない。
ミリアムは今一度、自らの仕える王の瞳を見つめ返した。
「その時、お前はこの城を真の意味で守ってくれると信じておる。何があっても、お前がエストだと思うものを。お前が支えてきたラ

トリアを守れ。良いな」
王の体は確かに衰えているだろう。
それは本人も自覚し、隠そうとしないが故に、殊更に盛衰を意識させられる。
だがその心は、精神は未だ衰えていない。
眼光の鋭さとその奥から伝わる力強さを受け止めれば誰もがそう思うだろう。
「御意」
余計な言葉は要らない。ギルバルトではなく王として、ノワールとして生まれ変わって生きると決めた、若き日の王の幻影をその影に見て、ミリアムは頭をたれた。
短いその返事に満足したのか、ギルバルトは来た道を引き返していった。
急ぎもせず、かといって遅々とした歩みではなく。意思を持ってゆったりと進むその背中は、少なくとも侍女長の目から見ればいつ見ても変わらない。
角を曲がるまでを見送り、侍女長は気持ちを引き締め直して執務室へと足を向かわせる。
「……御用をお聞きするのを忘れていましたね」
この先は城の端ある、侍女たちが暮らし、勤める塔があるだけだ。来た道を引き返すのであれば、何のために侍女たちがつめる棟へ来たのだろう。
その理由を聞くことはなく、ミリアムは次の仕事を思い出し、慌てて執務室へ戻っていった。

◆

昼を過ぎて各部署の侍女達が持ちまわりで昼食を取り終わった頃。アイラがフィオを連れて執務室を訪れていた。
「ミリアム様、初日からご迷惑をお掛けして申し訳御座いませんで

した」
　誰よりも早くそう頭を下げたフィオに対して、ミリアムはアイラを一睨みしてから「頭をあげなさい」と命じた。
「フィオ、このお方の噂は市井の者でも聞いたことがあると思います。あなたに悪い所などないのですよ」
　ミリアムの説得に応じてフィオは顔を上げた。その顔は理由はともあれ感情の昂ぶりを示すようにやや赤らんでいる。
「そうだぞフィオ。私の遠乗りは戦場を駆けるよりも激しいからな。今後もこんな調子じゃ困る」
「……今、なんとおっしゃいました、王女？」
　ピシッと引きつったミリアムが辛うじて声を絞り出し、アイラに問いかける。
　アイラが生まれた頃から侍女長として城に務め続け、なおかつ王女の教育係を任されていたミリアムだからこそ、この王女の突飛な行動にも”慣れ”ていると言えた。
　本来王女、貴族、いやどんなに力仕事をする農家の女でさえ、彼女のバイタリティにはついていけようはずもないのだ。
　だというのに、貴族生まれで城勤めを推薦されるほどの真面目な少女に向かって「今後も馬を乗り回すからついて来い」などと。
「どの口が言うのですかっ！」
　ミリアムの発した怒声にアイラが思わず一歩を引きかけ、フィオもその口から稲妻が放たれるような錯覚を覚えた。
（これはさすがに……フィー、お前の出番だぞ）
（わ、私には荷が重いのですけれど……分かりました）
　さすがのアイラも胸を張り続けるわけにはいかず、若干肩を落としていたが、それでも前言を撤回しない王女に対して侍女長が説教を始めようとする。
　そこに絶妙なタイミングで、横からフィオが割り込んできた。
「ミリアム様。私もアイラ様の側仕えとして働きとうございます。どうかお許し頂けないでしょうか？」

「そうは言っても、この人の実際の行動力と言ったら噂など鼻で笑ってしまえるほどですよ。今日の様子をみる限り、あなたにはとても」
「アイラ様の遠乗りだけでしたら、私も大丈夫です。ただ、その……今日は予想外の事態が起こってしまっただけですので」
ミリアムの刺すような視線に、肩をすくめてアイラが返す。
必至なフィオはそれには全く気づかぬ様子でつっかえながらも話し続ける。
「現在アイラ様には、その侍女が仕えていないとの事ですし。あの、ミリアム様もご苦心なさられているとお聞きしました。私では力が及ばぬとは思いますが……無理、でしょうか？」
若干瞳に涙すらためて訴えるフィオをそれ以上責める事も説得することも侍女長には出来なかった。
確かに、彼女の言うことがもっともであるのは認めざるを得ない。いつまでも王女に侍女をつけていないでいられるわけがないのだ。アイラも既に齢１９を迎えている。王女としてはそろそろ婚期も限界だし、仮に隣国に嫁に出すとしても侍女が一人もついていかないというのは言語道断だ。
最悪の場合、侍女長の職を持して自分が……と思わないでもなかったが、本人にやる気がある若い娘が付いていてくれると言うのならそれにこしたことはない。相手が普通の女だったなら、だが。
何はともあれネックになるのはアイラの無軌道ぶりだ。どれだけ出来る娘でも、アイラの侍女を、しかも一人で他分野を見なければならないのは挑戦が過ぎて無謀だ。
だが、ミリアムは同時に侍女になりたてた頃の事を思い出す。そして侍女長としての責務を受け賜わった時の事も。
右も左も分からぬまま付けられた当時の王子。数年して立派な王となり、そんな王が国を支えるための城を支えようと、必至に生き抜いてきた。
自分のしてきた事に自負がある。皆を支えているという意思もあ

る。
そして、目の前の少女の言葉にも意思があった。
伝統やしきたりを後進に強いて、無茶をさせるのはミリアムの本意ではない。
だが、自分の内を鑑みれば始めにあったものはなんだったろうか。
必至に頼み込んでくる若い娘と、自らの判断に自信を持って揺らがぬ若い娘。
「……分かりました。認めましょう」
それならば、私が彼女たちのためにすべき事は、自ずと一つしか無かった。
花が開くかのように喜びの表情を浮かべるフィオとアイラの表情をみやって、
「ただし！」
それでも、彼女は侍女長なのだった。
「フィオは無理だと思ったらすぐに私に伝えなさい。交代制でも何でも、王女のために協力は惜しみません。そしてアイラ様も、フィオに無理をさせてはなりませんよ。今まで貴女様に付き従って心折れた若者がどれほどいたか、思い返すように」
「あ、ありがとうございます、ミリアム様！」「助かるよ、ミリィ」
まるで子供の様に嬉しそうに笑顔を浮かべる二人を見て、ミリアムは自分でも気づかぬ内に笑みを浮かべていた。
この二人が、上手くやってくれる事を、今は祈ろう。
フィオがアイラについていくことが出来て、そして王女としての勤めを果たす時がくれば……彼女にはアイラの力になって欲しいとミリアムは願った。
自らの生まれのみでその身の落とし所を決めねばならない”王女”。
アイラはその枠に収まらないだろうと思わせているが、そこは彼女とて女なのだ。必要な分だけの礼儀は身につけている。
もしそうならなかったとしても、フィオが侍女として成長してく

れれば、自分がこの次に推薦しようとしている侍女長の、更に次なる候補の一人となってくれるだろう。どちらにせよ、彼女自身が侍女という身分を離れて生きる選択を選ぶのでなければ、この城と、国を支えるための大きな柱になってくれるのは違いない。

ひとしきり理想の未来を想像した侍女長はそこで意識を切り替えた。

さて、ではそのためにまずフィオには何を覚えてもらうべきだろうか。

寝所を整える事から服装、さらには式典に出る彼女のフォローももちろん必要だ。知らぬ間に離れを抜けだして食事を済ませて料理長を泣かせているのもそろそろ終わりにさせてあげて欲しいところだ。

とりあえず、まずは目の前で王女というには実用的にすぎる服装をしているアイラを一睨みして、

「ではフィオ。まず貴女には」

王女に相応しい服を、と告げるつもりだったセリフは唐突に開いた扉で遮られた。

◆

壊れるかと思うほどの勢いで開かれた扉の前に跪いていたのは、ラトリア城を警護している近衛兵だった。

その顔は血が通っていないのかと思うほどに蒼白で、

「何用か、述べよ」

この異様な事態に対して真っ先に動きを見せたのはアイラだった。

ミリアムの前に立ち、腰に下げた剣の柄に手をかける。

近衛兵に向かって剣を向けなければならない警戒せねばならない理由がミリアムには理解出来なかったが、フィオは気づいた。

近衛兵の身につけている金属の具足に、血が付着していた。

健康的な赤みがなく、どこまでもどす黒いそれは一体何から浴び

たものなのか。

「ギ、ギルバルト国王が……執務中に血をお吐きになられっ……息を引き取られました！」

近衛兵の言葉を最後まで待たずに、アイラは風の様な速度で部屋を飛び出していった。　侍女はミリアムが近衛兵を支えるのを確認すると、アイラを追いかけるように……けれど王女とは逆に角を折れ、こちらもまた風のように駆け出すのだった。

1―6

アイラが国王の執務室の扉を蹴破るようにして開け放つ。
近衛兵の様子から間に合わないかと心配しての全力疾走だったが、国王がこちらに対して顔を向けたのを確認して僅かばかりの安堵を得る。

「父上！」
床に臥せっている王の傍らには腹心の執政長官が居たが、彼も医者を呼ぶだけしか出来ず、手をこまねいているようだった。
だがそれを責める事は出来まい。王の服は本来の色彩を失ってどす黒く染まっている。これほどの血を失えば、意識を保っているのがそもそも奇跡だと言える。
「アイラか？」
焦点の定まらぬ目でアイラのいる方向を睨んだ王は、立ち上がることが出来ずに手招きをする。
誘われるがままに駆け寄り、王の左に膝をついた。
「はい。私です、父上」
血の気が失せた父の顔に目を逸らしそうになるが、ギルバルトの左手を強く握って視線を戻す。
アイラの手を強く握り返してから、王は目を閉じて言った
「サルバよ、聞け」
「はっ、何でしょう、我が王よ」
執政長官がアイラとは逆の側に膝をつき、右の手を取った。
ギルバルトは途中で幾度も声をかすませたが、決して止まること無く宣託を下した。
「次の王は、アイラ、だ。クラウスではない」
その言葉を聞いて、王女の体を何かが強く打ち付けた。

父上、と想う言葉は声にならなかった。
ギルバルトはサルバが取っていた右手を強く握る。
「忘れるな、友よ。あの山の麓で過ごした日々をな」
「……仰せのままに、陛下」
その答えに満足したのか苦しそうな顔を少しだけほころばせ、ギルバルトはサルバの手を離してアイラの握る左手に右のそれを重ねた。
「父上。私で、宜しいのですか」
「……良いか、アイラよ。いずれ我々が、地上に戻るその日が来る。その時までラトリアの灯を絶やしてはならん。地上には友がいる、まだ見ぬ隣人がいる。ラトリアの国と民を大地に戻すまで、我々王族は……っ！」
ギルバルトの口から大量の血が吐き出される。
その大半はアイラとサルバにもかかったが、目もくれなかった。
「せめて、生きている間に地上にと願っていたのだが……そうも行かなくなったか」
もはやギルバルトの手に力はなかった。
自然と落下する力に任せて、腕は落ち、瞼が下がる。
「皆にすまぬと伝えてくれ……アイラよ、お前の望むエストの、未来を」
最後の言葉が、はっきりとアイラの耳に入る。
大きく息を吸い、永く吐く。
一瞬、父の顔が歪んで見えた。
ハッと顔を上げてみてみるが、父の顔からは血の気がどんどんと失せ、表情も眠るように無表情だ。
涙によるぼかしだったのだろうか。それとも、厳格な父が最後に感じたものは幸福だったのだろうか。
甘いな、と自分でも思う。

神災から6年、荒れた国を治めることが、どれほど父に負担をかけていたかは考えるまでもない。

それでも。

私（わたくし）という心を閉じて王という個人に生きていた父が、最後に笑みに浮かべたのだと、信じたいと思った。

そして忘れないために目を閉じてその光景を目に焼き付ける。

この瞼を開けた瞬間から、彼女はただのアイラではなくなるのだ。

父のように、そして王のように。

王が死んだ。

それは自分にとって確かに衝撃的だが、このまま膝をついて項垂れていて良いわけがない。

こうしてゆっくりと立ち上がる間にも、いくつもの事案が頭に浮かんでは形を作っていく。

その中でまず始めにやらなければいけないことを絞り出して行く。

父の最期の様に大きく一つ息を吸って、長く吐き出す。

やるべき事は明白だった。

息せき切って執務室に駆け込んでくる数人の男たち。

ゆっくりと振り返ってその先頭にいる男と目線をぶつける。

エスト王国の第一王子。本来であれば王位の継承権を持っていた男がそこにいた。

◆

「父上っ！」

クラウスとその取り巻き達は、ほぼ全員の顔が蒼白になっている。

王子の顔も同じように土気色だ。

自分も同じような顔をしているのではないかと思いはするが、すぐに気弱な心を封じ込める。
これからやらねばならない事をする上で、その様な態度を見せることは失敗と死に直結するからだ。

アイラは兄に場所を譲って一歩を下がりながら、静かにサルバの前に立つように反対側へと回りこむ。
取り巻きたちはそこで膝を付くことを想像していたようだったが、アイラは立ったまま腕を組むとクラウスを見下ろし続ける。
「王子。父上は……前王は息を引き取られた。父の遺言は何だったかな、サルバ」
アイラがサルバを呼捨てにしたことに、クラウスが眉を立てる。父が亡くなったというのになぜか余裕すら感じられる傲慢な口調にも違和感と不愉快を感じ、クラウスは父の手を離すとすっくと立ち上がる。
執政長官の方を振り返りもせず、クラウスに正対したまま彼女は言葉を待った。

サルバはゆっくりと目を閉じて、周りの意識が自分に集中したと感じた所で、
「次のエスト国王に、アイラ様をご指名なされました」
深々と頭を垂れながら、けれども全員に聞こえるようハッキリと告げた。
クラウスは口を開けたまま立ち尽くし、彼の後ろに控える者達も同様だ。
いち早く反応を返したのは、クラウスの真後ろに控えていた男だった。
「王位の継承権はクラウス王子が持っていたはず、アイラ王女の騙りでは御座いませんな？」
その一声を皮切りに、取り巻きが次々と喚きだす。

「証拠はあるのか」「男気取りの王位強奪ではないか」「王子がご存命なのだから長子たるクラウス王子が王位を継ぐべきでは？」
それらの声がようやく落ち着いてきた頃合いで、クラウスが王女に向かい合う。
「アイラ、証拠はあるのか？」
「無い。少なくとも私は口頭で伝えられただけだ」
そうか……とクラウスは肩を落とした。

沈黙が部屋を支配する。クラウスは目を閉じて何かを考え、アイラも彼の反応を待った。
本来であれば自分から攻めて相手を崩したいアイラだったが、今はそうも出来ない。
王の遺言に対し、証拠が無い。
それがアイラの最大の弱点だと、クラウスも理解しているのだ。
やはり悪くはない、とアイラは思う。
世間はアイラがクラウスを意に介していないと言ったり、あまつさえ見下していると評価している。
だが、アイラ自身はそうではないと思っていた。
無論、周りからそう取られてしまうだろうというのは理解していた。
だがそれでも、自分の為したい事と兄の成りたい王は違う場所を目指している。それだけがハッキリと違い、それ故にアイラは王を目指す道を走らねばならなかった。
だから、ここで負ける訳にはいかない。どうせ切れる手札が少ないのであれば、無闇にそれを減らさず、待つことも大事だ。

やがてクラウスは口に微かな笑みを浮かべた。
「父上は他に何か言っていなかったか？」
クラウスの表情に違和感を覚えるが、今は理由も思いつかなけれ

ば、相手の言を無視することは出来ない。
「『いずれ我々が、地上に戻れるその日が来る。その時までラトリアの灯を絶やしてはならん。地上には友がいる、まだ見ぬ隣人がいる。ラトリアの国と民を大地に戻すまで、我々王族は』。そこまでだ」
一言一句過たずに繰り返す。その言葉から父の最期の思いを感じ取りたかった。
だが、それよりも先に、心のどこかが警鐘を鳴らす。
ガチャガチャと遠くから聞こえてくる音を捉えながら、クラウスを更に注意深く観察する。
「そうか……それは遺言としては十分すぎると思わないか。実に父上らしい立派な発言だ。誰もが納得するだろう」
尊大な態度をしつつも前線には出ないクラウスが、いつになく緊張しているのをアイラは感じ取る。
「そうだな、私もそう思うよ。王子」

だが彼女は理解できていなかった。
放蕩ぶりを誹られようとも、彼とて時期国王として拘束される人生を歩んできたのだということを。
そしてそんな彼が妹に王位を退けられるということがどれだけ自尊心を傷つけ、自らの将来を揺らがすかという事実を。
クラウスの口端に、歪んだ笑みが広がる。
「我々以外の誰かが、私の口から聞いても、そう思うだろう。なぁ王女」
「兄上っ！」
判らぬ者の強い言葉は、追い詰められた人間の最後の紐を容易く引き千切る。
戦場にあるかのようなアイラの強い叫び声に釣られるようにして、クラウスは部屋になだれ込んできた兵士達に叫んだ。
「衛兵、奴を捕らえろ！我が父の遺言に背いて王位簒奪を狙う反逆

者だ！」
バカな！と思うと同時になだれ込んできた兵士たちの装備を確認する。
（城勤めの近衛兵じゃない！）
近衛兵の兜には近衛軍の紋章が飾られている。師団毎に色が違うもののそれは彼らの誇りであり存在証明だ。戦場ならまだしも城内で軍団章をつけていない武具をまとう愚か者はいない。
アイラに判断がついたのは彼らが私兵であるだけで、取り巻きの者たちが集めた私兵である事は知る由もなかった。

アイラは彼らが”誰の”私兵であるかについて、考える必要がないと見切りをつけると即座に動いた。
「サルバ、眼を閉じてろ！」
「は？うわっ！？」
執政長官のひざ下に蹴りを入れて宙に浮かばせると、アイラはそのままサルバを抱きかかえて窓から飛び出した。

「馬鹿な！４階だぞ！？」
クラウスの声を背中に受けながら、アイラは無造作に飛び出す。
そのまま地面に打ち付けられれば、さすがの彼女も骨を折って動けなくなる高さだ。
だがいくらアイラが蛮勇と誹られるほどの無茶をするとは言っても、自殺行為を好むわけではない。
彼女はただ窓から飛び出すのではなく、窓から約２メートル先にある城壁を目指して踏み切っていた。壁の意匠になっている台座に上手く足を乗せると、今度は下方にある木を目指して壁を蹴る。
上手いこと太い枝に足を乗せたアイラは止まる事無く滑り降りた。

するすると木を降りるとサルバを整えられた茂みの裏に落とすように放り投げた。

腰をすさる執政長官はかなりの高齢だったが、そこはさすが国王の腹心だった。
彼は自分の身が動くことを確認すると長身のアイラを見上げて言った。
「逃げ出してどうするのです」
「逃げるしかないだろう……私には作りたい国がある。未来がある。相容れないのであればそれは兄ではなく敵だ」
言い捨てるアイラに迷いはない。向こうがこの日のために手はずを整えていたのと同じで、アイラも心の内では何度もこの未来を想像していたのだろう。
その割にはあのアイラが一手遅れを取っている事がサルバには信じられなかったが、アイラ自身も含めてアイラを支持するものは大衆ではなく見識高い一部の人間だった。
アイラもそれは弁えているのだろう。見据える先が何なのか、執政長官にも分からなかったが彼女の言葉からその欠片を拾う程度の事は出来る。

表情が険しいままのサルバを見て、王女は「つくづく心配性なんだな」と笑うと、悪巧みをしている子供のような顔で言った。
「単身で敵わないなら私も群れを味方につけるまでだ」
「……狼ですか」
強く頷いたアイラは近づいてくる馬の足音を捉え、用心深く茂みの中へ姿を隠す。
王女は剣をいつでも抜き払えるように構えていたが、角を曲がってやって来る馬と乗り手を確認すると馬の前に飛び出した。
「フィー！どうしたんだ！」
「クラウス様とフィーデル卿の御子息の私兵が動いています。お逃げになられると思っておりました」
フィオは女王に譲ろうと馬を降りる。
駆け寄ったアイラはサルバに聞こえないように小声で話しかける。

「しかし、どうしてここに？見ていたにしては早すぎるだろう」
「……昔からアイラは窓から逃げ出す事が多かったものですから。ノラ様に怒られていた時分は、子供だというのに3階から飛び出しておりましたので、今なら4階くらい容易いだろうと判断致しました」
壁を使っても国王の執務室から抜け出せるルートがここしか無いと知っていた事は黙ってフィオは最低限の荷物をアイラに手渡した。
「あぁ、あったなぁ……しかし今も同じだと思われるのは心外だぞ？」
やっておいてどの口が言うのですか、という言葉は飲み込んで代わりに溜息をつく。
ともあれ、フィオが馬を2頭連れてきたのはアイラにとっては僥倖という他なかった。
ようやく足に力が戻ってきたのか、サルバがもう一頭の鞍に足をかける。
それを確認して、王女も侍女に背中を向けた。
「……フィー、お前に頼みがある」
「何なりと」
「ミリアムに伝言だ。私はこれから狼の群れとじゃれてくる。それと、」
馬の首を掴んで跳ねたアイラは馬の鞍に収まって手綱を引き絞った。
「次に会う時は女王と呼べ、とな」
頭を下げたフィオを置いて、城門に馬主を向ける。
間を開けずについてきたサルバがフィオを気にしながらアイラの後を追いかける。

「大丈夫なのですか……？」
新人の侍女の気丈さを怪しむ気持ちが無いでもなかったが、この騒ぎに巻き込まれてしまう事を心配しての一言だった。
全くもって問題が無いどころかフィオ以外に託せる相手もいないのだが、アイラは細かいことは答えずに問題ないと切って捨てた。

「それよりここからが大事だぞ。気を抜くなよ」
2頭の馬蹄の音が、揉めるような男たちの声に近づいていく。腰の剣帯に下げた剣を片手で抜き払い、アイラが速度を上げる。
「……父様、見ていて下さい」
一日に2つも剣神に誓いを立てては、聞き入れてもらえないかな。思わず苦笑しながらも、眼前に現れた敵を見据えて心を入れ替える。
そして父の他にもう一人。彼の名前を口にしながら刃に口付けて、振り下ろす。

大国の中で、最も栄華を誇ってきたエスト王国で、王権を巡って国を二分した内乱の幕が切って落とされた。

2―1

円塔の中央を貫く狭い螺旋階段を登りながら、騎士見習いのケイメンは小さく溜息をついた。
黴臭い階段の空気を肺一杯に吸い込むと、その空気の淀みで色々吐き出してしまいそうになる。熟練の先輩騎士達は「慣れれば故郷の布団の匂いの様に感じるさ！」などと開き直って笑うが、新人にはいささか理解できない境地だ。

つい先日負ってしまった腹のケガが完治していないために、腹をまっすぐにしたりふくらませたりすると激痛が走る。気をつけながら階段を登るが、ついつい空いている手で腹をさすってしまう。
エストはレーネルダン大陸の中でも安定した大国だった。その大国の情勢が激変した今、国の要として屹立する我が砦ではより厳重な警戒が必要――という団長の叱咤はもちろん素直に受け止めているのだが、ケイメンにはどうも実感がない。

１０日ほど前の事だ。国王が崩御したという情報はあっという間に国中を駆け巡った。恐らく、その日のうちには隣国にまで届いただろう。
その際に国中の人間が懸念していた一つの問題が顕になってしまった。
国王の継承者だ。

放蕩ぶりが知られる長子であるクラウス王子と、女にしておくには惜しい実力者である次子のアイラ王女。
次期国王は当然クラウス王子だとする中で、娼婦街に出入りする王子よりも勤勉で実力のあるアイラが王位に着くべきだと考えてい

るものも少なくなかった。もちろん大きな声で言える事ではなかったが。
そして当然のことながら「英雄色を好む」ではないが、若い男が若々しくて何が問題があろうかと応じを支持するものも勿論居る。色惚けているが、王子も政治や戦争は学んでいたからだ。

そして現在。
王城で王座に座っているのはクラウス王子だ。
王子からは、
「我が妹、アイラは父が身罷(みまか)るその時に、医者も呼ばずただ見取り、挙句の果てに自らが王の遺言にて王座を託されたと嘯(うそぶ)いている。証拠が無いことを指摘されると、剣を抜き、我が臣下を切り殺して逃亡した！
いくら血の繋がりがあると言えども、彼の者を許してはおけん！捕らえて余の前に連れてこい！」
と国中に発布している。

今がエストという国において大変な時期なのだということは騎士や貴族でない国民でも理解している。
だが、頭で分かっている情報に実感が伴わない。
それは、王城にて斬られた数名を除いて、未だ誰の血も流れていないからだ。
腹の傷が癒えぬ苛立ちの中で、若い騎士見習い達でその様な会話をしている所を団長に聞かれてしまった事を思い出す。
「血が流れてからでなければ実感が持てないか。だが人々が犠牲にならぬように努めるのが我々の責務ではないのか。流れるのは市民の血ではなく我々の血でなければならん。貴様ら替えの効く見習い騎士の血で士気が上がるのならば、私が今この場でやる気を出させてやろうか？」

人一倍……いや、二倍ほど体格が良い団長が視線だけで人を射殺せそうな顔をしていた事を思い出して思わず身震いし、同時に腹の傷が痛む。
自分たちの腑抜けっぷりに顔を挙げられずに居た騎士見習い達に団長が与えた仕事は、増員される見張り番の持ち回りだった。
それからというもの、彼らは普段の雑用をこなしながら寝る間を削ってネズミ一匹通さぬよう見張りを続けているのだった。

長い石階段を登りきったケイメンは片手で重い扉を開けて砦の屋上に出る。
開けた平原の中央、主要な交通路を睨むように建てられた砦からは、音一つ無い澄んだ夜景が広がっていた。

◆

大きく息を吐いて、腹を中心に走る激痛をこらえながら更に大きく息を吸う。
団長の方針で、感情をコントロールするために見習いでも習っている呼吸法だ。
肺の空気を押し出し、一瞬で大きく吸って今度は長く吐き続ける。
余計な考えを頭から追い出した所で見張りの兵がケイメンに気づいて声をかけた。
「ようケイメン。……大丈夫か？」
腹の傷の事を言われているのは分かった。
最初は怪我の原因で嘲笑われたものだが、今となっては誰も馬鹿になどせず、むしろお互いの怪我を気にし合うばかりだ。
「大丈夫だよジーゴ。それより異常は？」
ジーゴは苦笑しながら首を横に振った。今日も何事も起こらないのだ。

見張りの仕事が腑抜けているということはない。見習いだけではなく上級騎士まで狩りだして見張りを昼夜続けているのだ。
砦の中で武器を磨き、いつでも戦に移れるよう支度を整える一方で何の動きもない。何が真実なのか分からなくなるほど、夜の見張りは長く、気は重い。

「それじゃ、交替まで頼むぜ。次に替わる奴にはケガに効く塗り薬でも持たせようか？」
「大丈夫、自分で持ってきてる」
ひらひらと手を振りながら、ケイメンは腰から薬草をすりつぶした液体を染み込ませた湿布を取り出す。
訓練を含め、騎士団では怪我人が毎日でる。常備している薬の量も非常に多く、騎士団付きの医師も打ち身用の塗り薬など渋る事はない。
お互い苦笑いをしながら「ゆっくり休めよ」と声をかけ、階段を下りていくジーゴを見送る。

姿が見えなくなると、夜の暗闇を睨みながらケイメンは顔の緊張を解いた。
「くぉぉ……痛ってぇ……」
さすがに同輩の前では平気な顔をしているが、骨までやられているその傷の痛みは数日では消えなかった。
「くそっ、本当に女かよ……」
集中を切らさないように暗闇の街道を睨みながら、ケイメンの脳内には忘れたくても忘れられない屈辱の一瞬が思い浮かぶ。見習いとは言え、騎士が一撃で伸されてしまうなど屈辱の極みだった。

見習いに与えられている軽装の革鎧を外して服を捲ると、出血やら何やらで青ずんだ腫れがあらわれる。

監視員用の水差しから布に水を垂らして傷口に貼り付けると、一瞬冷たさに身が竦む。
服を戻す頃には体温もなじみ、傷跡の熱が引いていく間隔に心地よさを覚えながら立ち上がって見張り番に戻った。

エスト王国内で一度も敵を後ろに抜かせた事の無いこのルナルゥ砦を攻略しにくる敵が居るとは到底思えないが、今は”何があるか分からない”時勢だ。ケイメンを含む見習い騎士達には本当に何が起こるか分からないし、不安もある。
それでも彼らが前を向いて歩哨と言えども真摯に、そしていつも通りに任務に臨めるのは夜暗に紛れてはためく団旗のおかげだった。
黒狼騎士団（セーブルガルウリッター）の一員であるということが、彼らを支える支柱であり、闇の中でも絢爛と目を光らせる黒狼の団旗こそが誇りの証だった。

◆

エスト王国は広大で豊かな土地を所有している為、常備軍を持っている。
普通軍隊というのは戦時に各地の領主から兵を集めるのが常識だ。なぜなら、常備軍は戦時以外では利益を生み出さないからだった。農民は食料を作り、職人や商人は経済を回す。だが、軍人は何も生み出さない。有事になったら彼らの命を守るために戦うとはいえ、平時では他の国民が生産したものを食いつぶすだけなのだから。

このような理由から、常備軍を持っている国は豊国の中でも非常に珍しかった。
現に大国と呼ばれるミラ連合国やイグヌス帝国も、戦力といえるほどの常備軍は存在せず、辛うじて各地に見張りの兵士が数人ずつ詰めているだけだ。
それでも常備軍を置かなければならないのは列強として並び立て

られ、豊かなエストの地を虎視眈々と狙う2つの国に隣接していたからであった。

エストの常備軍は主に3つに別れ、ラトリアとその周囲を守る近衛騎士団。そして南東の要所であるルナルゥ砦を守る黒狼騎士団と、西を守る白狐騎士団（ブランシュルナルリッター）がいる。

城を飛び出したアイラはそのまま南東への街道を駆け抜け、眠らずに馬を走らせることで一週間以上かかる工程を僅か3日で移動した。

それからというもの、身を潜ませながら警戒を続けて、父親の崩御から10日が経とうとしていたのであった。

◆

ケイメンは煌々と焚かれる松明の熱を感じながら、王女が砦にやってきた日の事を思い出す。

あの日の彼は正門前の見張りを担当していた。

正門前は砦の外縁部のため、先輩に見張られる事もなく、汚い便所掃除などから免れられる格好のシフトだった。そうなるはずだったのだ。

全力疾走する耳慣れない馬蹄の音に注意を引きつけられ、音が来る街道の先を睨むと全力疾走する一騎が砦に向かっていた。

「……今日は外に出た奴はいないはずだな？」

共に見張りをしていた先輩騎士（こちらは正規騎士だった）に問われ、ケイメンは素直に頭を縦に振った。

徐々に近づいてくる人間は、目深くフードをかぶっていて人相が分からない。

他の舞台の伝令兵ならば、どこの所属かわかるように小さな団旗

などを携行し、それを振りながら近づいてくる。
見張りの二人が警戒心を強めたのは兵士として至極当然の事だった。
「ケイメン、ちょっと台帳を見てくる、一人で止められるか？」
本日の来訪予定を記した台帳の事だ、とわかったケイメンは若干のプライドもあって「大丈夫です！」と即答する。
立てかけてあった槍を手に取り、先輩に向かって頷くと、彼はすぐそばの監視塔の中に入っていく。

見る間に近づいてきた馬はケイメンが槍を構えていても止まる気配を見せなかった。
予想以上に立派な馬だ。通常の馬よりもはるかに大きい。
だが、見習いとはいえ彼も騎士の端くれだった。
「止まれ！所属を名乗るがいい！」
馬の進路上に体をおいて声を張り上げると、馬は嘶いて急停止し、馬の背に乗った人物が大声で叱り飛ばした。
「下がれ！団長に用がある！」

最初に思ったのは「女？」という疑問だった。
フードから除く顔には髪がべったりと張り付いていてよく見えない。
声は女だったが、あまりにも堂々とした態度と体格の良さからケイメンは警戒を解けなかった。
「だから、所属を名乗れと言っている！団旗は持っていないのならば、領主の使いか！？」
フードの女は大きく一つ舌打ちをすると、馬を下りてケイメンに大股で近寄る。
「くっ、このぉっ！」
怪我をさせないように、という配慮もこめてケイメンは槍の棒状の部分で足を払うように強く振り抜いた。

いや、正確には振り抜こうとして止められていた。
踏みつけるようにタイミングを合わせた蹴りが槍をへし折り、折れた柄を持ったまま動きをとめたケイメンに一瞬で近寄り、
「ハッ！」
鉄製の胸当ての隙間を狙い、完璧なボディブローを脇腹に叩き込んでいた。

「なんだ、見習いか。ならば仕方ないが……よく覚えておけ」
あまりにも衝撃が強すぎて痛みを感じず、何かよく分からないものに意識を押し流されそうになる。
最後に聞こえたのは、
「私がお前の仕えるべき者、アイラ＝ミラ＝フォン＝ノワールだ」
という宣言と
「お、おいケイメ・・・アイラ様！？」
と慌てる先輩騎士の声だった。
薄れいく意識の中で思えたのは「畜生」という悔しさと、見栄をはらずに先輩に任せれば良かった、という後悔だった。

意識が戻って、ケイメンは自分が槍を向けたのが正真正銘のアイラである事を医務室で団長から聞かされた。
団長の後ろにはバツの悪そうな顔をした王女が身なりを整えてたっており、いじけるような顔をしていた。

ケイメンはまず、自分の取ったあまりにも不遜な行為に慄(おのの)いた。
不敬罪の最たる王族への反逆行為だ。不審者扱いしたばかりか、刃を向けて武器を振るうなど愚かにも程がある。
自分だけならばよいが、家族までもが同列に処されてしまうので

はないかという不安が胸の内を駆け抜け、目には涙が浮かんできた。
ごめん、母さん。ごめん、シルエ。
内心で家族に謝りながら、誠意が伝わりますようにとケイメンは痛む体を無理やり折って頭を下げようとしたのだが、
「いや、お前が成そうとしたのは、どのような無双の戦士でも出来ぬ勇敢な行いだ。この猪王女の前に出て止めようとするものなどイグヌスにもおるまい。良くやった」
と団長直々に褒められる始末だった。

予想外すぎる団長の発言に「は！？」と素で返してしまい、ゲンコツが飛んでくるのではと警戒したが、腕を組んだ団長は
「そもそも、アイラ様が面倒臭がって式典などを尽くサボるからこういう事になるのですぞ。ご自分の不始末のせいで私の部下に怪我を負わせるなど言語道断です」
などと大胆にも王女を説教し始める有様だ。

「いや、そうは言ってもだな。まぁ私も気が立っていたことは認めるが、いくらなんでもな対応じゃないか？
顔パスでもいいくらいだろう」
「ほほう、薄汚れた農民のように泥と汗にまみれ、ボロ布のようなローブをまとった状態でよくお言いになられますな。せめて絢爛な王族らしい意匠をこらした服を纏っていれば宜しいでしょうに……これではラトリアで世話をしているミリアム殿も、不安に思っている事でしょう」
「あぁもう！分かった、私が悪かった！」

お手上げだ、とジェスチャーで示した王女はベッドの脇に膝をつくと、見習い騎士の手をとって謝罪した。
「すまんな、その……貴様は任務を忠実にこなした。不敬罪に問うことはもちろん無いし、ささやかながら報奨をやっても良い。私に

立ち向かうものなどそこに居る熊男ぐらいだからな」
団長の顔を伺うとこめかみ辺りがヒクついていた。
最大級の雷が起きる前触れに顔がひきつりながらも、ケイメンは必死に舌を動かした。
「いえ、当然の職務をこなしたまでですので、報奨などを頂くわけには参りません」
その返事に団長が満足そうに頷くのを見て、ちょっと勿体無かったかな、と思いながらもケイメンはホッと一息をつけた。

「……貴様、名をなんという？」
「ケイメン＝オージェで御座います」
「そうか、お前の名、覚えておくぞ。これからは厳しい情勢になるが……期待している」厳しい情勢、というのは分からなかったが、ケイメンは王女に頭を下げ、部屋を出ていく二人を見送って再度寝台の身を横たえることにした。

アイラ王女がラトリア城を離れ、お付きもなくこの砦にやってきた理由は、すぐさま全隊員に周知され、王女の存在は秘匿された。
我らの団長は王子派ではなく、アイラ王女に付いた、という事だ。
その肝心の王女についてはヒラの団員も噂だけしか知らず、本当にそれだけの価値があるのかと訝しんでいたが、ついて早々「訛った体を動かしたい」という王女の要望に答え、団長以外のほぼ全員がボコボコに伸されるという事態に納得せざるを得なかった。
以前にルナルゥ砦を訪れたクラウス王子は既に色事に耽溺しており、女性を何人も引き連れて酒をのみ、帰っていった。
それに比べればこの勇壮な王女に、ある種の期待感と尊敬の念を抱くのは、（失礼ではあるが）同じ戦士として、当然の感情だった。
ちなみに、王女を止められたのはヘトヘトの王女に最後に組み合

った団長だけだった。

◆

あの日以来、王女に付き合って生傷を負うものは絶えず、
「いい加減に大人しくしていろ！」
団長が一括するまで確実に怪我人が増えていた。
そのせいか、初日はケイメンをあざわらった同期や先輩も、アイラにぼこぼこにされると全力の一撃を見舞われたケイメンに同情を寄せ、大なり小なりの融通を受けていた。
力仕事の掃除などを受け持たず、見張りの番が多いのもそれが原因だ。

だが、それゆえに見張りの仕事といっても手を抜くことは出来ない。
体を使わない仕事を回されているのは、楽をするためではないのだ。
水を一杯飲み干して、足元に広がっている夜道に目線をこらし続けた。

◆

無数の人員が夜を徹して警戒を続ける中、夜影に混じって、一つの黒が蠢いていた。
巧妙に視界の外をくぐりぬけ、あまつさえ砦の外壁から内部に侵入しようとする人影には気配というものがまるでない。
ケイメンを含めた何人もの騎士がそれに気付くことすら出来なかった。
影が目的の窓に辿り着き、暖かな光の漏れ出す窓を叩いて来訪を知らせる。

満月の様に目立って輝く髪を隠したその姿は、フィオのものだった。

2－2（前書き）

今回は地理と歴史のお勉強という事で長いです。
独自世界に付きものの説明回ということで、ご了承ください。

2―2

来る日も来る日も思案を続け、テーブルに広げられた地図は丸みを完全に失っていた。

起きている間の王女は決して休まず、たまの気晴らしに騎士団の練兵に加わって体を動かす以外は地図を睨み続けていた。

食事は敢えて団員と同じもの（と言っても上級騎士と同じ食事だが）を運ばせ、机に置くこともなくパンと肉を食べては再び戦略を練り直す。

が、それもそろそろ終わりにしなければいけなかった。

この十日間にライアスは派閥の切り分けを済ませ、親アイラ派の人材は一ノ郭内の居留地に軟禁されているという報告が上がっている。

平行して自派閥に属する各地の領主は領地に返らせて兵を募らせている。

アイラがどこに潜んでいるかは、さすがのライアスも把握しているのだろう。

手際が良すぎる、と思うものの、自分を指示してくれる優秀な人材と同じように優れた知恵を持つ物がライアスに付いていてもおかしくはない。

ルナルゥ砦と黒狼騎士団（セーブルガルウリッター）の力を評価しているため、中途半端な戦力を送り込んでこないのは王女にとっても有難かった。

国力を必要以上に削ってしまっては、自分が王権を得ても隣国の侵略に耐えられないかも知れないからだ。

だが、静かだけれども確実に増していく敵の兵力は、国を代表する騎士団と最堅を誇る砦でも耐え切れるものではない。

アイラは手札が足りんなと思いながら、想定できるカードを頭の

中でとっかえひっかえし、地図に何度も旗の付いた石を立て直す。
日が昇っても夜が更けても続いていた作業を打ちきったのは、木窓をノックする音だった。

◆

弱く二回、間隔を開けて二回。
予め決めておいたノックを確認したアイラは窓に掛けた鍵を開ける。
小さなテラスに立っていたのは怪しんでくださいといわんばかりの黒装束に身を包んだフィオだった。
顔を覆っている布を脱ぎ払うと、内から長い銀の房が現れる。
部屋の中に入りながら窮屈に身を締めている部分を緩めながら、
「……私が自分で調達しておいて言うのも問題がありますが、王女の部屋に入るのが躊躇われる格好ですね」
苦笑してそう言うと、アイラも意地の悪い笑みを浮かべながら水を注いだグラスを侍女に差し出した。
「身内と言えども門を通らずに出入りしているのだから不審者には違いないな。侍女が侍女服を着るのと同じで不審者な間者が不審な服を着るのは職務上当然じゃないか？」
「間違っていませんが、人としてどうかと……とりあえず服を着替えたいので、失礼ですが席を外して頂けないでしょうか？」
「あぁ、それならそこのカーテンの向こうを使え」
アイラの指差す先には、砦には不釣合いな天蓋付きのベッドがある。
溜息をつくだけで文句は言わないこととした。フィオが何を言った所でアイラは聞きもしない。
見回りにきた誰かに怪しまれる前に、さっさと着替えてしまおうとアイラのベッドの上に乗って服を脱ぎ始める。
「着替えながらでいい……首尾はどうだった」

「はい。やはりアイラの仰っていた通りでした。軟禁されている貴族方は噂で出回っている人物たちとほぼ一致し、一ノ郭内にある上流貴族用の屋敷に囚われています。西へと逃げたサルバ様は無事白孤に拾われているようです。やはり現在国に広まっている情報は……」

「兄上が意図的に市井に流したものと見てよさそうだな」

アイラがルナルゥ砦に篭ってすぐ、フィオを間者として送り出す前に、既に様々な噂が出回っていた。

あくまでも噂話に過ぎないというのに早馬を出したかのような情報伝達の速さ。そしてその正確さから、ライアスが故意に情報をリークしているとアイラは導きだした。

それはほぼ事実を捉えており、夜の街に頻繁に出入りしていたライアスは繋がりがあった人物に意図的に情報を広めさせていたのだった。

続けろ、というアイラの声にうなずいてフィオは淡々と調査結果を述べていく。

囚われている貴族の家の事情、そして兵を動かせるであろう者たち。

中にはミリアムですら軟禁状態となっている話も有り、アイラはきつく唇を結んだままそれを最後まで聞いた。

「兄上にしては手際が良すぎるな」というのが聞き終えた後のアイラの第一声だった。

「最近は放蕩ぶりばかりが板についているが、兄上も王としての教育を受けている。が、それにしても準備が抜かりなさすぎる」

「どなたかが補佐についていらっしゃるのでしょうか？」

「着くには着いているだろうよ。王の仕事は多い、賢王として称された父上もサルバがいなくては仕事にならん」

一度など、あまりにも専横がすぎる策を取ろうとしたサルバが王

城を辞し「どうぞお好きに」と言い放ったそうだ。
ギルバルトも虚勢を張っていたのだが、ついに仕事が回らなくなった所をミリアムが取りなした事があるという。
「っと、話がそれたな。兄上に付いていたのは誰だ？」
「ガンド家の長男でおらせられるオルフェ様でした」
「チッ、知らんな……」
苛立たしげにアイラが地図の上の石をすべて退ける。
着替え終わったフィオがアイラとは反対側に立つと、アイラは再度一から石を並べ始めた。

◆

その地図は端にギリギリ隣国が載っているが、エスト国内の地形などを詳細に記した機密情報の塊だった。
エスト王国の土地は大別すると４種類に分けられる。
中央から西海岸に渡って広大に広がる草原地帯。ラトリア上があるのはこの西海岸付近だ。
東端は峻険（しゅんけん）な山々が続く山岳地帯で、鉱山なども多数存在するが人の手はほとんど入っていない。
山を抜けると開拓されていないが東海岸に出るため、東海岸地帯と呼ばれている。
北は長大な川が東から西に流れ、川を超えた先は厳しい冬の訪れる白の土地だ。国としては成立していないが、古くから住む部族たちが領地を持ち合っており、小競り合いが続いているものの目立った争いも無いため、川を北部国境戦線として北の領主が守りを固めている。
西と東に海を持ち、北には蛮族達が住んでいるが森林が広がっている。
エスト王国が常に問題を抱えているのは残った南側だった。

「フィー、各国の情報は得られたのか？」
「エスト国内で得られる程度の情報ですが一通りのことは。南西のミラ連合国は今回こちらに対する動きを全く見せていないようです」
アイラはエストから見て南西で接している国の石を遠ざける。
「ほう、平原を少しでも掠めとってやろうとしている奴らにしては珍しいな」
同時に、白い狐が描かれた石を地図からどかす。
白狐騎士団に南西の国境線を守らせる必要が無い、という事だ。
フィオは酒場などで荒くれ者たちから手荒に聴きだした情報を整理する。
「どうやらミラの南部の蛮族がまた騒ぎ始めたらしいです。また、タイミングの悪い事にミラ西部では小規模ですが反乱が起こっているらしく、こちらに兵を向ける余裕がないという噂が立っています。
エストの国境付近を根城にしている傭兵団などは、仕事を無くしてこちらに向かってきているか、ミラの戦地に移動していると聞きましたから、実態はともかくとして向こうで戦争の準備が行われていないのは確かのようです」
「そこらへんはライアスが探るだろう。もしも敵が来るようなら奴が兵を動かすはずだ。こちらがそれに手を出さなければそれで済む」
協議などはしていないが、ライアスもアイラも、国の為に動こうとしているのは同じだ。
であれば他国の侵略を許す事はなく、その為に動かす兵を攻める事は無いと考えていい。
フィオには知らせて居なかったが、アイラは一月以上前からミラ西部に反乱の兆しがあるという情報を得ていた。
ミラは頻繁にエストの平原を掠め取ろうと侵略を仕掛けてきていたが、神災後は一度も侵攻してきていなかった。
神災後のミラは非協力的だった西方諸国を併呑し”平定”していたからなのだが、どうやらリーダー格の将軍は取り逃していたという情報も有り、武器の流通から戦の気配が有った。

「まぁ、この際ミラが動かないのであれば、こちらとしても助かる。問題なのは……」
アイラの手が地図上を東に移動していく。
止まった先はエストの南東。イグヌス帝国だった。

◆

”帝（みかど）”の国を名乗るイグヌスは、
『遠い昔。レーネルダンの中央は一つの国が治めており、その開祖はイグヌスだった』
と主張しており、専ら大陸の中央を抑えているエストにとっての敵国だ。
イグヌスは痩せた土地が多いにもかかわらず、気性の荒い国だけに内乱や蛮族などとの争いが絶えない。
それ故に荒廃した土地を回復させる政策や研究が進んでおらず、目下の所は他国の土地を略奪することで国営難を回避している軍国である。
ミラよりも更にエストの土地を奪いたいと思っているイグヌスからすると、王が居なくなっている現在の状況は帝の権威を顕すのに最も適したタイミングだと言える。

そしてアイラが不安視していたその懸念は現実の物となっていた。
「残念ながら、イグヌスは戦の準備を整えていたようです。商人たちが既に物資の売付を受け付けてもらえないと嘆いておりましたので、物資などは既にまとめられているかと」
「であれば、後はそれを運ぶ兵さえ各地から集められれば十分と言った所か。持って一月だな……」
数秒思案した王女は赤い旗をつけた石を3つ、イグヌスの国境に置いた。
そして青い旗をつけた石を3つ集めようとしてその手が止まる。

王女の手持ちで動かせる石は黒狼が2つ、白孤が2つ、そして諸侯から集められる石が3つほどだった。
対してエストの国軍は石が5つと見積もっている。自国の戦力に見誤りなどあるはずもなく、対等の戦に持ち込むのであればこちらの石が足りない。

「アイラ、1つだけお聞きしても宜しいですか」
考えこむアイラに対してやや怯みながらもフィオが伺う。
フィオが今からしようとしている質問は、アイラにとっては多分一番太い芯の一つのはずだ。
聞けば自分に対する信頼が（再開して10日の刺客に相応しくないとは自覚しているものの）損なわれるかもしれない。
だが、疑っているわけではないがその理由は聞かなければ、と思った。
険しい顔をしたまま、声には出さず頷きだけを返したアイラを正面に見据えてフィオが問う。
「クラウス様に王の座をお譲りするわけにはいかないのですか」

◆

どうだろう、この一瞬で冷ややかになった彼女の表情を見るだけで、どれだけの人間が逃げ出さずに居られるだろうか。
そう自問したフィオは自分の考えが誤っていると思い直す。
今自分に課せられているのはここから先を、敢えてアイラに突きつける事だ。
「クラウス様は確かに、王子として、はしたない行いをしていました。ですが、これから改められないわけでもないかと存じます。
アイラ様が国を思うが故に争うのであれば、イグヌスや、引いてはミラに攻めさせる機会を得させるのは国を損なうことでは御座いませんか。

クラウス様の元で権力の一端を担うだけでは足りない理由を教えていただけませんか」

アイラから向けられる感情があまりに強く、視線の中にある色がフィオにも読み取れなかった。

怒りの赤色と親愛を示す黄色の間を行き来し、あまりにも目まぐるしいその明滅に目が焼けてしまうかと錯覚する。

気圧されていたフィオはアイラが椅子から立ち上がった時も全く反応が出来ず、彼女が窓を開け放って外を見つめ出しても声をかけることが出来なかった。

アイラからの返事を待ち続け、最初に返って来た言葉は

「全ては話せない。少なくとも今は言えない物もあるし、お前にでも絶対に言えない事もある」

というアイラらしいきっぱりとした断言だった。

「今は夜で見えないが……この窓の先、南西の方角に何があるか分かるな？」

振り向かないアイラの背中に対して頷きを返し「ラオ連峰です」と答える。

「そうだ、ラオ連峰だ。六年前のあの日に生まれてしまった、お前たち異族の追いやられた土地だ。

私はお前達と共に生きる世を作りたい。いや、この狭い世界の中ではそうしなければどちらも共倒れてしまうと信じている。

だがクラウスは別だ。奴はお前らを打ち倒そうとする魔族排斥派だ」

だから、実の兄を斬らねばならない。王族としての国の行く先が違う故に、相容れない。

そこまでは口にせず、アイラが振り返る。

送られる視線は優しい慈愛の白だった。

「なぁ、フィー。私からもお前に聞きたいことがあるんだ」
後ろめたさも、申し訳なさも、恐れも、傲慢も含まれていなかった。
「あの神災の日からのお前を、私に教えてくれないか」

◆

アイラはフィオに質問を投げかけてから、話を中断して食事を摂ることにした。
数日ぶりに地図をしまい、王女らしくまともな食事を摂るという事で、世話係に任命されている騎士達も安堵しながら慣れぬ給仕を担当した。
フィオは何度も「自分がやりますから」と料理からやろうとしたがすげなく断られ、疲れているだろうからとアイラの正面の席に座らされていた。
時折やってくる騎士達に「あんたも付き合わされて大変だな」といった視線を投げかけられた。
何やら他の感情もあるようで気を遣う色の他にもピンクの性的な色も含まれていたが、女装をしている時のフィオからすれば普通の事だったので気には止めなかった。
よくよく考えればただの新米侍女が王女の食事に付き合わされているという事実に遅まきながら気づいたので、確かに並の女性ならば精神的にも厳しいかなぁと思い、食事を取って栄養はつけるのに表情や顔色は弱々しく見せるという器用な真似をするはめになったのだが……
「そういえば、私が居ない間はどのような説明をしていたのですか？」

あとあと話を合わせる必要もあり、先に食べ終わったフィオが質問する。
次々と運ばれてくるお肉の皿を、流れるように空けていくアイラが返した言葉は端的だった。
「生理……んぐっ、おいなんだその顔は。何で軽蔑されるような目で見られなけりゃならんのだ！」
肉を飲み下して抗議する王女に少年は深くため息をついた。
なるほど、どうやら自分が騎士達に送られていた視線には「女の子は大変だな」という意味が含まれていたようだ。
自分から細作として潜入している時の言い訳に使ったことも有って、女性として対応に困るわけではない。
ないが、
「ミリアム様も騎士様方も、おいたわしい……」
と、心の底から口にした。

アイラはこれが「はしたない事」だと分かった上であえて騎士に堂々と伝えている。
確かに女性に対して詳しい知識のない彼らは、侍女が多少長く部屋にこもりきりに（本当は無断外出しているのだが）なってしまっていても疑問に思わないだろう。
男所帯の中で生きている彼らにしてみればそんな事を言われた上で、恐らく女王に「女の事は女で何とかするから構わなくて良い」などと断られたのだろう。
実際にフィオの思った通りの事をアイラは伝えており、フィオの憐憫の情も的のど真ん中を射抜いていた。
更にはミリアムもこんな王女の扱いを毎日毎年繰り返しながら侍女長としての勤めも果たし……とそこまで考えて目尻に浮かんでくる熱をこらえた。
（この方に仕えると決めたのだから、ミリアム様の負担を少しでも軽くしてさし上げよう）と心の中で強く自分に誓いを立てることに

した。

そんなフィオの心中などは全く察せず、アイラは淡々と自分の食事を消化していった。

そこからはフィオも片付けに加わり、ようやく人心地つくころにはワインを運ばれていた。

再び椅子に腰を落ち着けたアイラはフィオも座らせてから体を乗り出して言った。

「さて、それじゃあ話をしてもらえるか？」

フィオにとっては別段気兼ねすることもでないから構わないが、人によっては口にしたくもない事柄だ。

それを呑気に「今日有った面白い話をしろよ」みたいなノリで問われるのは彼女が豪胆だからだろうか。

（いえ、無神経なだけですね）

とすぐさま判断を改めて、フィオは佇まいをなおす。

「では、”外”でどのように伝えられているか分かりませんが……私が知っているだけの事はアイラにお話いたしましょう」

◆

アイラやフィオ達は未だに知らぬことだったが、レーネルダン大陸は球形惑星の大地の一部に過ぎなかった。

北に続く極寒の地や、南の隣国達の更に向こう、海を渡った東西には違う国や土地が確かに存在していた。

それが破られたのは教歴２３０年の事。

いつも通りに始まった一日は、正午を伝える鐘が鳴り響いたその瞬間に変革を迎える事になった。

「正確にどんな事が起こっていたのか……混乱していた私はよく覚えていませんが、空が緑色に染まり、この世のもの全てが緑がかっ

て見えていたことだけは覚えています」
頷くアイラの目線に無言で先を促される。それがラオだけではなくエストでも起こっていたのだろう。
青い空が緑に変わり、世界はまるで透明な翡翠を通して見るかのように、全てが緑がかった。
エスト王国に居た者たちは目にすることは無かったが、その現象が始まった瞬間、ある場所では大地が割れ、陸から離れた洋上では海岸の基部が山のようにそびえ立ち始めた。
運悪くその場に居合わせた物は命を失い、そうでなくとも揺れる大地と急激な気圧差によって多くの人々が地に伏した。

どれだけの時間それに耐えたのだろう。ようやく立ち上がった人々が何が起こったのかを把握しようと動き出したその時、大陸上に居た全ての人々に声が聞こえた。
「大地は穢れを孕み、私たちはそれを正さねばなりませんでした。貴方達はいずれ大地に還るため、空から帰る旅をしなければなりません。
強く、生きなさい」
誰の声かと思案する中、人々は誰も応えを出せなかった。
謎の人物の声は大陸の全ての人に直接語りかけるように伝播した。エストでも、イグヌスでも、ミラでも。
そして、どの国でも些細な違いはあれど、声高に叫ぶ者たちによって一つの方向性を持って処理されることとなった。
『これは神の御力による奇跡である』と。

その真意がわからぬまま国は調査を始め、各国の宗教は人々を統制し、とある地域を除いてはいつもどおりの日々が続いた。
「ここまでは、概ねよろしいですか？」
フィオが一区切りをつけるように返した言葉にアイラは「だいたいこっちのことは伝わっていたみたいだな」と応える。

「ラオの中では、常に外の情報が必要でしたから」
「だろうな。ここまでは私達が抑えている通りだ。そして私たちのほとんどが知らないここから先を、私は知りたい」
小さく頭を縦に振り、フィオは口を湿らせてから続きを話し始めた。

◆

レーネルダン三大国の中央には、国を分かつように連なっている山々が存在している。
他国の土地については国によって名称がまちまち変わる事もあるのだが、その土地の事はどの国もラオ連峰と呼んでいた。
国境線があるためどの国も重要視せざるを得なかったが、荒れた峻険な山々には軍を置くことが出来なかった。
そのため、各国の武力が介入できないラオの土地は無法者達が集まる事となった。
経済的な理由や、はたまた犯罪によって、三国に住めなくなった者などが逃げ込み、集団となるものたちは山賊として国を荒らしていたのだ。
とはいえ地域によって行動もまちまちであり、けっして統率のとれた一団体などではなかったた。
そのため散発的な山賊討伐は行われていたものの根絶することは出来ず、三国のどの国もラオの実態は把握することが出来ないまま、ただ人が住んでいると認識されていた。
そして彼らは、ラオの周囲だけが見舞われた神災の更なる被害を受けることとなる。
大陸の各所で謎の声が聞こえる頃には緑の光はすでに失なわれていた。突然の出来事に倒れる者も居たが、それはただの体調不良に過ぎなかったのだが、ラオだけは違った。

ラオ山脈には一日中光が降り注ぎ、人々の体に影響を及ぼしていたのだ。

「あの時は頭がどうにかなってしまったと思いました。それまでは空が緑のように見えていただけでしたのに、ラオでは濃淡の違いはあれど全てが緑にしか見えませんでした。そして、体の節々が痛み……信じられないような光景が目の前で続きました」

ある者は姿形が変わり、

「鳥のように翼を生やす者がいました」

ある者は異能の力を得て、

「私のように姿は変わらないものの、見えないものが見えるようになったり感じられるようになる者もいました」

ある者は動物に姿を変え、

「その横で、支えにしていた木に飲まれるようにして人面樹になってしまった者もいました」

ある者は石に変わり物言わなくなり、

「私の両親を含め、言葉さえ喋れぬようになってしまった者は少なくありませんでした」

そうして夜が開けた頃、世界は元の色を取り戻していたが、彼らは人とは別の存在になっていた。

その後のラオはいち早く自分たちの現状を理解していた何者か達により、ある程度の統制を取ることになる。

そこから先はアイラが受け継いで口を開いた。

「正確な区分と数は知らんが、ラオの一部の者達は統制がとれた後に周辺三国に侵攻を開始した。まるで絵本のお伽話話のように人間離れした彼らとの争いは長い所で一年近くも続き、我が国では前王が一旦の決着を着けることで不可侵条約を結んだわけだ」

絵本の中のお伽話のように姿形を変えてしまったかつての隣人達の事を、人々はこれもまた絵本のように魔族と呼んだ。

◆

「愚にもつかぬ話だな」
苦々しげに吐き捨てながら、アイラは腕を組んで唸るような声を上げる。
その姿勢は胸を押し上げて十分に女性らしさをアピールしてはいるのだが、如何ともしがたい獣のような獰猛な声を放っていては台無しだ。
「姿の変わったものを恐れ、敵とみなして内側の団結を強める。そのために宗教も、あろうことか作り話の知識まで利用する。その変化をもたらした声が本当に神々のものであるのならば、彼らは神々の恩恵を受けられた者たちかもしれないのにな」
アイラの言い過ぎな苦言に慌てたフィオが
「それは現在の教譜では禁則となっている事項では？」
と口を挟むが、アイラはどこ吹く風で受け流す。
「国を統べる私達が民を統制するための教えなどに従ってどうする。神など盲信していては国を生きさせる事は出来んぞ」
「然様で御座いますか」
その辺りは自分には分からぬ事だな、と捨ておく。王としての考えは王だけが持てばいい。
「ともかくその後、ラオには七人の”領主”が生まれる事となりました。それ以上の情報については差し上げる事が出来ませんが、現在ラオの内部は基本的にその属領内のみで完結しております。
私からお話できるのはここまでですが、他に何かお聞きになられたいことはございますか？」
あまり情報を漏らしたくないというのは本心だったが、これ以上は大して話すことも無いというのも事実だった。
他に伝えられることといえば薄気味悪い生き物が跋扈する土地の様子だが、それを今伝える必要はないだろう。どうせこの人ならい

ずれ自分で行くと言い出すに違いない。
その時はどうやってお止めしようかと内心悩んでいたフィオは、不意に声をかけられて顔を上げる。
「フィーは何が変わったんだ？」
相変わらず腕を組んだままのアイラだったが、今日の話し合いの中で一番真剣な顔をしていた。
「私ですか？」
うむ、と鷹揚に頷く
「年を取らない体になったとかか？」
「いいえ、ゆっくりとですが、成長しています。もともと私がどの程度になるかは分かりませんが、ラオの中では平均で外見の変化速度が半分程度になっている、と見ています。ちなみにほとんど全ての人が同じですよ」
お互いを知っていたのは９つの時だった。それから１０年が経つがフィオの外見年齢は１４か１５程度にしか見えない。
フィオを含め、ラオ周辺で被害を受けた人々は総じて成長の速度がおおよそ半分ほどになっていた。

「私の場合、外見は全く変わらなかったのですが、人の視線が視えるようになりました。
誰かの目からどこを見ているのか色がついた線が視えるのです。線の色はおそらくですがその人の感情を表しているようでして……例えば敵対的であれば赤に見えます」
「それは今も見えているのか？」
「意思を持って視ようとしなければ見えませんからいつも他人の感情を覗きみているわけではありませんよ。常に見えてしまうと街中などで困ったことになりますし」
強いて言えば、今はアイラの視線が詰め物をした胸に集まっているのが分かるくらいでしょうか。えぇ、興味のオレンジ色が大分強く。口には出しませんが。

膝の上で手を組んだまま、腕を内側に締めると、アイラのにやつきが更にひどくなる。
「王女のする表情ではありませんよ、アイラ」
「いやいや、なるほど……つまり決闘の時も視えていたんだな？」
頷きを一つ返す。アイラが大きく体を反らせて伸びをして、テーブルに拳を叩きつけた。
「自分がどこに注目しているか視られてしまうんじゃあ私が不利じゃないか！」
「貴方は私よりも六年分成長しているのですから良いではないですか」
大人気ないなぁ、と同い年ながら思いつつ、せめて同じ１９歳の体格であったらとも思わないでも無いので無意識のうちに口調がきつくなってしまう。
「まぁそれは今更かなわぬ夢だな。外見年齢と寿命の関係はまだ数十年分からないだろうが、ともかくとっかかりが少しは見えた」
「ラオで過去に起こった話からこの不利な状況を挽回出来ると？それはいささか話が飛躍しているのではないでしょうか」
食事のために畳んだ地図を改めて広げて、アイラが７つの石をラオの上に置く。

再開してからの僅かな間に、何度この人に驚かされただろう。
それとも７という数字を口にしてしまった私が悪かったのだろうかとフィオは表情には出さずに苦悩した。
アイラが石を置いた位置は若干のズレがあるが、それぞれの領邦の中心点に置かれていたのだ。

「今まで起きている事件と我々の調査結果、として７という数字からの私のカンだ。まぁこれが全部当たっていることは大事ではないが……問題はココだ」
アイラが指をさした石は、かつてフィオの故郷だった土地に一番

近いものだった。
　ということは、エストに接している領邦ということになる。
「お前がここから来たかどうかは差し置くとしても、この位置にあるであろう魔族が攻めてきた場合、エスト王国自体がまずい事になるだろうな。どうにかしてここの領主とやらと交渉をしたいんだが……どうかな？」
「私からはお答えできません」
　そうか、と頷いたアイラはおもむろにベッドに歩み寄ると、立てかけてあった剣を手に取った。

「なら、行くしかないだろうな」

　演技も忘れて「は？」という声がフィオの口から漏れ出る。
　部屋着をバッサバッサと脱ぎ捨てると実用一辺倒な皮製の服に着替え、髪を乱暴に結いあげると剣帯を腰につける。
「何をしてるんだ、フィーも行くんだぞ」
「行くって……ラオにですか！？」
　慌てて立ち上がったフィオも、先ほどまで持ち出していた変装道具一式を手にとるが、いまいちアイラの狙いが読めない。
「内乱中にラオの侵攻を受けないように説得に向かわれるおつもりなのですか？」
「いや、それもそうだが……それ以上の事を頼みに行くのさ」

　最近になってフィオも理解してきた事が2つあった。
　一つは、振り向いたアイラの不敵な笑みだ。この表情をしている彼女はロクな事を言い出さない。
「国内の相手をするのが精一杯の戦力で外国勢力が怖いのなら、第三の勢力にそれを抑えてもらえばいいじゃないか」
　そんな夢見がちな事をどの口が抜かすのか。
　下手をすればアイラがその第三勢力による暗殺の的になっていた

かも知れないというのに……。
内心で呆れながらも、これがあるからこそアイラはアイラ足りうるのだとも思う。

とりあえず侍女として自分のやるべき事はなんだろうと思案したフィオの答えは、手近にあった大きめのローブをアイラの頭に引っかぶせる事だった。
「……たとえ服装を地味な物に変えたとしても、その立派な赤毛とアイラの顔を見れば、正体がバレてしまいますよ」
胸も尻も分からぬくらいのローブを羽織っていれば、男としてごまかせるかも知れないと思ったとは流石に言えない。

そして、フィオが理解してきたもう一つは、自分の頭の上に乱暴に乗せられたアイラの手だ。
「なるほど、やっぱりお前が居ると助かる」
まるで気が回らない男のように髪をクシャクシャと暴れさせられる。
けれどもそこにはどこが優しさも感じられて、何とも言えない気分にさせられる。

ともあれ。
これだけ自信があるように振舞っていても、成功する見込みがあるわけではないだろう。
外に出たら自分にできる所まではアイラを先導しなければなるまい。
扉の前で警護をしていた兵士に止められているが、それくらいは自分で何とかしてもらおう。
顔を隠して後ろについて行きながら溜息をつく。

どれだけ大変なことをしようとしているのか分かるのに、胸の内

で湧き上がる思いは何だろうか。
そこに明確な名前を見つける事はせず、胸の内深くにしまい込んで侍女は王女を追った。

2―3

戦闘は劣勢だった。
その二番目の理由は敵が自分たちの倍近く居ることだったが、一番の理由は隊長である自分が利き腕を負傷してしまっている事。
奇襲の初撃を利き腕で受けたのがマズかった。
相手が通常の魔族ならばそれで受け切れたが、まさか人間の三倍ほどのサイズになっている奴が相手だとは思わなかった。
まぁ逆の腕でそいつを斬り殺せてる俺はやっぱり今日もノれてるがな。
周りの状況は視界に入れつつも視る事はしねぇ。意識はあくまでも目の前の一人、そして次の一人だ。そぉら、足が全然動いてないぜ？おいおいお前は同じリズムでブンブン振り回すだけかよ……ってチャムカの奴がちょっと苦戦してるな、あいつの相手も斬っておくか。

一歩動けば血が舞って、腕を振るえば首が飛ぶ。
止まること無く動き続ける男は本調子でなくとも、常人からみれば狂気のような速度で刃に血を吸わせてゆく。
頭が虎に……否、よく見れば猫と化している魔族が目の前で自分の仲間の首に牙を付き立てていた。
心の中ですまねぇなと弔いを捧げつつ、彼はその強敵に向かって剣を構え……
「そこの人間たち！助太刀するぞ！」
赤い風が直情から敵を真っ二つに切り裂いた。
獅子。
男の頭に一瞬だけそんな言葉が浮かぶが、後ろから風切り音と共に迫る刃に振り向きながら剣を打ち付ける。
「どこの誰だか知らねえが……そっちは任せるぞ！」

応！と応える背中の声は、女の声だった。

◆

アイラと二人で正体を隠しながらの行程は予想以上の困難だったが、ある意味では想定よりも快適な旅と言えた。

まず、何よりも問題だったのはアイラが予想以上に、忍ぶには向いていない人物ということだった。

王女であるからには当たり前なのだが、何をするにしても威圧感と威厳を隠すことが出来ない。道中の村々でフィオは情報収集のための聴き込みを行なっていたのだが、王女は全くの役立たずだった（数少ない王女らしさに喜ぶべきかも知れない）。

アイラの話し方とあまりにも要点を狙いすぎた会話は、一般的な農民や村民にはついていけないのだ。

懸命にも初日で見切りをつけたフィオは、アイラに”殺気を押し隠せない物騒な傭兵”の演技（実際にはよく見えるように剣を下げさせ、顔を隠して押し黙らせていただけなのだが）をさせることにして、情報収集は一人で行うことにした。

王女付きの侍女として悩ましいことだが、代わりに野営をする時のアイラはまたとないほど頼りになった。

森に入っていく王女を放っておいて火の番をして待っていれば、王女はあっという間に野うさぎの一羽を取って来て調理するし、食してはいけない植物の知識なども備えていたからだ。

世話のしがいが無かったという意味では、侍女として残念だ。

ともあれ。

こうして男女の役割が逆転した状態で４日ほどが過ぎ、二人はフィオの故郷であるラフラネに近づいていた。

◆

「……ここらの景色はあまり変わっていないんだな」
ラフラネに近づくにつれて緊張していたアイラだったが、その一言と一緒に肩の力を抜き、一緒にフードを取り去ってまわりを見回し始める。
ラオの話を聞いたならば、誰しもが思い出の土地がどの様に豹変してしまったか不安に駆られる。活版印刷や写真技術などが無いレーネルダンでは、口伝と自らの記憶でしか、景観を自分に得ることが出来ないからだ。
気丈夫の彼女をしても不安を覚える事に、フィオは少し安心した。
自分のことを覚えていてくれたように、アイラはこういう事を心配できる人なのだと。
不安を増長させないよう、フィオは多少声を明るくする。
「今はもう人は住んでいませんが、村の中まで行けばそれなりに衝撃的な光景が待っておりますよ」
「それは……ありがたくないな」
フィオも好んで見たいものではないとは思っている。
だが、アイラがラオの現状を目にしたことがなく、それを知る必要があると思っているのであれば、自分の知る限りを伝えるべきだとも思う。

「アイラは今までに一度もラオをご覧になられていないのですか？」
「……お前のそのヘンテコな口調にずいぶんと慣れてきてしまったな。
私が実際に目にしたことがあるのはラオへの防衛部隊の巡回に混ぜてもらったことがある程度だ」
「防衛部隊…ですか」
心を抑える訓練をしているフィオの口調には何の感情もこめられていなかった。
だからこそ、その返答に苦々しい思いがあることが読めたアイラは足を止めてフィオの顔を見つめる。

「私が知らないことがあるなら遠慮せずに言え。私は”でしゃばり”な王女ではあるが、所詮王女相手の待遇しか受けてきていないんだ。私には知らなければならないことが多い」
では、と一言おいて
「アイラがご自分でそう仰られるのであれば仮借なく申し上げますが……私達ラオ側の民は彼らのことを『略奪部隊』と呼んでおります」
言ったフィオはアイラの表情が苦痛に歪むのを受け止め、
「……それは正規の常備軍ではなく、領主達が集めている私兵の事か」
搾り出すような声にフィオは黙って頷く。
近衛軍と黒狼と白狐の三軍は、常備軍として厳しい規律の元、統制を保っている。
だが有事の際に領主がかきあつめる領地民の兵士はそうはいかない。
彼らは元々はただの農民や平民なのだ。
ラオが魔族の住まう土地とされてから、隣接する領主は常備軍とは言わないまでも定期的に兵士を募って巡回し、防衛線の内側が荒らされていないかを見てまわる必要が出来てしまった。
そんなことを繰り返して早数年。日々の暮らしや農業を圧迫された領民を納得させるための方便や仕組みが必要だった。
それが、
「元々はエストの村だった場所を『魔族の村』として、略奪させるのかっ……！」
「はい、非常に上手く出来た仕組みかと思われます」
率直に返したフィオにアイラが拳を飛ばす。
すんでの所で侍女がそれを躱せたのは、予めこうなることが分かっていたからだ。
「上手い仕組みだと……？自分の村がその対象になっているお前がそれを言ってどうするんだ！！」

「程度の差はあれ、領主の方達も苦肉の策なのです。戦時に耕した畑が自国の兵士に荒らされるのも、私達にとっては茶飯事です。彼らはラオの麓までは来ません。あくまでも人が居なくなった村からのみ、略奪を許可しているだけです。回収と言っても良いでしょう。戦争行為に発展させないためもあるでしょうが、残っている人の家は荒らさぬように取り決めていますし」

そして、フィオに抜き出せる最大のカードはアイラの動きをピタリと止めた。

「これは、ギルバルト前王もご承知の事で御座いました」

目の前で表情を失った彼女を見れば、王女に知らされていなかったのは明白だった。

だが、フィオは手加減をしない。彼女は王女であっても、アイラに引き止められたフィオは幼馴染のフィオなのだから。

「愚考ではありますが、前王の治世において諸外国から国を守り続けたのは、取るべき悪を拒まなかったからかと存じます。

こんな事、無ければ良いとは私達も思っておりますが、自分の住んでいた家から奪われるのは納得済みなのです」

だから、わかってほしい。

最後の一言は口に出してしまえばいいのに、どうしても言葉に出来なかった。

言わずとも理解して欲しいという一念もあれば、そうでない感情もあった。

構えを解いたアイラは「すまない」と「急ごう」の二言以外は口にしなかった。

「もうしばらく歩けば、昼前にはラフラネの端に辿り着きますから」

大股で歩くアイラと離れぬよう小走りになりながらも、フィオはアイラの左背後を保って後を追った。

◆

そして、異変を先に感じたのはフィオだった。
侍女に案内されるがままにラフラネに辿り着いた二人は、村の中央にあるかつてのフィオの家へと向かっていた。
最初のうちは記憶にある風景を思い出せなかったアイラも、次第に見覚えのある家や木を見つける事で足が早まっていた。
「アイラ」
短く呼び止めるその声に王女は一瞬で身を低くし、腰の剣に手をやる。
周囲を見回すが王女の目には目ぼしい異変は見当たらず、じっと固まっているフィオの様子を窺う。
彼は足音を立てぬようにゆっくりと近くの一軒家に近づくと、壊れている外壁に手を触れて何かを確認する。

「この先で何者かが争っているようです」
「それは現在進行形でか？なぜ分かる」
「この村はだいぶ早い段階で”略奪”を受けているんです、略奪部隊はもうここには来ません。そしてついこの間私がここを訪れた際にはこの家は破損していませんでした。
この傷はおそらく斧のような刃のついた重い武器で削られています。それに空気に触れて間もなく、土壁の色も明るいままですので……それに森の奥の方からおかしな音が聞こえてきませんか」
言われてから侍女の指差す先に意識を集中すると、たしかに森が大きくざわめく音がする。
それは小規模ながら、戦場で森の中を軍隊が進むような人工の音だった。
「……よくこれに気づいたな」
「私の場合は視覚で異変に気づいてから、慣れ親しんだ森の音に違和感を感じただけですので。アイラこそよくお分かりになられましたね」
「これでも深い森の中の砦を落としたことがあるからな。

それよりも争っているのが誰か気になる。バレないように近づけるか？」
フィオが静かに頷いてから音を立てずに、しかし走るように先を行った。

通りを避けて、家を迂回し、彼の先導のままに王女が走る。
斜面のやや高い位置にある大きな木の幹にたどり着くと、金属がぶつかり合う音と喚くような罵声が聞こえ、断末魔と血の臭いが踊る戦場が眼下に展開していた。
争っているのは人間と魔族の集団。数は圧倒的に魔族のほうが多い。
随分な乱戦になっていて、敵味方が入り乱れている状況だったが人間のほうが味方とも限らない。
彼らの服装が正規軍の軍装などではなく、使い古された皮の上に要所だけ金属板が付けられている粗末な鎧だったからだ。
アイラはそこまでを即断して侍女に耳打ちする。
「フィー、お前はどう見る？」
「今は理由を申せませんが、山賊風の人間たちに加勢すべきです」
思った以上にハッキリとした答えに王女がニヤリと笑う。

「それはラオの事情からだな？」
「申せませんとお断り致しておりますが？」
ツンと顔を反らすフィオに、それ以上は追求しない。
為すべきは言葉ではなく、剣で成すべき時だ。
「アイツらとの橋渡しはフィーに任せる」
王女は有能な侍女が返事を返すよりも早く斜面の上で危なげなく立ち上がると、二階ほどの高さをものともせず飛び上がって
「そこの人間たち！助太刀するぞ！」
真下で今にも人間を食い殺そうとしている猫頭の魔族に向かって兜を割るような斬撃を見舞った。

一緒に飛び出すタイミングを完全に失していたフィオは、アイラがその場で山賊たちに斬りかかられないかが心配だったが、どうやらその必要もなかったらしい。彼らの隊長がいち早くアイラと強調する姿勢を見せたことで、彼らもアイラの事は気にせず魔族との戦闘を続行している。

自分の身を晒さぬよう注意深く移動しながら、フィオは戦場全体の視線を俯瞰するように視た。

敵対の色の赤い線が戦場を覆い尽くす中で、戦意を失っている一角は色が薄い。

フィオには乱戦の中央で切り結びながら敵をなぎ倒して行く技術は無い。あくまでもフィオが身に付けている剣術は1対1に特化した技術なのだ。だから、そのようにした。

彼は戦場の外縁に沿うように移動しながら一人ずつ敵を屠る。

敵意の色が濃い視線を斬り殺しながら、戦意を失いかけている色の薄い者は見逃す。

誰の視界にも留まらぬように動き続け、人間側の死体を漁る。

見た目通り高級な物は見につけていなかったが、懐を漁ると探していた物を探り当てた。

（さて、これで最低限の役割は果たしましたが……）

アイラは無事だろうかと彼女を探して目線を泳がせると周囲の視線が集まっているのが分かった。

王女が参戦してから、魔族側の損耗率は加速度的に上がっていた。

戦場のあちこちで人間側に手の空く者が現れ始め、フィオが視線を彷徨わせる頃には戦闘は終わりかけ、ほとんどの人間の視線が二箇所に集中していた。

獰猛な獅子のような苛烈さで敵を切り倒していく赤毛の大女と、静かだが確実に敵を処理していく黒衣の男だ。

フィオはアイラの剣捌きを見るのは初めてだったが、彼女にまつ

わる噂からそこまで驚きもしなかった。だが、黒衣の男の実力には在野にこんな実力者がいたのかと驚嘆した。
まず、彼は光を反射しないように黒く加工した革製の服しか着ておらず、金属による覆いの一切が取り払われている。彼は敵の攻撃を避けるか、剣で受けるかしかないのだ。
にも関わらず、敵の攻撃を軽々と避け続ける顔には笑顔に似た表情さえ浮かべている。
唯一色がついているとすれば、彼が額に巻いている緑のバンダナくらいものだが、それも返り血を浴びて赤黒く染まっている。
体捌きを観察していると彼の利き腕が右腕だと分かるが、左に剣を構えているにも関わらず、全身の膂力を上手く剣に乗せ、敵を一刀で片付けている。
フィオは自分の腕前であれば、一対一ならば例え相手が正規騎士であろうとも苦もなく倒すことができるが、彼には素直に適わないと思った。
利き腕が使えない分アイラが上回っているが、黒衣の男の剣術は妙に整っているが我流だ。
万が一ということもあり得ると判断したフィオはアイラに加勢せず、来たる一瞬を待ちつづけた。

王女と男がほぼ同時に最後の魔族を仕留める。
山賊たちの野太い歓声が上がる中、振り向いた二人が気の知れた親友のように笑みを交わしたタイミングで、フィオは男の視界の中に死体から回収した有るものを投げつける。
フィオが放ったのは羊皮紙とも言えないような皮切れだった。だがそれには記号のような絵が描かれていて、
「ラディール公の名において、同族同士の争いを禁じる！双方、剣をおさめよ！」
フィオの声が森に響き、男たちの歓声も静まった。

自分たちが味方である事を示すために次の一言を話そうとした瞬間、アイラが恐るべき速度で走りの一歩を踏み出した。
「アイラっ！？」
フィオを含め、黒衣の男以外の全員が武器を再び構え直そうとしたが、全員の視線が集中したその男はあろうことか剣を足元に投げ捨てた。
「おかしらぁっ！？」
アイラもあと数歩の所で剣を腰の鞘に収め、素手同士で二人は激突音が響く。
と、当事者以外の全員が思ったその時、二人の歓声が上がった。
「ガル！お前ガルか！？」
「おいおい、エストのお姫様がどうしてこんなとこにいんだよ！」
常人離れした二人が実は腕を打ち合わせて盛大に再開を祝しているのだと気づいた時、場の全員が脱力して剣を取り落とした。

2―4

「で、どういうことなのか説明してくれんだろなぁ、お頭よぅ」
ラフラネの森で戦った全員が、かつてフィオが住んでいた邸宅に移動していた。
アイラがガルと呼んだ男は部下たちの中でも年重（としかさ）の副長であるオルロにそう問われ、面白そうに笑った。
「お前らも聞いたことあるだろう？そこの赤髪の大女が、エストで噂の”赤獅子”こと、王女アイラ様なのさ」
邸宅の広間は、吹き抜けになっていて、座り込むものや寝ているものもいるが、５０人強の全員がそこに集まっていた。一階の応接スペースに置かれている円形のテーブルにどっかと腰を下ろした男は、周りが驚いていることなどどこ吹く風で、飄々としている。

広間のあちこちで会話が飛び交った。
「あれがあの山賊狩りの王女様か」
「俺達も狩られちまうんじゃねぇのか？」
「そんなことより、あれだ、金羽の胡蝶とかいう大層な呼ばれ方もしてたじゃねぇか。ありゃ嘘だと思ってたぜ」
「俺もだ。暴れん坊の王女を嫁さんに出すために流したホラだと思ってたぜ」
「さっきの剣さばきを見なけりゃあ、ガタイは良いが見てくれはいい女だぁなぁ」
「ちげぇねぇ。だが嫁にゃもらえねぇな。包丁持っただけでアレを切られちまいそうだ」
下卑た笑いが所々で起こっているが、ガルの反対側に座っているアイラは苦笑しつつも全てを聞き流した。
そして笑いがひと通り収まって多くの視線が集まったことを感じ

とると、山賊の副長に軽く頭を下げる。
「そういうわけで、私が王女のアイラ＝ミラ＝フォン＝ノワールだ。以後、よろしく頼む」
その後ろに控えるようにして立つ侍女が軽くため息をついているが、オルロにはそれを観察するだけの余裕などなかった。緊張に体を硬くしながら、ガルを睨むようにして見上げる。
「ほんとなんですかい？」
「あぁ本当さ、信じろよオルロ。この女こそが今エスト中で命を狙われているギルバルト殺しの主犯で、一級の国家反逆罪に問われている王女さ」
口調は先程までと変わらない。
だが男をまとっている空気は明らかに一変した。

本気だ、とフィオもオルロも重心を低くする。この男がいつ腰の剣を引き抜くとも分からないと感じた体。
山賊団の副長として長年ガルの元に居続けているオルロが表情を引き締める。
それと同時に、フィオもアイラをカバー出来るように体の重心をずらして腰の武器を抜き払えるようにする。
動きを見せなかったのはアイラとガルだけだ。
「なぁ、どうなんだよ姫さん。本当にアンタがギルバルトのおっさんを殺したのか？」
元国王を呼び捨てにしておっさん呼ばわりとはとんでもなく肝が座っているが、彼の飄然とした言葉には、確実に怒りが混ざっていた。

オルロ以下、山賊団員のほとんどはお互いの出自を知らない。興味がないのが半分と言いたくないのが半分。お互いの利益が釣り合った結果の寄せ集めの集団、過去を問わない刹那的な集まりだ。
だから王女と知り合いで逝去した国王を呼び捨てる頭領に対して

尊敬に似た畏怖を感じることはあっても彼らの団長は団長であって、彼に対する不信は無かった。
山賊団の空気はガルの怒りに乗せられるようにして剣呑さをましていく。

だがそんな空気をアイラの一言が一瞬で凍りつかせる。
「それ以上ふざけたことを抜かしたら、殺す」
アイラは極上の笑顔を浮かべたままだ。
「手負いのお前如き、何度でも殺せるぞ？私とこのフィオが入ればここにいる全員を殺すことはできなくても半分以上を殺して揚々と引き上げることが出来る」
「おいおいおい、そりゃさすがにふっかけすぎじゃねぇのか？」
「さて、出自の分からぬ山賊如きが理由も語らず大きい口を叩くな？」

ぶつかり合う二人の視線は、間違いなく火花が散らしている。
絶対に視てはならないとフィオは心して済ました顔で笑顔を浮かべ続ける。
二人の表情を交互に見比べたガルは大きく息を吐き出して右手をアイラに差し出した。
アイラも無言で手を差し出し、握手を交わした所でようやく全員が力を抜いて腰を下ろした。
「さて、クラウスの野郎ならまだしも、お前がおっさんを殺したとは思えねぇ。だとすりゃあ逃げ出したくせに、どうしてこんな所にいる？」
「この辺りを治めている領主とやらに協力を要請したくてな」
ガルの眉がぴくりと跳ね上がった。
そして彼の目線がアイラから後ろのフィオに移動するのを確認して、

「別にフィオは私に何も漏らしていないぞ。そう睨むのはやめろ。美少女を威嚇するのが趣味なのか？」
「まさか、女の子にゃあ優しくするのが俺の主義さ。……だがお前さんの正体次第では女扱いは取りやめだ。その辺どうなんだい、フィオとやら」

フィオはうやうやしく頭を下げ、ゆっくりと会釈してから胸元を広げる。もちろん誘惑のためなどではなく、首にかけた小さなメダルを取り出すのが目的だ。
アイラは興味深そうにその様子（むなもと）を観察していたが、それを見た瞬間にざわついた山賊団の空気に意識を引き戻される。
侍女が肌を晒したことにではなく、首から下がるメダルを見ての反応だ
それが何を意味するかまでは分からぬまでも、彼らにとってフィオが侮れない存在だとわかればアイラには十分だった。

いち早く自己を回復させたガルが、若干声に熱をはらませながら問う。
「姫さん、こいつの持ってるこれの意味わかるか？」
「知らん。聞いてないからな」
肩を大きく落としたガルは最大級に侮蔑をこめた溜息をつく。
むっとしたアイラだったが、ガルがフィオと同じように首元から動物の骨を削った首飾りを取り出すのを見て口を閉ざす。
テーブルの上に置かれた骨飾りを手にとって調べる。
そこには何の変哲もなかったが、大陸交易語でラディールと記されていた。
「ラオに領主がいるのは知っているみたいだな。そこの嬢ちゃんがさっき俺達を止めるために口にしたのはこの辺りの領地の名前で、ラディールと俺たちは呼んでいる。
領主の名はベアトリクス＝バルデルライン。そしてそいつの領民

は与えられている首飾りで階級が分かるようになってる」
「フィオとお前はどっちが高い？」
「……8段階あるうち、俺のは下から4つ目で、そいつのは一番上だ」
唖然とした表情のアイラが振り向いてフィオの肩を強くつかむ。
「おい！聞いてないぞ！」
「話せないと最初に申したではないですか……」
「どうやらその分だと、本当に知らなかったらしいな。そいつが第一階級だって知らずにあの女に接触しようだなんて、無茶がすぎるぜ」
アイラが侍女の肩を強く握って揺さぶっているのを見て、ガルはテーブルから腰を浮かして椅子に座りなおした。それは戦闘態勢をといて話し合いだけに応じる意思表示でもあったのだが、アイラはこっちを見る素振りすら見せやしない。
というか、侍女の顔に脂汗が浮いてるが、あれは相当痛そうだな。
先ほどガルが口にした言葉に偽りはなかった。
外から見たら魔族は一括りだが、その実態にはかなりの隔たりがある。
それは人々に訪れた変貌があまりにも多岐に渡るため、魔族同士でもお互いを仲間と認めない事があるからだ。
そして広大なラオの土地では、となりの山ですら交流が無いことがある。
領という単位でまとめられてからはマシになったものの、各領地毎にいまだ大きな交流は無く、抗争が続く。
実際には外に対して集団で繰り出すほどの余力はラオにはないのだ。

人間に対して害を為しているのは、少数のはぐれ魔族とでも言うべき非所属の愚か者たちだけ、それを掃除するのがラディール配下の遊撃隊である自分たちの役目なのだが……。

領主達の力はほぼ拮抗していると言っていい。だがその中でもラディール公と呼ばれるベアトリクスの影響力は大きい。

いち早く魔族たちをまとめ、領と呼ばれる境界線を引いた政治力はならず者たちが集まっていただけのラオでは異質であり脅威だ。

何よりもラディール公は人前に全くと言っていいほど姿を見せない。その隙の無さはラオにいる荒くれ者よりも、宮廷における陰湿な政治劇に近いうさんくささがある。

ラディールでは階級を上から第一階級と呼び、直接彼女と顔を合わせられるのは第二階級までだ。

第五階級のガルは特別な事情から顔を見たことがあるが、それすらかなりの特例だと伝え聞いていた。

「それで、実際にはどうするつもりなんだ。あの女はどこに住んでるかも定かじゃないぜ。闇雲にお前がラオの中を歩いたら、見つけるまで一年はかかるだろうよ」

「何とかならないのか、フィー？」

「私も、呼ばれない限りは公の居場所は掴めません」

「まぁ元々お前をメッセンジャーにするつもりは無かったしな……仕方ない、行くか」

行く、とは随分と簡単に言ってくれる、とガルは笑った。

「行ってどうするつもりだ。協力を要請すると言っていたが、ラオは今でもエストと不可侵のはずだ。すでに取り決めている条約を最確認するためだけに、魔族の土地に踏み入れさせるわけにはいかない」

テーブルの下で、わざと音を立てながらガルが剣を抜く。構える

のは相変わらず利き腕とは逆の左だ。
腰に手を回すフィオをアイラは右手を伸ばして遮る。
「それ以上の事を要請しにいくのさ。今回の内乱を治めるための一手でもあるが、そこから先に繋がる私の治世においても、公の協力は必要だからな」
「お前の目指す政治になぜラオを巻き込む！」
「決まっている」

王女はゆっくりと腰に下げた剣を引き抜き、正眼に構える。
「私の目指すエストの平和……そこには魔族との共存が必要だからだ」

夢見ごとを、と吐き捨てたかった。
ガルは静かに目を閉じた。いまでもこうやって思い出そうとすれば色々な奴らの事が蘇ってくる。
神災の直後からラオの近辺で暮らしてきたガルにとって、自分は魔族側だ。例え体は人間でも、自分は魔族側に生きる人間なのだ。

だからこそ知っている。
エストや、他の二国がどのように自分たちを処してきたのか。
冷静に考えれば、突如の災害によって民の混乱を得ないために、分かりやすい身代わり（スケープゴート）として自分たちが必要だったのだろう。
だが、そんな理由では感情を抑えることは出来ない。

そんなものを気付きあげたエストの王族が容易く口にした「共存」。
これを笑い飛ばさなくて、どうして俺は、俺たちは、死んでいった奴に報いる事が出来るのか。
けれどもこれらの思いは一つとして言葉にならなかった。

（これは、俺の……甘えだ）
だから、ガルには選択肢が一つしか無かった。
答えは剣で。
それこそ無知ゆえの甘い判断かもしれない。
けれども、言葉や頭で考えては結論が出ないことだというのも分かっている。自分が今まで命をかけてきたのは口先ではない。この腰に吊るした鉄の塊だ。
相手も剣士。ならば答えを出せるのは剣だけだ。

目を開けたら、斬る。
そう強く念じるガルの耳に、一つの音が聞こえた。
誰もいないはずの真後ろから、急に人が床を踏む音が聞こえたのだ。
アイラとはテーブルを挟んでいたはずだ。そして副長の気配も変わらず右横に感じる。
では、誰が。

「そこまでにしてもらおう、エストの若き王女よ。こやつは我の大事な手駒。ポーンの様に失わせるには惜しいでな？」

艶やかさが過ぎる、女の声だった。
知性を感じさせるのに、熟練の娼婦のように心の中に入り込む。
それでいて媚びる様を一切感じさせないその人は、
「貴公がバルデルラインか」
アイラの声に女が頷く。
「いかにも。私がラディールの主、ベアトリクス＝バルデルラインよ」

2―5

フィオの視界の中には剣を構えたアイラと、同じく剣を構えたガルのみが映っていた。
その中に、不意に女が現れた。
足音も気配もなく、気づいたらガルの後ろにその女は立っていた。
ふざけていると自分でも思うが、正体を表した彼女を確認して、それも止むなしと意識を切り替えた。
ベアトリクス＝バルデルライン。
彼女の事はよく知っていた。
新災で手に入れた異能と生来身についている技術を合わせればこの程度の事は彼女にとって造作も無い。
気になったのはラディール公ではなく、王女だった。
自分の油断に怒るように、気に満ちた背中は膨れ上がるように力を溜め込んでいる。
よもやすぐに斬りかかる事は無いと思うが、体はラディール公の存在に反応して頭を垂れてしまう。
間に入る間もなく、アイラの冷徹な声が飛ぶ。
「何故ここに来た、ラディールの主よ」

◆

賢い女だ、というのがベアトリクスの第一の判断だ。
この王女は余分な物を好まず、物事の本質を捉える傾向がある。
然るに、ストレートに踏み込むのは危険だ。この女とリズムを合わせたら、自分でさえ飲み込まれてしまいかねない。
だから十分に溜めを持っての返答はもってまわった言い回しになる。
「なに、簡単よ。ぬしが本当に噂通りの女か、確かめに来ただけの

こと」
それはどうやら、修正されるとしたら上方修正になるだろう、という理解と共に。
ベアトリクスは両手を広げてテーブルに沿うように近づいていく。
まるで相手を抱きとめるような体勢に加え、武器を何一つ身に付けていない、堂々とした歩みだった。

◆

危ない女だ、というのがアイラの第一印象だった。
迂遠な言い回しは気性によるものだろうが、本質を逃がす事はなさそうだ。
油断して飲まれたら最後、手のひらの上で踊らされてしまいそうな予感が後頭部を刺激する。
嫌な予感がある時の合図だ。幼い頃、夜伽の教習としてやってきた貴族女性や、ミリアムに適わない時の感覚を思い出す。
それはつまり、上手くやれば成功への切っ掛けになるという意味でもあるわけだが。
相手が無防備である事を確認した上で、アイラは剣をおさめなかった。
たとえその身一つであっても、魔族には何が出来るか分からない。
テーブルを回って近づいてくるその女に対して切っ先を合わせ続ける。

◆

そして二人は静止した。
間に跪いて俯くフィオを挟んで。

◆

なんだ、これは。という思いが先に立った。どうしよう、などと思う余裕すらない。
目の前に二人が立っている。
ベアトリクスはアイラの構えた剣の先に顎を乗せるような距離に居る。対するアイラもガルなど視野にも入れず、ベアトリクスに正対していた。
「ここに来た要件は二つある。一つは、ぬしの目的と同じく、今後を含めた話し合いじゃ。そしてもう一つは……」
頭の上にベアトリクスの左手が乗せられる。
「”私の”従者の事で、な」
顔を上げることが出来なかったのは頭を撫でるように押さえつけられていたからだったが、フィオにとっては幸いだった。
深く突き込むために軽く引かれた刃を、アイラが突くように付き出そうとし、ベアトリクスはその腕が伸び始める前に右手で受け止めていた。
「フィーは”私の”侍女だ」
「おや、エストの王女は人の物を盗るのかな？」
アイラはベアトリクスが指先でつまむようにしている刃を捻るように引いて、指が離れるのを確認すると同時に再度突き込む。
さすがのラディール公も一歩を引いてそれを躱して、二人の間には距離が生まれた。
「こいつはな、神災のあと生きる気力も無くしてくたばっていたんだよ。それを拾って生かしたのは私だ。じゃがぬしはフィオに対して何をしてやった？」
アイラが悔しそうに歯ぎしりをして耐える。
仕方がない、とフィオは思った。それを責めることなど無いと。
それでもアイラは逃避を口にはしないだろうと侍女は思い、王女はその通りに言葉も無くただ剣を構え続けていた。

「くふふ……そう悔しそうな顔をするでないぞ。なにせフィーを開放してやりにきたのじゃからな」

フィオがバッと顔を上げてベアトリクスを見つめる。

ベアトリクスの宣言に対して驚きを向けているのが誰の目から見ても明らかだ。

だがその表情の中に、わずかばかりの戸惑いも隠れていた。

「それは……私が任務を果たせず、アイラに仕えているからでしょうか？」

「今回の処置は追放ではなく開放じゃぞ。確かに任務は果たして欲しかったが……今のこの状況も悪くはない。それ故の褒美だと思っておくれ」

さて、とベアトリクスはアイラの目を正面から見据え、顔からうすら笑いを消した。

「さて、アイラ王女、貴様がもってきた話、聞かせてもらおうか」

ベアトリクスは自分で引いた椅子に座り、アイラはフィオが引いた椅子に腰掛ける。

ゆっくりと腰を下ろしながらも、アイラは彼女を観察する視線を一切外さなかった。

なぜ普段は限られた人間の前にしか姿を見せない彼女が、ここに現れたのか。

そして自ら用があるといいながら、先に発言を譲るのは何故か。

迷う思考が無意識に視線を送らせてしまう。

論述ではない、とアイラはまず決断した。

論を戦わせるのであれば、後から相手の不備を指摘する事が可能な後攻を選ぶのが常道だ。それを外すほどの人物ではないだろうし、舐めてかかられているのならば食い潰してやればよいだけだ。

ではなぜ、と思う。

ここには外交的な証明をする第三者がいない。しかもアイラ側はアイラとフィオの二人で、他の数十人は全てラディール公の配下だという。

外交上でなく、ここで二人の国主が（ラディール公は正確には違うが）集まって協議する話。

それが自分の希望による甘い理想でないかを内心で確認し、意を決した。

「エストとラオの不可侵条約を、対ラディールとの同盟に改約したい。もちろん、今の私はそれを決定できる立場には無いが……兄を倒して王位についた際には、まっさきに履行させてもらいたい」

「断れば？」

「そうなったらラオの別の領主とそうなるだけだ。ラオも7つに分割されたまま、長くはもつまい。であれば、ラディール公が取るべき道は限られてくると思うが」

どうかな、と笑うアイラに、ベアトリクスも同様の笑みを返した。

「そうさのう。大体その考えはアタリじゃの。私からも提案したいのは同じじゃ。このまま魔族と人間がいがみ合っておっては、疲弊するだけ……しかし、他にも私に頼みたいことがあるのではないかえ」

ベアトリクスの笑みは先程よりも面白そうな、そう、見慣れたフィオからすれば”いやらしい”笑みに変わっている。

この表情をする時の公は、常に子供っぽく突飛な事を言い出す。過去にも何度かそれでとんでもないことを経験させられて……。

だけど。

それらは全て二段か三段飛ばしではあるものの物事の本質や必要な事からは外れていなかった。

だから、同じくニヤリと笑ったアイラの笑みに嫌な予感を感じたのは付き従う侍女としては甚だ体得したくない予感だった。

「同盟を締結する代わりに……イグヌスを抑えてほしい。方法は問わない。私が国軍を掌握して、体勢を整えられるまで……そうだな、一月だ」
無茶苦茶だ、と思ったのはラディール公以外の全員だった。
フィオとガルは互いに目線を交わし合い、お互いの正気を確かめ合った。どうやら相手の顔色を見るに、お互い正気で狂いそうな事は確認できた。

クフっと笑いをこぼしたベアトリクスは、前傾姿勢になってテーブルの上に乗り出す。
「随分と図々しい要求をするのじゃなぁ……あの軍国イグヌスを抑えよと、よくもまぁ軽々と申すものよ。しかも、私達が被害を受けたとしても、ぬしが成功するとは限らんのじゃ。私らがそれを受けると本気で思っているのかのぅ？」
「思っているさ。理由は三つ有る」
アイラも睨み合うようにして体を乗り出し、ベアトリクスとテーブルの周囲にいる二人にだけ伝わるような小声で話す。

「一つに、ラディール領が他の領地に比べて疲弊していないのはエストとの同盟があるからだ。他の領主達は表立ってイグヌスやミラと争っている。それゆえにその隙をついて生き延びているのが、ラディールなのだろう？であれば、どのような形であれ私達との同盟は捨てされるものではない。
そして第二の理由は、クラウスが反魔族派のトップだからだ。国外の反魔族派とのパイプも有り、奴が軍権を獲得したらイグヌスやミラと共同して、まず真っ先にお前たちをつぶしにかかるだろうよ。それに耐える自信があるのなら、今頃私はこの場で殺されているはずだ。
三つ目の理由としては……ラディール公、貴女が真に国を治める者として、殺すことよりも活かすことでの調和を求める人だからだ」

そこまで言って、アイラは体を戻し、椅子にピッタリと収まってから腕を組んだ。
対するラディール公は姿勢を固めたままだ。
「……最後の一押しが、初対面の私の感情というのは、まだまだじゃのう」
「そうかな？綿密な調査と報告に基づいた上での判断だったのだが……外れていたか？」
今日一番に楽しそうな笑みを浮かべながら、ベアトリクスは立ち上がった。
同じような仕事を嗜んでいるフィオからすれば明白なやり取りだ。ラオの内部で現地調査している者からの情報が有るんだぞ、という主張であり、裏返せば脅しのようなものだ。

ベアトリクスはゆっくりとテーブルを回ると、フィオの前、アイラの座る椅子の横で立ち止まる。
アイラに座ったままで居ろ、と手をかざすと、
「良かろう。賭けではあるが、お互いに綱渡りをしなければならない情勢である事は事実じゃしな。もちろん二国の関係は対等な同盟じゃ」
「もちろんだ。そこまで助けてもらって、こちらに有利な同盟を結ぶほどの余裕は無い」
「クフフ……良い心がけじゃなぁ。自分を見誤らないというのは貴重な美徳よの」
どちらからともなく差し出された二人の手がしっかりと結ばれる。
ガルが小さく手をパチパチと叩き始めると、周りの山賊団もそれに習って拍手しはじめた。
それが収まるころ、先に次の話を出したのはベアトリクスだった。
「さて、それでは最後にフィオ。お主の事じゃが……」
「なんなりと、ベアトリクス様」

頭を下げようとしたフィオの顎に、ベアトリクスの手が添えられた。
「お主は今より、ラディールの家から離れる事となる。我が家に帰る所はなく、我が家族である同胞達もこれからは他人じゃ。それでも……この淑やかさの欠片もない獅子の元に行くかえ？」
おい、と言うアイラはベアトリクスの顔を横から覗いて二の句を止めた。
そして視線をフィオの顔へと移す。
侍女の答えは簡潔だった。
「今まで、お世話になりました」
笑いながら言う彼の首元から、ラディールは引き千切るようにして第一階級の証であるメダルを奪う。
強引なやり方にフィオが顔をしかめた一瞬、

その隙に彼は何か柔らかい物が唇に触れるのを感じた。

えっ？という声を付くよりも先に目の前を轟音が過ぎていく。
アイラの拳が振り抜かれるものの、既にそこにラディールの姿は無かった。
「クハッ、私好みの良い顔じゃったぞ、フィオ。お主は我が家、我が家族からは抜けるが、この指輪がある限り、私と同等の権利を主張出来よう」
そう姿なき声が言うと、虚空から指輪が飛んできた。
受け止めたフィオが手の中を覗き込むと、銀細工で出来た細かいしつらえの指輪がそこにあった。
「王女よ、そこにいる戦士団は貴様に貸してやろう。聞きたい情報は全てガルから聞くと良い」
「チッ、偉そうな口を叩く前に姿を見せたらどうだ！？」
アイラが激昂して指輪が飛んできた方向に向かって剣を振るが、当然の如く虚しく空を切るだけだった。

そんなアイラに聞こえないよう、フィオは耳元で姿の視えぬベアトリクスが囁くのを聞いた。
「なぁに、家族で無くなる事は私にとってマイナスではない。家族でない男女のみが家族になれる工程もあるからのぉ」
「ご、ご冗談が過ぎませんか？」
「ほぅ。女にここまで言わせておいて冗談かえ？なんなら私の視線の色を確認してみてはどうかの？ほれほれ」
「……私如きには、畏れ多くて、とても……」
「そこかっ！」
アイラの鋭い一突きが耳の横を通りぬけ、近くにあった温度も遠ざかる。

王女の剣の腕前は信じているが、それにしても物騒すぎないだろうか。
「あの、アイラ……その、よく分かりませんが、とりあえず落ち着いて剣を……」
言葉の選択を間違えた！と気付いたのは王女の怒りの視線が自分に向けられてからだった。
「落ち着けだと！？このような辱めを受けて黙っていられるか！」
せっかく結んだ同盟相手なのだから、黙って受け取って欲しいとは言えなかった。
どうやって説得しようかと悩むフィオへの援軍は意外な所から現れた。
「恥ずかしい思いをさせられてるのはそこの嬢ちゃんだろう、アイラ。今はそんな事をしてる暇ないんじゃねぇのか？」
「そうじゃなぁ……最後に私からのサービスをくれてやるから、今のはチャラにしておいてくれんかえ」
何を抜け抜けと、とあからさまに不満顔のアイラだったが、続くラディール公の一言で顔色を変え、ガル達を連れて全力でルナルゥ

砦へ戻り始めた。

「私達の情報網でついさっき伝わってきた情報じゃ……白狐団はぬしらを裏切ってクラウス軍についたようじゃぞ。フィーデル卿が先陣、狐めが後詰となってルナルゥ砦へ向かっておるらしい。急いで戻ったほうが良いのではないかえ？」

3―1

雨が降り続いていた。
弱まることはあっても止むことを知らない大雨は恵みを通り越して大地を荒らし続け、世界を雨で埋めてしまおうとするかのようだった。
ラトリア城より遥か東。ルナルゥの西にはラオから流れ出している川があった。ベリエ川と呼ばれるその大河は、東に小高い丘を抱えながら大きく蛇行しつつ、北へ抜けていく。
ベリエ川の西では氾濫した河川を防ぐために、後詰として渡河できるタイミングを待っていた白狐騎士団（ブランシュルナルリッター）が救援活動に奔走している。
そして時を同じくしてその対岸では、丘の上を占拠して高台から見下ろす部隊と街道沿いに展開して丘を見上げる黒狼騎士団（セーブルガルゥリッター）が睨み合っていた。
高台に陣取るのは周辺一帯を統括するフィーデル卿の軍だ。エスト国内でも屈指の大領地を収める貴族であり、現領主のグルフ＝フィーデルは壮年を過ぎてなお一流の騎士であり、剣士でもある。
昼間でも視界の利かない大雨の中でグルフは援軍である狐を待ち、一方で守戦を得意とする狼達も攻めあぐねたまま睨み合いを続けていた。

◆

「で、どうするつもりだい、王女様」
黒狼騎士団の陣地に敷設された天幕の中でも一番奥、最も大きなそのテントの中で王女にぞんざいな口を利くのはガルだ。
黒の短髪の上に緑のバンダナを巻きつけ、包帯を巻いた右腕でスナップを利かせたジャブを空中に振るっている。手持ち無沙汰なのがありありと見て取れる。

天幕の中央に置かれた大きめのテーブルでは3人が席に付いていた。入り口に近い場所にガルが座り、その対面にはアイラが、ガルの右隣には黒狼騎士団の団長であるクリストフ＝ノヴァが怒り心頭と言った表情で座っている。

「こっちに戻ってくる途中であの使える侍女ちゃんと別行動を取っちまったのも気になるがよ、どうして動かない？　運良く雨が振り続いてくれちゃいるが、川のこちら側で敵に頭を抑えられ、川向こうにはそこのワンちゃんに匹敵するって言われてる白狐が控えてる。動きにくいのは分かるが、そろそろ何とかしねぇとマズイだろよ。それともルナルゥ砦まで引きつけて籠城戦でもしようってのかい？」

ガルの言葉の端々にはどことなく不満と鬱屈した感情がこもっていた。

だが、腕を組んだまま目を伏せているアイラは返事をしない。

アイラは現状を理解していながら、「今は待ってくれ」と繰り返すだけだったからだ。

ラオのラディール公、ベアトリクスとの突然の会合の後、急いでルナルゥ砦に戻ったアイラは騎兵だけを引き連れて道中で待機していたガルの部隊５０名と合流した。

雨の中、最低限の騎士団員のみを連れてグルフの進軍を抑えられる丘の麓に陣取ると、アイラはそれ以降動きを見せなかった。

道中で気になる事があってフィオは単独で敵地に向かわせていた事が何かの秘訣なのだろうとガルは睨んでいるが、アイラは全く動きを見せない。

ガルにとって苛立ちの原因は他にもあった。

右に座っている騎士団長様はガルのアイラへの態度が（もっともな事だとも思うが）気に障るらしく、事あるたびに対立している。

初日から剣を抜いて向き合った二人に対して、アイラはガルの肩を持つようにぞんざいな口調を許可していたのだが、それもまた騎

士団長との軋轢を強めていた。
焦るガルの内心は雨と共に強まっていた。
勝機はこの雨が降り続いている間しかないというのに。

◆

攻めるならばこの雨の間だけだ、とクリストフは判断していた。
さっき左の馬鹿が言った籠城戦は、本人も冗談のつもりで言っているが洒落になっていない。
籠城戦とは守って勝つ戦法ではない。守って増援を待つ、もしくは敵の撤退を待つ戦法だからだ。増援の見込みがほとんどない現在、籠城戦など自殺行為に等しい。
更に籠城戦を愚とするのならば、国内平定に時間をかけられない今回は一日を惜しんですばやくラトリア城まで攻め上るのが戦略上の最善策だ。
そのためには白狐団が強引にでも渡河してくる前に、目の前のフィーデル卿率いる一軍を始末せねばならない。

だというのに。
普段あんなにも攻め気で獅子のように相手に飛びかかっていく王女は、今回午睡をむさぼる牛のように動かんと来ている。
更には左の無作法な馬鹿が言っている事が一々正論であることも、クリストフをイラつかせていた。

王女は何度問いただしても「もう暫く待て」としか言わない。
いくら何でもこれ以上は、豪雨の中で兵士を待機させておくことも出来ない。
決断したクリストフはガルを黙らせてからアイラに進言しようと顔を上げた。

「夜だ」

その時、アイラが待機を指示して以来、初めて他の言葉を聞いた。

「今夜、フィーデルにはケリをつける。歩兵には隊列のみを組ませ、騎兵を出す準備をしろ。ガルもだ」

突然宣言するとアイラは二人の返事を待たずして立ち上がる。

やけになったんじゃないだろうか？と思う残された二人が思わず顔を見合わせてからお互いに視線を逸らし、

「了解だ」

ガルは手を振るだけで答え、

「承知致しました」

クリストフは席を立って答える。

二人の返事に満足したのか、一瞬だけ立ち止まったアイラは「頼むぞ」という言葉を残して天幕を出ていった。

だがクリストフにはもうひとつ、戦術以下の取るに足らない要件をアイラに伝えねばならなかった。

先程よりも顔を渋らせ、彼は王女の後を追っていった。

◆

アイラが天幕を出ると、若干ではあるが雨がおさまっていた。

（フィオからの使いは……こないか）

空を見上げて立ち尽くすが、灰黒く淀んだ雲と視界を濁らせる雨以外は何も見えない。

諦めて自分用の天幕に戻ろうとすると、中から出てきたクリストフに声をかけられた。

「アイラ様、進言させていただきたいことが御座います」

先ほど一瞬見せた決意に比べると、表情が硬い、と思った。

フィーに見せたらどんな色の視線が見えるのだろうな、と王女は空言（そらごと）を思う。

だが視線の色が見えなくとも、黒狼の群れを率いる彼が何を考えているか、彼女にはお見通しだった。
「白狐騎士団の団長は自分が斬る、とでも言いに来たか？」
「その通りです」
堂々と直立して背筋を伸ばすクリストフを見て、アイラは溜息をつく。
昔からクリストフは実直な性格だった。
父親が大領主として存命しているが、地位に奢らずに研鑽を積んだ結果、若年だが名誉有る騎士団の団長に就任している。もちろん実力でだ。
焦げ茶色の短髪の下で、日に焼けた鍛えられた肉体。険のある相貌も相まって非常に攻撃的な印象を持つが、彼の実態は獰猛な狼ではなく、群れを守るために知恵を絞る狼のリーダーだ。
攻めるより守る、憤るより耐える。
そんな性分の彼が自分から誰かを斬ると宣言するなど、未だかつてなかった事だ。
そしてその理由は、アイラを含めて黒狼の群れの全員が分かっていた。
「親友の裏切りを赦す事など出来ません。私事ではありますが、私に彼を裁く機会をお与えください！」
国の内外問わず双名が響き渡る二つの騎士団。今の代の団長達は幼い頃からの知己なのだ。

白狐騎士団は、狼達とは違って特定の拠点を守る任を与えられていない。
各地を転戦しながらの遊撃的な役割を与えられることの多い、言わば”攻め”の切り札とも言えるカードだ。
団長のアレク＝オージェは風貌こそは優男で、伸ばした金髪は女性のようにしなやかだが、彼の性根は底から天辺まで戦士だった。
それも有能で獰猛な戦士だ。

いったん剣を振るえば敵が尽きるまで進み続ける。軍を率いれば風のように現れ、雷のように駆け抜けていく。
その姿から雷の狐などという大層な二つ名で称されている電撃戦の名手だ。

本人はと言えば、そのような洒落た名前で呼ばれても怯むこと無く笑って受け止める、クリストフとは違って華美な性格をしている。
女の扱いに慣れすぎているところが玉に傷なのだが、それがこの説教臭い男と親友だというのは誰もが疑問に思いながら、疑わない事実だった。

だからこそ、クリストフはアレクの裏切りが許せい。
飄々としていようとも、国への忠義を見失う事は無いと思っていた。
何をぶら下げられようとも、騎士としてアイラを認めていた親友が敵方に釣られる事などないと信じていた。
だから、自分が決着をつけるのだ。
「この剣で、奴を仕留めねば、私は王女に付き従う資格などないものと考えます」

◆

「あー、わかったわかった。ちょっと落ち着け、クリス」
あくまで愛称で呼ぶことで、彼の表情を和らげたかったのだが……そんな目論見は通じない。
「お前はアレクを信じているんだろう。今、彼があそこに布陣しているのも何か意味があると思えないか？」
「川が氾濫しているからでしょう。それに農民などを保護し、土地が水で流されないように処理を施すのも有事の際なれば、我らが行なってしかるべきです」

なら、と言おうとしたアイラの声はクリストフに割り込む事は出来なかった。
「だからこそ、騎士道精神を忘れていないからこそ、奴があそこに居ることが許せないのです！電撃戦が得意なのだから、やろうと思えばフィーデル卿の背後を突く事だって出来るでしょうに！」
「さっきはお前が反乱で渡河出来ないって言ったんじゃないかー」
「やろうと思えば、騎馬のみで突破できます。奴の部隊は我が黒狼騎士団よりも騎兵が多い速度重視の編成ですから、フィーデル卿に対抗できるだけの兵力は捻出できます」
「とりあえず、私の話を聞いてくれないか」
クリストフをどうどうといなしてアイラは自分の天幕の中に入る。外で躊躇していた団長を手招きして中に入れると、アイラは躊躇せずに鎧を脱ぎ始めた。
「王女！！」
「落ち着け、全部は脱がん。服の下に隠しているものがあるんだ」
鎧を脱ぎ捨てると、アイラは胸元の衿合わせから短い布を取り出した。
それは本来腰の部分を抑えつける為の帯で、何故そんなものをと訝しんだ団長の前に、アイラはその中身を広げた。
「これが、理由だ」

◆

そこに有ったのは指だった。
細く白いそれには、紋章を描かれた宝石がはめ込まれた指輪が嵌っている。
紋章に描かれているのは白狐を率いるオージェの家紋が描かれていた。
「これは……アレクの……いや、だが奴は顔は優男だが、手指は剣を持っているだけに硬い、ならこれは」

「そう、アレクの弟であり、オージェの領主。ルルの指だ」
「馬鹿なっ！」
思わず大声をあげた彼に、王女は静かにするよう人差し指を口に当てる。
彼は叫びだしたい気持ちを、ゆっくりと呼吸することで落ち着けた。部下にも習わせている事だ、こういう時に自分で発揮できなければ意味が無い。
それを数回繰り返して上げた彼の顔は、しかしそれでも怒りで赤く染まっていた。
「状況はだいたい理解できたか？」
「ルルが、フィーデルめに人質に取られているのですな」
王女は黙って頷く。
ありえない、と吐き捨てたかった。
名家であるフィーデル卿が、卑しい賊のように同じ名家の領主の指を切り落とし、あまつさえ人質に取るなどと。

だが、今のエストは内乱中だ。
おそらく、あの狡猾な戦術家であるアレクもこれは思いつかなかったのだろう。
弟を何より大事にしているあの兄の事だ、おそらく彼も信じたくなかったに違いない。
幼い頃から、言葉をかわすよりも木剣を打ち合わせることの方が多かった。
お互いに、誰よりも剣を交わし合った中だ。
だから知ってしまえばクリフトフは見誤らない。
彼はむしろ、知らぬとは言え非道と罵った自分を恥じた。

クリストフが自分の言を省みているのはアイラ以外の誰が見てもありありと分かった。
だが、彼が弁解の弁を述べるべきなのは自分ではないと王女は判

断する。
「既に手は打ってある」
だから、告げるのは別の応えだ。
「すでに腕利きの者に、ルルの救助を頼んである。どんなに早くてもあと2日はかかるだろうが……それでもこの雨はあと2日も持たない。おそらく明日が最大の山場だ。だから、フィーデルは今晩片付ける」
「白狐騎士団はいかがするおつもりで？」
「もしあいつらが出張ってきたら、撤退する。奴らとまともにやりあってお互いの戦力が削れるのはクラウスの思う壺だ。かと言って戦闘をせずに撤退してはアレクが疑われる。
私たちの考えている事が真実ならば、雨が降り続いている間にアレクは無理して渡河しないはずだ。雨が止んでもフィーデルを撃退できない場合、奴の電撃戦をこの目でしかと見ながら、後退する」
アイラはそう言うと、指を再度帯に包んで自分の襟の内にしまった。
「何もそんなところに隠さずとも良いでしょう」
「万が一にも見つかってはならんだろう。本当ならお前にも見せるつもりはなかった」
クリストフはようやく落ち着きを取り戻して肩を落としながら息大きく吐く。
「すっかり、王が板に付き始めていますな」
信じるからこそ、信じてもらえていると分かるからこそ、相手を遠慮無く使う。
平和な世を続ける王ではない。だが確実にこれは王の才だ。
「なぁに、既に準備を始めているガルの部下ほどじゃないさ」
言われて耳を済ませれば、馬の嘶きがわずかに聞こえる。
あの気に食わぬ男も、王女に信頼されているのだな。
ならば、自分のスべきことはここで怒りを喚き散らすことでもなければ、私怨にかられる事でもない。

「黒狼騎士団長クリストフ＝ノヴァ。きっちりと仕上げて参ります」
外に出るときは苦渋を顔に満たして意気揚々と。
怒りをはらんでいた団長が王女に呼ばれて話をされ、気合十分に出てくる。
本人は全く意図していなかったが、彼の部下はこの姿を見て、気合を新たに入れなおした。
「全く、いつでも期待に全力で応えてくれる男だな、あいつは」
胸に悲痛を抱えて、アイラはそっと微笑んだ。

3―2

夜になり、雨は一層強くなっていた。
一般兵士用の粗悪な天幕では雨を受けきれず、漏れでた水を防ぐために兵士たちが走り回っている。
ルナルゥ砦に続く主街道の丘の上で、唯一雨漏りなどを全く受け付けないのは軍の長であるグルフ＝フィーデル卿の天幕だ。
派手な装飾があるわけではないが、鞣(なめ)した皮をふんだんに天頂部につけたそれは、質素ながら一目で大将のものだと分かる。
「では、奴らは動き始めているのだな？」
天幕の内で伝令兵に返事を返すのは、これもまた質素な寝間着に身を包んだ男だった。
髪は剃り上げ燦燦と輝いているが、顎鬚はたっぷりと蓄えられている。
パッと見ただけでは壮齢だと思う人は居ないであろうこの人こそが、グルフだ。

伝令兵は顔を伏せたまま答える。
「はっ、本日昼過ぎ、会議を終えた後に騎士団が戦闘の準備を始めておりました。また……」
伝令兵が言い難そうにしたのを見て、グルフは顎髭をいじっていた手を下ろし、彼の言葉を聞く姿勢を見せる。
「また他の兵による情報ですと、アイラ王女の天幕から出てきた黒狼騎士団長は、かなり意気込んでいた様子だったそうで」
伝令兵が気弱に報告するのは、黒狼騎士団の勇名の影響が強い。
国内で一二を争う騎士たちの中で、最も強い男が自分たちを殺しに来る。
伝令兵を担当している若年の彼には荷が重いだろう。

それぐらいは若さを失ったグルフにも察せられる。
彼の判断に誤りはないだろうという自信を与えるために、グルフは兵士の側まで歩み寄ると、肩を軽く叩いた。
「あの男に演技は出来まい。息子の取った策は気に食わんが、負けてしまっては元も子もないからな」
やらねばなるまい、と立ち上がった彼は、ワイングラスに血の水をトクトクと注ぐ。
それを一息で飲み干して代わりを注ぎながら、男は指示をだす。
「街道を塞いでいる連中に伝えろ。策の間隔を詰め、火を強くしろと。副長には動けとだけ伝えれば良い」
「はっ」
伝令兵は立ち上がるとそのまま天幕を出ていった。

黒狼騎士団は恐ろしい相手だ。
大領地から引き連れてきた我が兵達も、数を頼みにしたとて楽に勝てる相手ではない。
だが、やらねばならなかった。
王室の威厳を保つためには、ここで引くわけにはいかないのだ。
国家の忠臣は、国王に酔心してはならない。
天幕の中の剣が松明の光を受け、鈍く光った。

◆

大雨の中、アイラは眼下に並んだ騎馬の一段を睨めつけるように見回す。
これが、今の自分の戦力だ。この光景を見るのは初めてではないが、今でもある種の感動を覚える。そして同時に自戒も思う。
国家の戦力とは自らが拳を振るうのとはわけが違うのだ、と。
「彼らが、私の望む世界を作るための支持者なのだな」
アイラは改めて顔を上げて周囲を確認する。

自分の周りは５０メートル先すら見えないほど視界を封じられている。
数少ない騎馬の一団は見ることができるが、その背後に構える歩兵の一団については霞んでほとんど見ることが出来ない。
これ以上ないくらいの悪天候だ。

一団の中から二人の男がアイラのいる高台へと出ていく。
王女から見て左からはガル、右からはクリストフだ。
二人は自分たちのそれぞれの部隊、騎兵５０騎ずつの配置が完了した旨をアイラに伝え……る前に異口同音に切り出した。
「王女、俺に任せな」
「アイラ様、わたくしにお任せを」
お互いに顔を見合わせ、嫌そうな顔を隠しもしない。
気の早いガルが腰に手を向かわせると、応じてクリストフも盾を構える姿勢を見せる。
「待て待て、兵士たちの目の前でやりあうんじゃない。お前たちの策をまず話してみろ。喧嘩は後にしてくれ」
お互いに小さく舌打ちをしながらも、二人は剣を引く。
アイラにも、既に戦術の用意は出来ている。
だがそれは奇策でしかなく、策の優秀さは皆無で兵の実力次第という軍略家からすれば無能にも程がある作戦だった。
だからこそ、任せろと言ってきた二人の策を王女は聞きたくなった。

二人は同時に正面の丘の上の敵、ではなく左右それぞれの丘の裾を指した。
「敵を抑える必要はありません、要所を押さえる戦を致します」
クリストフがそう言えば先を争うようにガルが後を継ぐ。
「この大雨の中、敵が同じ地図を持っているのなら土地が低くなっている所や河の近くからは引き上げるだろう。その上で正面の整備

された道をしっかり抑えている。だったら」
「あえて警備が配置されてないところを少数で襲えば十分な被害を与えられるかと愚考致します」
「グルフ卿がいるとしたら」「大将が居座るなら」
二人があげていって指はその先で一つに重なる。丘の頂上ではなく、その下で平坦になっていると地図には記されている場所だ。
「……この雨で視界が利かないわけだが、お前たちにはそれが出来るか？」
一触即発の二人が口を開く前にアイラが問う。
「黒狼の紋章にかけて」
「俺の腕を賭けてやる」
それは二人にとって命といってもいいものだ。
満足そうな笑みを浮かべながら、アイラは力強くうなずいた。
「お前達が十分に距離を取ったら、私が正面で指揮を取ろう。いますぐ馬に乗れ！」
お互いへの言及は避けた二人が一瞬だけ目線をぶつかり合わせ、それぞれの隊に戻っていく。
肩をすくめたアイラは、二人が雨音に隠れる程度の速度で出発するのを確認すると、整列した歩兵を前にして声を張り上げた。
「聞け！エストの誇リ高き狼達よ！」
フィオでなくとも、全員の視線がこちらを向くのが分かる。
声はすぐに雨に吸い込まれてしまう。アイラは自分の一言一句がゆっくりと全体に染み渡るよう、演説を続ける。
「兄は私を断罪しようとしているが、それは騙りだ。物的な証拠は無いが、ギルバルト前王が示された次期国王は私であり、兄ではない。私兵を城に潜ませた奴らは、王を看取ったその部屋で、私に剣を向けてきた！
その後、命からがら脱出した私をかくまってくれた諸君らには感謝している。そう、諸君らが居るからこそ、私は自分の正義を訴えるために戦うことが出来るのだ！」

だから、と続けた彼女は剣を抜き放つと頭上に掲げる。
たとえ姿が雨に霞もうとも、その光が見えない者はいなかった。
「さぁ進もうではないか、私の信じる者たちよ！お前達自身が、私の信じる国に、そのための道になるんだ！」
身を翻して愛馬にまたがる。
すでに前衛の兵士は槍を手に持ち、後ろに控える者たちは弓を背から下ろしてその手に収めている。
背中に集まる気勢に快感を覚えながら、なおそれを取り込んで気を引き締める。
「走れ、狼たちよ！私の名のもとに、たとえ同じエストの民であろうと、逆臣に仕える愚か者を追い詰めろ！」

◆

主将のグルフは周りよりも一段低い、しかし斜面の流れから水の溜まらない平地に幕舎を建て、グラスを傾けていた。
晴れているときは、遠い領地の森とその向こうのラオまで見える。だが、この大雨では丘の麓すら見ることは適わない。そこでは街道を馬防柵などで封じて黒狼騎士団の攻撃に備えているはずだ。
この大雨の中、何日も農地をほったらかして従軍している事に、兵士たちは浮ついている。こんな所で一晩つったっているなら、風に倒れる稲を直し、雨に怯える家畜たちを屋根の下に誘導しなければならない。彼らには無論報酬が支払われるが、冬を越す蓄え程にはならない。
家族や白狐騎士団が上手いこと処理をしてくれていると信じて、彼らは今晩も耐えている。
布陣してから早数日。アイラ率いる黒狼騎士団は麓に布陣しているもののこちらを攻める事はなかった。この雨こそが絶好の機会であるはずなのに、だ。

だが、グルフはその判断を良い指揮だと評価していた。
こちらが相手を倍するだけの兵力を有していることが一つ。
視界が利かないまま相手を攻めないというのが一つ。
高所を押さえている側が一方的に防衛ラインを引いている事が一つ。
この状態で攻めこむならば、砦を落とすのと同様で敵に倍する以上の兵力を揃えなければならないだろう。内乱であれば相手方の勢力も大体は把握することが出来る。
不利な状況を者にして勝利を掲げるのは将としてこれ以上ない名誉だ。だがそれらの多くは作り話の中の幻想の勇者だ。誇張されたお伽話の実態がいかに泥臭い戦いだったか。将としての知を得ている彼はそれを知っていた。
それ故に、攻めないアイラは良い判断をしている。

正面からぶつかっても勝てない、ましてこの雨が引けば背後の狐共が援軍に来る。
もはや王女に残されたのは撤退戦をしながらこちらの消耗を狙うことか、籠城しながら兵力の地道に削る消耗戦だ。
だが、タカをくくってはいけないとも思う。自分は従軍していなかったが、あの王女が一軍を率いて勝利したことは確かだ。何もできない女だとタカを括ることは許されない。
そのために街道には陣を3重に張って防御を固めている。さしもの黒狼騎士団であっても上り坂でこの壁は突破できない。

慢心を肥大させてはならない心の中で何度も自問自答を繰り返してきた。
しかしその内に彼の自信は不必要なまでに大きくなっていた事には気付くことが出来なかった。
「か、閣下！大変でございます！」
来たか！と胸の内で喝采をあげた。消耗戦になれば守備の名将で

ある黒狼騎士団との戦いは苦しい物になる。悪天候はどちらに味方するものでもないから凌ぎきることは確かに難しいが、やはりそれ以上に兵士と兵士をぶつけあい勝利を飾りたいものだ、と。
（夜間の奇襲とはまたオーソドックスな真似をしてくれる）
だがその程度の策に対する策はグルフも用意してあった。
頭の中で何度も想定していた指示を出そうと立てかけてあった剣を手に取る。
「彼奴等が防衛陣を突破する前に、丘の左右に展開してあった部隊で挟撃を」
「閣下！申し上げにくいのですが……既にその部隊がそれぞれ撃破され、現在この丘の上に敵が迫ってきているのです」
「なん……だとっ……？」
酒のせいか、驚愕のせいか。
彼の頭の中の地図に敵の侵攻図がうまくひけず、振り向いて机上の地図を睨みつける。
年老いているとはいえ、名将・大貴族として長い彼は逡巡した後に答えを出すまで、分もかからない。
だが、狼達にとってその一分は、攻め上がるには十分長かった。

ガルとクリストフの部隊はそれぞれ敵の部隊を突破していく。
「良いかぁ！雨に紛れて全員狩っちまえ！狼共に負けんじゃねぇぞ！」
ガルは部下を叱咤しながら、正規兵の脇を駆け抜けざまに槍で穿って一撃で兜ごと敵兵の顔を吹き飛ばす。
その声が聞こえたわけでもないだろうが、ブルージもまた部下を激励していた。
「ならず者共に一歩でも後れを取ってみろ！狼の誇りがあるのなら、縄張りを荒らす不届き者に牙を突き立てろ！」
徐々に迫ってくる戦いの音を聞きながら、しかしグルフは血を滾（たぎ）

らせるのではなく冷静にそれを御しきった。
やられた、という正直な思いがある。予想以上だ、とも。
黒狼騎士団の主戦力は歩兵だ。彼らは防衛の要であり、その騎馬隊が活躍した事は無かった。”だからと言って騎馬隊の実力がないわけではない”というのに。
だが、それがどうしたというのか。準備段階で有利でありながら不利に陥った戦が無かったわけではない。
そんな時、窮地に陥った自分を救ってきたのは何かを正確に理解する。
新兵の小僧にする説教と同じだ。反省と次へ繋ぐ努力。それを怠らない者が最後に立つ。
「愚かだったのは、ワシか……。正面の部隊はどうなっている」
「現在黒狼騎士団の歩兵部隊と交戦中です！」
「ちっ、左右の部隊それぞれが敵を抑えきれなければ兵を移動させる余裕もないか……」
よもや兵を二分するほどの戦力的余裕が黒狼騎士団にあろうなどとは、完全にグルフの想定外だった。
それは正しくは狼ではなく、山を狼より早く蠢(うごめ)く山賊達だったのだが、ガル達の参戦はグルフの知り及ぶ所ではない。
現実として、左翼や右翼だけでは抑え切れない兵力がいる。
だがそれに出来ることはたかが知れているとグルフは判断した。
「敵はこちらの殲滅ではなく中央突破を狙ってくるはずだ。突破された各集団に伝令をだして、この中央本部にて包囲殲滅をしかける。お前は左翼に行ってその旨を伝えてこい。わしはここで防御体制を固める」
「はっ！」
声を張り、伝令兵が天幕の外に走りだす。
そこに一歩遅れてグルフが外に出た瞬間、視界に赤と銀が飛び込んできた。

「ぬぅっ！？」
赤に対する判断は無く、飛んでくる銀の刃に反応する。左腰にあった剣を左手で逆手に掴み、肩を引き上げるようにして抜く。
飛び込んできた銀は槍の穂先だと弾いてから気付いた。
地面を自分から転がって距離を取り、勢いをつけて立ち上がる。とっさの動きは年輪を刻んできた体には堪えるが、悪態をつく余裕はない。今の一撃を防げたのは幸運だ。それほどまでにこの使い手は強い。
視界に納めたのは倒れ行く伝令兵ではなく、こちらに槍を突き込んできた馬上の偉丈夫だ。
「アンタが大将で合ってるかい？」
黒狼騎士団長（ノヴァ家の小倅）ではないと判断しつつ、馬を下りながらの声にグルフは剣を答えとして切りかかる。
ガルは抜きざまにグルフの一刀を受ける。
「名乗らないのかい？」
ガルの挑発に眉をひくつかせながらも、グルフは取り合わない。
「浅ましい下民如きに名乗る名などない！！」
「そうかい」
グルフの力んだ声に比べて、落ち着いた声でガルは返す。

◆

グルフの腕前は中々のものだ。正直な所舐めてかかっていたとガルは舌を巻く。
プロフィールじゃあ５０も近いオッサンだ。６０も生きれば長寿で、肉体を酷使する農民なら５０は既に死期を迎えていてもおかしくない年齢なのが常識だ。
しかし目の前のこの男は息子が独り立ちしている壮齢だと感じさせないほど、激情による力がこもっていた。

ガルはぬかるむ泥の上で器用な足さばきを見せて軽々とグルフの剣を躱す。
「あらかじめ聞いておくぜ、降服してアイラの配下に下るつもりはねぇか？」
「様をつけろ下民！」
器用に躱し続けるガルに対して、グルフも追い足を緩めない。
「いや、エストの王女の名を賢しらに口にする事も許せん！たしかにアイラ様は優秀だ……だが、優秀な者が軽々しく規範を乱して王になってよいわけがなかろう！それは」
大きく前に踏み込みながら、左下から切り上げるような逆袈裟の一撃をぶち込む。
「”謀反”と言うのだ！！」

その一言に眉を潜めたガルはステップで躱さず、グルフの剣を真正面から受け止める。
「より良い選択肢を悩みもせずに捨て去って、そのおかげで国が滅ぶのは良いってのかよ！苦しむのは国民なんだぜ！」
「それを避けるのが忠臣の役よ！」
グルフは体ごとぶつかるように肩からガルにぶつかり、山賊の長はよろけて後ろに転ぶ。
振り下ろされる剣を避けざま膝立ちになり、両手で持った剣でグルフの大上段を受け止める。
「聞け若造！生きるということはな、そういう堅い生き方を守る事だ！お前達の好きな派手な物語など起こらぬ方がいいのよ！分かったふうな口を聞く貴様らがいなければ、今頃クラウス殿下が国を治め、内乱など起こっておらんわ！」
その瞬間、急に押し上げの力が強くなった。
押さえ込んでいたグルフの上半身が仰け反る。伸びきってからようやく思考が状況に追いつくほどの素早さだ。
男はグルフの腹を鎧の上から直蹴りし、さすがのグルフもよろけ

ながら息を吐ききってしまう。
開いた間合いから男を観察してガルフは気付く。
剣を、右に持ち替えている。

馬鹿なという思いが湧き上がる。
今までこの男は左手に剣を構えていた。たかだか山賊風情が、利き腕とは逆の腕でこの自分と対等に戦っていたというのか。
ゆっくりと剣を構えた男の姿は、騎士の型とはまったくかけ離れているというのに、どこか統制のとれた佇まいだった。
「最後に聞くぜ、配下にならなくてもいい、ここで降伏する気は……」
「くどい！！」
迷いを断ち切るようにグルフが声を上げた。
「我はエストに代々仕えるフィーデルの領主、グルフ＝フィーデル！我が仕えるのはアイラ様でもクラウス様でもない！エストだ！！」
フィーデルは剣を振り下ろしながら距離を詰める。

決着は一瞬だった。
動き出しはガルが先だった。それは急激な加速ではなく、体を不自然に傾ける動きで、溜めを作った自らを発射するように前に飛び出す。
ガルの首元だけを狙ったグルフの剣は一瞬遅れ、篭手を装備したガルの左腕がそれを受け止めていた。
周囲の兵士が声を上げる間もなく、忠臣を山賊の剣が貫いていた。
ガルの肩に頭を乗せるようにして倒れこみ、剣は深々と突き刺さる。
ガルはそれを受け止め、しかし油断せぬまま剣を掴み続けた。
「くっ、こんな賊に私が斬られるとは……年は取りたくない物だな……」

「強かったぜ、フィーデルのオッサン」
その声にグルフは眉を顰(ひそ)める。
「貴様……名は……」
最後の方は掠れてしまって聞き取れない。
だが彼も戦士として死ぬのだ、その気持ちが判らぬ戦士(ガル)ではない。
だから迷いながらも小さな声で、彼は死にゆく戦士に名を送った。
「クラウトシュタウト」

◆

捨てたはずの名だった。
自分はもうクラウトシュタウトの者ではない。
だからこの名を持ち出すのは自らの誇りを示すのではなく、グルフの誇りに応える為だ。
この男はアイラも、クラウスも、様を付けて呼びながら、二人を王女と殿下と呼んだ。

クラウスを最後まで王とは呼ばなかったのだ。
彼が命を捧げたのはギルバルトでもクラウスでもアイラでも無かった。
その感覚は、貴族としての家名を捨てた自分には分からない。
だが、戦士が剣に魂を賭けるのに近い信仰心がそこにはある。

「ガリバルディ＝クラウトシュタウト。その命、貰い受ける」
剣を引きぬいて、横ざまに振りぬく。
驚愕に目を見開いたグルフが、一瞬だけ孫を見るような優しい顔つきになり、そのまま胴と切り離された。

◆

クリストフが率いる黒狼騎士団が丘の反対側から駆け上がってくる音を聞きながら、ガルは大将の首を麻袋に詰める。
袋を丁寧に両手で捧げ持ち、馬上のクリストフに手渡すと自分も馬の背に上がる。
ガルの首を受け取ったクリストフの顔は苦い。
感じるのはガルに対する不足だけではない。だがそれを口にすることはなく、口を衝いて出るのは自分でも驚くほど幼稚な台詞だった。
「後れを取ったか……しかし、よもや貴様がグルフ殿を切り倒せるとは」
言ってから自分らしくないと発言を取りやめようかとも思うが、たかが山賊風情にそのような態度を取れるわけがない。
クリストフの逡巡を察したガルも、思いを胸の内に閉まって底の浅い笑いを浮かべる。
「まぁ、剣に生きるしか能のない山賊なんでな」
剣の血糊を落として鞘に収めたガルは、丘の下を指さす。
「さぁ、アンタが勝ち名乗りをあげてくんな。黒狼騎士団の長が言い張りゃあ、奴らも降伏するだろうよ」
会話の勢いのまま山賊風情が、と返そうとしてクリストフは口をつぐんだ。
たかが山賊が往年の名騎士に真っ向勝負で勝てるわけがない。
更には名声などを有効利用するだけの知恵もある。
何らかの”教育”を受けていなければ有り得ない事だ。
クリストフはガルを正面にはおさめず、自分が前に出ることで背を向ける。
「とりあえずは認めてやろう。戦士よ」
「可愛げのねぇ野郎だぜ。とっとと行けよ、王女様が待ってるぜ」
言われずとも。
大雨の中でも遠く響く声で、クリストフは駆け抜ける。

これでもう、戻ることは出来ない。アイラが王座まで駆け上がるか、クラウスがそれを遮るかだ。

駆け抜けて見せよう。

騎士は心のなかで誓った。

3―3

戦場を最も埋め尽くす物、それは音だ。
馬の駆け、叩きつけるように雨が降り注ぐ。金属がぶつかり合う音が響き、誰かが倒れる音と断末魔の叫びが音を加速させる。
それらをかき消すように届いた声は、クリストフのものだった。
「グルフ＝フィーデル卿は討ちとった！武器を捨てる者の命は奪わん！降伏しろ！」
彼に追いすがってくる兵士の姿は無く、一際大きな馬に乗って駆け下りてくる騎士の手には確かに領主の首が下げられていた。
それは丘の上の部隊が既に降伏している証拠であり、丘の裾で戦っていたフィーデル卿の部隊は次々に降伏していった。
元を正せば彼らは戦争の為にフィーデル領から集められた平民だ。
指揮官が敗れた時点で黒狼騎士団に歯向かうものなどいるはずがなかった。
最初に武器を手放したものに続いて、周囲の人間も同様に膝をついていく。
黒狼騎士団もよく統制が取れており、目の前で仲間を斬った者がいようとも武器を振り上げることは無く、
「勝鬨（かちどき）を上げろ！」
アイラの声に続いて男たちの声があがった。
敵も味方も目に涙を溜めながら。

◆

戦後の王女の指揮は素早く、的確であった。
アイラはフィーデル卿の腹心だった男を捕まえると、領民に対してしかるべき支払いをするように指示を取り付けた。
フィーデル卿の忠誠心はその第一位に国家そのものへ向けられて

いたが、皮肉なことに腹心の忠誠心はフィーデル卿へのそれが一番であったものの、その次は国ではなくアイラへ向けられていた。
彼は仕えていた主の死を悼みながらも、アイラには剣を向ける事無く領主館へと戻っていった。

鎧具足を身につけていた領民たちは今後数日をかけて報酬を得て、領地に戻って暮らしを続けるだろう。
このままアイラの軍に付き従いたいという声も上がったが、アイラはそのほとんどを退けた。
「お前達の役目は、大地を豊かにして国の力を付ける事だ。国の力を削ごうとしている私と兄の戦に巻き込むことは出来ぬ。私と国の為を想うのであれば、今年もこの土地を豊作の実りで豊かにしてはくれないか」
訴えに来た集団に対して、アイラは毎回直接自分から出向いてそう答えた。
「君たちの手は武器を握るためにあるんじゃない。剣を一度振って一人を殺すのであれば、桑を振って子を生し、生きてくれ」
他の貴族からすれば人気取りにしか聞こえぬ綺麗事だ。
農民たちとてそれは分かっている。
アイラが王女になっても隣国が攻めてくれば畑は荒らされ、自分たちはその時の王によって兵として取り立てられるのだから。
それでもアイラと目を合わせて話をした者たちは王女の言にしたがって自分たちの家へと帰っていった。

だが、アイラも全ての戦力を受け入れなかったわけではない。
フィーデル軍の中でも常に兵役に就いていた者達は二つの理由から軍に吸収することになった。
第一に戦力の増強。
そして第二に後方から彼らに裏切られない為だ。

アイラの束ねによって農民が引き、更に一日を費やして雨が止もうとしていた。
ルナルゥ砦からの増援と支援物資を受け取りながら、彼女たちの陣営ではもう一つの動きがあった。

◆

「王女の親衛隊を設立しましょう」
唐突な一言を放ったのはクリストフだった。
アイラ、ガル、クリストフの三人は指揮官用の天幕の中で戦勝を祝う酒を楽しんでいた。
アイラはゆっくりと杯をテーブルに置いた。その顔ははっきりと渋っていて、とても快諾しそうな雰囲気ではない。
王女にしてみれば今までに何度となく蹴った話であり、ガルはと言えばそんなアイラの様子を見て薄く笑いながらカップにつけた口を離さない。
「いきなりなんだ、クリストフ。それよりも次の戦の準備はできているのか？」
「無論でしょう、話をズラさないで頂きたい。親衛隊についても論じる必要などないでしょう？　王女親衛隊（プリンセス・ガード）を設立するなど、普通の事ですよ」
プリンセス！？という叫びは残り二人から上がった。
「無い、それは無い」
と首を振ったのはアイラだ。
「私がプリンセスなどと名乗ったら、この世にあまねくお嬢様（プリンセス）方に失礼だ」
自分で言うか、と眉を潜めたクリストフが発言する前にガルが追撃をかける。
「だいたいこの王女様を護衛出来るやつがどこにいるってんだよ。勝手に抜けだしてラオまで出かけちまうんだぜ、まっとうな奴が付

いたら胃に穴が空いちまわぁ」
それも言われずとも分かっている。
実際に胃に穴が空いた執事や体調を保てず実家に帰る侍女達の例を、クリストフも山ほど見てきた。

まるで他人事なこの男を、既にクリストフは実力の面では認めていた。王女の手勢として有力である事も。
だがそれでもクリストフや、他の貴族にとってこの男はただの山賊だった。
だから突きつけた言葉はこの男へのカウンターだ。
「私はこの男が引き連れている山賊団を、親衛隊という名の遊撃隊として推薦します」
その手があったか！というアイラの嬉々とした表情と酒を吹き出したガルの反応にクリストフは満足した。
この王女の食らいつきっぷりならば問題あるまい。
「おい、ちょっと待……」
「さすが黒狼騎士団長だ、目の付け所が良い。装備は整えられるか？」
「そちらの部隊に配置するのであれば、現在の騎馬のみで十分でしょう。鎧を着込んで十分に動けるとも思えません」
「話を聞けよこの……」
「では後は団旗の紋章だが、何が良い？」
ガルの発言を全て無視した上で、アイラが問い返す。
どうあったって押し通すつもりなのは目に見えて明らかだ。
恨みがましくクリストフの事を睨みつけるが、必死に笑いをこらえている。
ガルが大きく息を吐く。
「なら、ラディール公の紋章にしろ」
嫌がらせが半分、誇りが半分だ。

アイラの一部隊として戦場に出ているのも、引いてはラディール公の為だ。
それを忘れるなよというつもりでの投げかけは、しかしあっさりと受け止められた。
「よかろう。とりあえず団旗だけは特注で作らせよう。こっちで作ってもいいものかな？」
クリストフに布地だけ用意しておけと指示をすると、アイラはガルに対してにやにやといやらしい笑みを見せた。
「てめぇ、もしかして……」
「親衛隊という意味では意外だったが、概ね私の計算どおりだ。そうだな、部隊の名前としてはラディール公の配下という意味合いを無くさぬよう、『特派騎兵隊』というのはどうかな」
やってらんねぇ、勝手にしろ。
男たちは二人して酒を一息に飲み干して机に突っ伏した。

◆

そのような経緯を経て、ベリエ丘陵での戦から三日後。
雨は止み、川の水も引き始めたその朝に二つの軍勢が対峙していた。
黒狼の紋章と、白狐の紋章。そして1つだけ作らせた異形の紋の旗が一つ。
川を挟んで対峙した両軍は大雨にも耐えた大橋の両端に軍を広げていた。
お互いの団旗を背に負って、二組の男女が馬に乗って端の中央へと進む。
東からはアイラとクリストフ。
そして西から出てきたのは白孤騎士団長のアレクと、フィオだった。

両軍が彼らの動きに注目していた。
剣をどちらかが振りかぶった時点で飛び出していき、守らねばならない。
加えて黒狼騎士団の面々からすれば、何故裏切り、放蕩王子の勢力に就いているのか、白狐騎士団長の言い訳を聞いてみたいという思いがあった。
両軍で万に満ちようかという大勢が、耳を済ませる。
王女の前にたどり着いたアレクとフィオに全軍の視線が集中する中、彼らは馬を下りてアイラの前に膝を折った。

全軍にどよめきが走る。
その大半は安堵の溜息が平原の至る所から漏れ聞こえる。
どうしてこうなっているのか、理由は分からずとも二大騎士団の衝突は想像のものであっても両者に多大な緊張を強いていたのだ。

◆

両軍に見守られた中央で、正面に跪いた二人が口を開く前に王女が機先を制す。
「フィオがそこに居るということは、私の予想通りだったのだな？ならば何も言うな。私の怒りを受け止めるのは貴様らではなく、ルルを傷つけた輩だ」
顔を上げたフィオが一回だけ小さく頷くのを見て、アイラは二人に手を差し伸べた。
「ルルは無事か？」
「幸いにも命は取り留めています。今はまだ床から出ることは適いませんが、医者によれば既に容態は落ち着いているとのことです。ですが……」
顔を上げられないアレクの脇にクリストフが歩み寄り、彼の肩を掴んで立ち上がらせる。芸術家として既に大成し、なおこれからも

成長していったであろう弟の右腕。それを奪われるという事は命を奪われたにも等しい。
立ち上がった彼の表情(かお)は見るまでもない。
鬼の形相はあえて見ずにアイラは言った。
「アレク、自分を責めるのなら、責務を果たすことで挽回しろ、分かるな？」
右の拳を左胸に合わせる敬礼をとると、
「御意」
アレクは再び馬に乗り、団旗を高く突き上げた。
同じようにクリストフも団旗を空に掲げる。
改めて全軍が戦闘を回避できた事を知り、歓声が東西から沸き起こった。

ベリエ川の周囲に歓声が満ちる中、フィオは馬にのって陣の奥に引こうとしたが、背後に回ったアイラに抱え上げられて彼女の馬に乗せられた。
この馬にこうやって乗せられるのは二度目だな、と思い出す。
アイラも同じだったのだろう、イタズラな笑みを浮かべる。
「今度の遠乗りには耐えられるな？」
それはミリアム様への方便でしょう、とは内心に留め、表向きは
「無論に御座います」
動じること無く花が咲いたような笑みを見せて答えた。

今度は紐で互いを結びつけていない。
王女は右手で手綱を、左手で侍女をしっかりと抱え、侍女もまたその腕に自らの手を重ねてつかまる。
「王女、フィーデル卿が利用していた軍の駐屯地が現在はもぬけの殻です。ご利用なさるのが宜しいかと」
「せいぜい利用させてもらうとしよう。アレクは先行して陣を敷け、周辺諸侯へ兵を集めるように伝令を飛ばすのも頼む。クリストフは

黒狼騎士団の全員を渡河させて殿だ。ガル達は私についてこい」
全軍が目指すのは西、まっすぐラトリアに向かう。

ある程度周囲と距離をあけると、アイラはフィオに小声で話しかけた。
「サルバはどうしている？」
「白狐団の護衛を借りてどこかに向かわれたそうです。私がたどり着く頃には既にいらっしゃいませんでした」
「ではルルはどうだ」
「アレク様のおっしゃられた通りでございます。ですが、容態は安定しても利き腕を落とされてしまっては彼も以前と同じようには筆を取れないでしょう」
アレクの生家であるオージェ家はフィーデルに並ぶ名家だ。
兄であるアレクは早々に騎士として頭角を表していた為、家督を放棄して弟であるルルが若くしてオージェ領主として土地を治めていた。
良き執事達も彼に良くしているようで、家督を継いでから問題が起こったという話をとんと聞かない良い領主であったようだとアイラは記憶している。
そしてルルにはもう一つ、画家としての才能があった。
彼の描く絵にはファンも多かったし、年に一度作成される王族の肖像画もアイラはここ数年ルルにしか描かせていない。
アイラには芸術を解する事はできても嗜む趣味は無い。けれどもルルが利き腕を落とされたことは、戦士が利き腕を失う事と同じかそれ以上の苦難だということは痛いほどに理解できた。
自然と強張る声を隠しもせずにフィオに問う。
「ルルの腕を斬った者は分かっているのか？」
「……フィーデル卿のご子息のシュラン様に御座います」
「シュランが？　馬鹿な！？」
シュラン＝フィーデルはクラウスと同年代の貴族だ。

質実剛健な父であったフィーデル卿の指南を幼い頃から受け、騎士としての戦技も侮ることは出来ない。
クラウスの側についてはいるが、近年は領地を治める法を父から学んでいたようで、愚行を犯すとは思いがたい人物だ。
「なぜシュラン程の人材が……いや、理由の如何ではないか。何が理由であろうとも許すことは出きん」
フィオはアイラのその言葉に頷く事は無かった。
自分の本来の仕事が同じかそれ以上に汚いという自覚からだ。
押し黙った彼を、腕を回して引き寄せる。
「そんな表情をするな。お前が捕まっているルルを助けだしてくれたお陰で、アレクがこちらに再度寝返ってくれたのだろう？」
「彼は治療が必要な事もあって監禁されていませんでした。私は大したことなど何一つ為しておりませんよ」
「それはお前の見方であって、アレクや私は感謝している。感謝とは集めるものではない、受けるものだ。お前には私の感謝は受け止めて欲しいんだが……」
素直で実直だけど、恥ずかしい人だ。だけど、有り難い人でもある。
フィオは自分の中の素直な判断に従うことにして、
「私を取り立てていただいただけで十分ですよ」
背中の力を抜いてアイラによりかかる。

「それより、これからはどうなさるおつもりなのですか？」
「まずは兵力を集める事だ。各地の領主に増援を願いたいところだが、あいにく私の派閥についている者たちは抑えられているのだったな？　であれば、それほど多くの増援も見込めまい。この騎士団たちを上手く使ってぶつかるしかないさ」
詰まるところ、最後は正面からぶつかって勝負を決めなければならない。
権謀術数の末の決着は後から隣国に難癖をつける余地を与えてし

まうし、国民も実感を得られない。
「傷つけたくない人のために派手に傷つけ合わなければならないなんて、私も無様だな」
フィオに返すことが出来た答えは、握り返す手の力を強めるだけだった。

◆

教暦２３６年、夏の月である辰星（しんせい）も後半を迎えていたその日、アイラの元に一人の使者が訪れた。
クラウスからもたらされたその使者はアイラの前に跪き、朗々と述べた。

「国家の正統な規範を乱す逆賊に、王家の者として最後に華々しく散る時を与えると、クラウス様はお言葉を下賜されておられます。来たる螢惑まで１０を数える日、シロイの砦前にて決着を付けようではありませんか」

3―4

レーネルダン大陸には、国をまたいで教団と呼ばれる宗教が普及している。
数十代もの系譜を遡る頃、レーネルダンの大陸を統べた王が居た。
通称として祖王と呼ばれる彼は、世の中の制度を整え、彼の及びあらゆるものについて記した書物である教譜を書き起こした。
教譜には倫理や道徳から政治と経済に至るまで、あらゆる事柄に関して巻が起こされている。
その中でも倫理と道徳についての巻を取り上げて教導書（きょうどうしょ）と呼ばれるバイブルが発生し、教導書に従う者たちの組織である教団が生まれた。

また、国が分かたれた今でも教譜の教えは大陸各国の文化と密接に存在している。
春夏秋冬をそれぞれ「太白（たいはく）」「辰星（しんせい）」「螢惑（けいわく）」「歳星（さいせい）」と呼び、それぞれの月は５０日、年２００日の周期とする教譜歴がまさしく該当する。

◆

クラウスからの使者が告げた辰星の４０日は残り１０日で秋の月である螢惑を迎える節目だ。
「彼らも秋の収穫の時期まで事を長引かせたくないという事でしょう」
部屋にはアイラを初めとしてその侍女と黒白騎士団長、そして新しく団旗を与えられた親衛隊長の姿がある。
彼らが居るのはフィーデル卿の前線基地だ。
訪れてきたクラウスの使者は貴賓として整った天幕に留めさせ、”

警護”を付けている。
使者を遠ざけた上で、翌日に引き伸ばした返答のために今後の動きを相談していたのだった。

とはいえ、基本方針は昨日アイラがフィオに言って聞かせた通りだ。
「戦いの条件は飲む。異論はないな？」
アイラが見回し、各々が頷きを返す。
「ラトリアとその周辺を戦場にするのは双方が避けたいでしょう」
クリストフが断定すれば、補足するようにアレクが後を補足する。
「すでに奴らは砦に詰めているでしょうが、シロイ砦の前の平原は正面からぶつかる戦をするにも適しています」
「ラトリアを落とすんなら、途上にある要所も無視できねぇ。どちらにしろシロイで敵は除かなきゃならねぇんだから、ちょうどいいじゃねぇか」
外聞も取り繕いもないだけ、最後のガルの意見が最も的を射ていた。

他にも奇抜な戦術を取ろうと思えばいくらでも取ることは出来る。だがそれは相手にも言える事だ。
「後ろを見せて斬られるなんざごめんだね。正面から斬り合うなら俺は負けねぇ。やるなら正面突破だ」
ガルの発言に負けじと胸を張る男衆の意見が一致してアイラに視線が集中する。
だが、そこにあるのは怪訝な顔をしたアイラだった。
「どうかされましたか、アイラ様」
アレクが聞いてもアイラは「いや……」と言葉を濁す。
その理由を尋ねたくとも、彼らには分からない。アイラから戦を受けるという発言を受けての決断だったということが、彼らの発送を一箇所に集めてしまっていた。
男性陣から視線を外しアイラはフィオ（彼も正体は男なのだが）を

見た。
「まぁ兄(けい)らに意見を聞いた時点でそう言う答えが帰ってくるのは分かっていたがな。他に何か案はないかな、フィー？」
わざわざ愛称で自分を呼ぶ意味は彼にとって明白だ。
侍女ではなくフィーとして応えろ、と。
「そうですね、強いて申し上げるのならばクラウス卿の腹心を軒並み暗殺してしまってはいかがでしょうか」
あまりにも唐突で、そして道義に外れた発言に騎士団長達が殺気立つ。
「我々が正面から戦闘をするというのに、相手の腹心が偶然急死するというのかッ！？」
今にも剣を抜き放ちそうになのは黒狼騎士団のクリストフだ。
そしてその横に控えるアレクも、姿勢は変わらないが目つきに険が篭っている。
「そういう謀略も政治上必要だろうけれど……この事態でその選択は悲しいね。我々の実力を信じていただけていないと感じてしまうよ」
「……差し出がましいことを申し上げました」
フィオが頭を下げようとすると、アイラの手がそれを遮った。
「お前は私が望む通りの答えを出してくれたぞ、謝る必要はない」
「王女！？」
「落ち着け。たしかに戦術上の有利を得るためにそのような措置を取ったのであれば、それはお前達を見くびることになる。だが戦略、ひいては政治の上では正面突破で解決出来ない問題もある事は理解してくれ」
二人は悔しそうに目を背けて拳を握り締める。
直情的なクリストフと器用なアレクは正反対だが、同じ直線上にいる。騎士道に生きる彼らにとって、フィオの発案は決して認められないものだ。
だが彼らも子供ではない。国に仕えていれば往々にして起こりうる

ものなのだという事も理解出来ないはずもない。
「無論、私とてこの期に及んで決戦直前に暗殺などという下手を打つ気はない。だが、常に正面のみを突破するというわけにもいかなければ、この様な考えが浮かばなければならないだろうよ。今はお前達が私の戦力であると共に参謀だ。私は私の考える王としての正義が自分と共に在ると信じている。それに付き従ってくれているお前達がその正義を背負って真っ直ぐ前を向いてくれることは好ましい。だが、それで兄らの慧眼を曇らせるような事はして欲しくない、それだけだ」
かまをかけてすまないな、と謝罪の言葉だけを投げてアイラは改めて場を取り成した。

「で、実際はどう戦うんだ」
と切り出したのはガルだ。
「こいつらを引き連れてても、ラオの俺達が居ればプラスとマイナスは同じくらいだ。むしろ敵の士気があがるかもしれねぇ。そこんとこはどうするんだ？」
言いながら机上の地図を整理する。
ラトリアを北西において、自分たちが居る地点の中間、ややラトリア城寄りに、シロイの砦がある。
ところどころに小さな山があり、平原は双子の山の間を抜けた先にある。そしてラトリアまではシロイを抜けると一本道だ。
どうあっても平原で真っ向からぶつかるか、砦相手の籠城戦になる。

そして目下の問題は、依然クラウスの兵数が圧倒的に上回っている事だった。
黒と白の騎士団は国境線防衛のためにいくらかの兵士をそれぞれの主拠点においてきているため、若干を見込んでいるエスト東方の兵力を総合しても、一個師団程度の兵力しか存在しない。
対してクラウス側は、第一から第三までの近衛師団の内の第二と第

三を国境防衛に配置しているものの、統制の効いた一師団を丸々動員できる。さらにはエスト西部の有力領主の兵力を加えると倍とはいかないまでも、アイラ達を凌駕する戦力を集めていると考えられた。
更に、後方に強固な砦を構えているクラウスは補給や撤退にも苦労しない。

改めてアイラに問うたガルの顔は真剣ではあるが堅くなってはいなかった。
アイラに作戦があると分かっていると言わんばかりだ。
それに答えるアイラにも、自然と笑みが浮かぶ。
「もちろん策はある。前回の結果は奇襲だった。正面からの用兵で敵を討てば言うことは無い」
アイラが皆に伝えた用兵は至難を極めるものだった。
だからこそ。
男たちはニヤリと笑って引き受けた。

◆

石で作られた砦の通路を、カッカッと軍靴が音を鳴らしながら通過していく。
羽の装飾と紋様が描かれたブーツで進むのは砦に務める一兵士ではなかった。
やがて彼は一際大きく立派に設えられた扉の前で立ち止まると、おもむろに扉を開け放って中に居た者に対して糾弾の色強い叫びを上げた。
「クラウス様！」
声の主はシュラン＝フィーデル。
雨が止むのとほぼ同時に辿りついた伝令兵によって、父が黒狼騎士団に敗れたことを伝え聞いた彼は直訴のためにクラウスが滞在する

シロイ砦の貴賓室を訪れたのである。
だが部屋の中にはクラウス以外の人物も居た。
「レックスっ！貴様、良くものうのうとこの場にいられるな！」
シュランの叫び声に肩をびくっと震わせる細身の男。
彼こそがクラウス軍に参謀として参じているレックスと呼ばれる男だった。
レックスはクラウスとはテーブルの反対側に座って今後の戦術について進言していたようだが、それに構わずシュランは彼の首を掴んで床に引きずり倒した。
「クラウス様の署名を偽った貴様の偽の指令に従ったばかりに、私はルル＝オージェに危害を加えるハメになり、名誉を汚された！だというのにあげくの果てに狐共は人質を取り返してアイラ派に回ったのだぞ！首を懸けて詫びるのが筋であろう！」
シュランは起き上がろうとするレックスの腹に蹴りを入れる。
痛みを堪えながらレックスは恭しく頭を下げるものの、彼のもったいぶった動作に慇懃さは隠しきれていない。
だがシュランが二の句を継ぐ前にレックスが機先を制した。
「私の策に不備が有ったことは、シュラン殿にお詫びいたします……ですが私はここに軍師として座しております。我が王の命であれば首を差し出すことも厭いませぬが、そうでなければ私にできる償いは、次なる策を提するのみで御座います」
シュランも軍事や政治学をひと通り学ぶ上流貴族の一人だ。
言い方は他にあるだろうと思いながらも、彼の言い分にも理がいくらか有るのも理解してしまう。
クラウスはその様子を冷ややかに見つめながら、シュランに向き直る。
「シュラン、貴様の望みは父の敵討ちであろう。先鋒として三千の兵をくれてやる。狼の喉笛を噛みきれ」

短いその言葉に、シュランは瞳を昏く輝かせた。
そこには理想を掲げて戦う騎士の光はなく、復讐に身をやつす光しかない。
「シュラン＝フィーデル。先鋒三千の兵を拝し、狼の首を献上いたします！」
敬礼をとり、起き上がって再び椅子に座るレックスに一瞥をくれてから部屋を飛び出していった。

クラウスは息を整えながら椅子に座り直すレックスに手を貸さなかった。
その不満もあるのか、レックスは無礼を承知しながらも強い語調で王に訴える。
「では、話の続きです、我が王。なぜ幾重にも渡り張り巡らせた私の策を、貴方は内側から裂いて回るのでしょう？
予め本隊を控えさせていたこのシロイ砦に幽閉していたルルージ＝オージェがなぜ脱走出来たのですか？　なぜ単独でミラ連合方面へ進駐させる予定だった白狐騎士団をグルフ殿の支援部隊としたのですか？　先鋒には危険だと忠告申し上げたシュラン殿を、先鋒に任命なさられたのは何故でしょうか？　そしてなぜ国賊へわざわざ使者を送り決戦などを挑まれるのでしょう。この機に逆賊を暗殺してしまう案を何故頑なに拒まれるのでしょう？」
顔色は全く変えずに、しかしこれだけの溯及が彼の口からこぼれでた。
言い切ったレックスは大きく息を吸うと、口をきっかりと閉じて背筋を伸ばし、クラウスの声を待っているのだった。

激しさと落ち着いた様子が瞬時に入れ替わる様子を見てクラウスはおかしそうに笑う。
引きつるように高音がまじった笑い声。

かつての王子はこのようなどこか危うさを孕む笑いを浮かべはしなかったと不安を覚えながら、レックスはただ待った。
「クックッ……お前も変わらんな。そのなんでも知りたがる癖は止めよと何度も申したはずだな」
「ですが、そのような軍師であるからこそ、側に置かれていると愚考いたします」
「そうだな、それもある。だがお前は1つだけ大事なことを忘れているぞ」
クラウスは、前触れもなく裏拳で彼の頬を払った。
なぜ、という叫びが口をつくまえに、首元を締め上げられて無理やり立たせられる。
「貴様の意見を汲むかどうかも、俺のさじ加減ひとつだ……そして俺は俺の気に食わん策をわざわざ採るほど自分の知恵に困っておらん。貴様が持ってきたルルの指……正直、あれを見た瞬間貴様の首を刎ねなかった俺に感謝してほしいくらいなのだがな」
レックスは再度床に叩きつけられる。クラウスは手を貸すことなく腕を組んだまま男を見下ろした。
こんな下らない策を弄するような男だったかという失望を、クラウスは隠しもしない。
「ルルは情勢の読めぬ男ではなかった。あれの腕を切り落とし、証拠として指を更に切り取ったのは貴様の単なる嗜虐趣味だ。とうていエストの貴族には似合わぬ悪趣味よ。さすがはイグヌスの人間、とでも言うべきかな」
予断を許さぬ語気に圧され、レックスは声が出なくなる。
何故、という表情を見せてしまった時点で策謀家として失格だった。だが痛みに耐えるので精一杯の彼は自分の表情には気付けない。
「知りたがりのお前に幾らか教えてやろう。白狐の扱いルルの事も含めグルフ殿にお任せしたのだよ。あの指をアイラに送りつける事もな。

シュランが先鋒を務めるのも騎士道としては正道だ。親の敵討ちとあれば、軍の意気も上がる。
俺が王としてこれより先に進む起点は、嫡男の王位継承からして教譜によって正される世の正道であり王道よ。なればこそ、俺の選択肢は常に正道と共にある」
妹は太陽だ。夜でも進む道を自分で照らし、進んでいく。
自分にそれは出来ない。夜は夜の中を、夜道の歩き方を守って進むしかないのだ。
だがしかし、道を過ち外れることだけは許されない。
それが分からん時点でこの男もただの頭が回る卑怯な男だったかと内心で切り捨てた。
「貴様には殿の部隊を預ける。脳みそを使うしか能が無いのであれば、輜重くらいは束ねてもらおうか」
クラウスは言い捨てると外套を翻しながら部屋を出ていった。
あとに残されたのは口端に血をにじませながら這いつくばるレックスのみだった。

◆

アイラはただちにクラウスの使者を送り返し、クラウスもまたアイラの返事を待たずして着々と布陣を完成させていた。
使者がアイラの元を訪れた辰星の３２日より全ては順調に進んだ。
そしてクラウス王が指定した前日の夕方、シロイ砦の見張りは平原に４つの旗を確認した。
狼と狐の紋章。見慣れぬ紋章が見えるが、中央にはためくのは見間違え用もない王家の紋だ。

明ける辰星の４０日。
エスト王国の歴史に大きな変革をもたらした内乱に幕を下ろす決戦

が始まった。

4―1

シロイ砦はラトリア城の南東に聳(そび)え立ち、ミラ連合へと繋がる南西への交易路の始点にもなっている。
砦には王家の国旗と近衛兵団の団旗が、そして平原には主だった将軍達の家紋がぽつぽつと並び、その先頭に羽をあしらった家紋が揺れている。
さらにその向こうには狼と狐の旗がひらめき、最奥にはもう一つの国旗が風に翻(ひるがえ)っていた。

教譜歴２３６年、辰星の４０日。
静かではあったが大きく歴史の流れを変えた、エスト内乱の決戦の幕が開かれた。

◆

始まりは突撃だ。
クラウスの陣は三千の先鋒を筆頭に、大きな三角形を描くように広がっていた。
そしてそれぞれの家紋を翻している部隊はその中でも小さな三角を作っている。小さな三角を撚(よ)り集めて作った大きな三角は、大きく見れば錐の陣であり、小さく見れば練兵を行なっていない農民上がりの兵士を効率良くまとめ上げるための部隊分割であった。
だが基本的には大軍が自らを小に分けるのは愚策とされている。
「であれば、なぜクラウス様は愚策を選んだのでしょうか？」
アイラ側の本陣で王女の左に侍る侍女が問う。

アイラ達は街道に沿うように陣を展開していた。最奥に当たるアイラの本陣は山裾をやや登った平たい位置に設けられているため、シ

ロイ砦ほどではないが高所から平原を眺めることが出来た。
王女は侍女の質問に満足そうに頷く。
「大軍に対して寡兵が不利なのは戦術の基礎中の基礎の第一歩だ。だが大軍になることのデメリットもある。統率が難しくなるんだ」
分かるな？という言葉は出さずにフィオの目を見つめ返す。
頷く侍女の瞳を受けて続ける。
「大貴族と呼ばれる者のうち、フィーデル卿を除く数名はアイラ様にお付きになったため、現在ラトリア上にて軟禁されております。故に彼らが集めている近衛師団以外の兵力は少数を練り上げたもの。またその少数もほとんどが農民上がりの平民かと判断できます。徴兵されてから一月も経たぬようでは、まともな用兵など出来ようはずもない、と」
「合格だ。兄上もこれが急場凌ぎだと分かってこの陣形にしているのさ。妙案だが良いとは思うぞ。それぞれの領主はそれぞれの領主の手に余らぬ兵を連れてきている。全てが並列であり、大隊規模の陣形を見出さぬ限り自由に動かせることで、大軍が硬直することを避けているのさ。
もっとも、手柄を焦って小さな部隊同士が邪魔をし合うこともないわけではないが……」
「そのような事態は大軍の中にあっても起こりえます。であればクラウス様は前に出る方策をおとりになられたのですね」
「そうだ。つまり……」
アイラは左手でフィオの頭を撫でながら、右手をさっと振り上げて真横に振り切った。
応じるようにラディールの旗が倒れるのを見て、アイラはつぶやく。
「つまり、兄上は兄上らしく、手ごわく在るという事だ」

◆

「我こそはグルフ＝フィーデルが嫡男、シュラン＝フィーデルであ

る！父の首を奪った者よ！私の刃を受けよ！」
叫びながら突き進むのは叫ぶとおりシュランだ。
前方には黒狼の団旗が見える。そしてそのやや後方に狐の団旗だ。
父を殺したのは黒狼だ。どうあろうと真正面からぶつかることが出来る。
（有り難いな）
父の仇を討つ覚悟はあるものの、現在のシュランにとってはそれは第二の目標だ。第一の目標は無論先鋒としての任を果たすことで、場合によっては復讐は果たせないと半ば諦めの覚悟を持って戦に臨んだのだが。
「先鋒としての任を務めながら、復讐まで果たせるとはっ！」
馬に乗りながら先鋒の中でも特に先陣をきって駆ける。

確認できる前方の部隊展開は、後方の砦から送られてきた情報と寸分と違わない。こちらの先鋒部隊の横幅に合わせた幅で歩兵が並んでいる。
アイラの陣形は錐にはなっておらず、全体としては奥に長い長方形で、後方に本陣が形をとらずふくれあがっている無様なものだった。
（さすがの王女もこれほどの大軍を扱うのは初めてであったか）
ならば喰えるところまで喰らいつこうと更に姿勢を前のめりにする。

一番奥までたどりつけるとは思っていない。自分の役目は先鋒として風穴を開け、後方の本陣が到着して敵に圧力をかけ始めたら左翼か右翼に抜ける事。そしてそのまま折を見て再度横から斬り込むくらいだ。兵数からいってもそのあたりが関の山だろう。
若干スピードを緩めて先鋒歩兵部隊との距離を縮めながらシュランは馬上突撃（チャージ）の為に槍を腰だめに構えて前傾姿勢を取った。
そして彼は見た。
「狼口（ろうこう）、開け……っ！」
さっと振り上げられた小さな団旗。最前列の兵士が背に隠していた

大盾を前面に構え、地面に撃ちつけて後ろに控えていたものと二人一組で支える。
「その程度で！」
シュランの叫び声に合わせる形で騎兵全員が更なる前傾姿勢をとる。
防具をつけた馬の首に身体が隠れるほどの前傾姿勢で突き出された槍は、馬の前面に攻防一体の壁を築く。
まともに当たれば体を引き裂く騎馬突撃。

だが、一歩上を行ったのは知恵持つ狼達だった。
盾構えの更に後列が左右と後ろの三人で三脚を作って掲げた武器。
「城塞防衛用の弩だと！？」
「射（て）エーッ！！」
引き絞られた木製の発射機構が重い音を立て、空を切る轟音が発射された。
続くのは馬のいななき、落馬して地に落ちる音。あるいは肉と骨と命の弾ける低い破砕音、そして悲鳴を上げる事無く体を分断される兵士のうめき声だ。
前線が混乱で硬直した。
（シュラン様の姿が……無いっ！？）
大将は無事なのか。あれほどの武勇を誇る若き指揮官が、一瞬にして屠られてしまったのだろうか。
そしてこのまま歩を進めていっても良いのかが、分からない。
自分たちも目の前で赤い血溜まりに成り果てた友のように変わるのではないかという恐怖が足を凍らせる。

そしてその迷いを切り裂くように疾ったのは二つの声だった。
「突撃！」
狐が戦場を駆ける。

◆

端的にまとめるのであれば、戦場は雷の狐と呼ばれるアレクの面目躍如の舞台になった。
突進してきた敵の騎馬隊を防塞兵器で攻撃するという後手の奇襲によって押しとどめ、突撃に一瞬のたわみを作る。
その隙に後方に連なっていた長方形が2つに割れ、それぞれが左右に突撃を敢行した。右に進むのは団長であるアレクであり、左に進むのはいつも彼を補佐してきた副長のマルセルだ。
敵の合間を縫うように駆け、武器を振るい続ける。
しかしそこに虐殺は無い。その判断をするだけの余裕が、白狐にはあった。
「道を切り開くための最低限のみ、攻撃を許可する！」
叫んで進む右翼のアレクに速度を合わせながら、左翼の副長も防人（さきもり）となる。
突き出される槍を躱して側面に回りこむ。振り下ろした剣で狙うのは腕、欲を言えば武器そのもの。部下の速度を鑑みて突破できる経路を割り出しつつの突撃と、合間に可能であれば部隊長レベルの領主や貴族を狩る。
狙うものは確実に。完遂するまで油断はなく、家を守るために狡猾さを発揮する狐の如く、国家への忠義で研いできた技術を振るう。
三角形の頂点から侵入した彼らは、戦場には不似合いな冷静さで敵の中腹を食い破り、左右の辺から飛び出す。

「騎兵を抱えている部隊は奴らを追撃しろ！後ろからなら白狐騎士団と言えども削れるぞ！」
まともな反応を返す将軍は”生かして殺さず”という王命を守り、殿が追撃の頭を潰して勢いを止める。
狐は奔走した。
獲物を狩って巣（本陣）に戻る狐を追いかけた部隊は違和感に気づき――気づいたときには遅かった。

「後方に居た本陣が……なぜ前進しているんだっ！？」
部隊長たちの叫びは悲鳴に近かった。
長方形の後方に位置していたアイラの本陣が、前線に横展開されていたのだ。
自らよりも少数であった敵を追っていたはずが、敵の主力部隊と激突する事となった。

◆

「やれやれ、してやられたな」
砦の上に立つクラウスは眼下を望みながらつぶやいた。
屋上に置かれた机と地図の上の駒を動かして敵と味方の動きを再現する。
「敵の先陣を食い止めて、壁にぶつかった三角はしだいに潰れながら横長の長方形になる。あの狐が囮ではなく餌に見えたとは、国内の戦力を具体的に想像できていなかったか……腐っているな。そうは思わんか」
声をかける背後に立つのは三つの近衛師団の内、第一師団を預かる師団長のユリアンだ。
クリスやアレクよりやや年上の彼は、軍校時代の二人の同期だ。出身階級が低かった為に入校が遅く、やや年かさではあるものの、忠義心と誠実さでは二人にも劣らない。
子供のようにハッキリとした色の赤髪は、彼が小脇に抱える第一師団の紋章に彩られた燃える赤と揃いになっている。
空いた右の手を胸に当てた敬礼を崩さず、彼は王の問に応じた。
「ギルバルト王の治世が良すぎたものかと。軍国となる必要は無いかと愚考いたしますが、常備軍以外が対人戦争を行うのはずいぶんと久しぶりであるからには、このような下策も致し方ないかと思われます」

「その意見に賛成だ。だが俺の想像力では今日はコレ以上の大きな手を打たれることは無い。貴君らには今日ではなく、明日投じる一石になってもらうつもりだ。支度をしておきたまえ」
「はっ！」
最敬礼をとった師団長はこちらを振り向かぬ王に背を向けて砦を降りていく。
「国防を主眼に置くが故に、師団は一つしか提供できぬ、か。実に素晴らしい近衛軍だ」
だが、あれに敵ったものかと思い悩む。
「さて、久しぶりに兄らしい所を妹に見せてやれればいいのだが……」

◆

そしてこの日最後の決定打はやはりアイラ軍から放たれた。
両軍の前線の位置は最初にシュランが激突した地点に固定され、アイラ達はそこから踏み込むこともなかったが退くこともなかった。
そしてその間、最前線で挽き肉になった残骸の中から起き上がる者たちが居た。
その中には将軍であるシュランの姿もあり、
「シュラン様！ご無事ですか！？」
駆け寄ってくるものの鎧に羽の紋様を確認して彼は頷く。
「大事ない。四肢は問題なく動く。馬はやられたがな」
敵の攻撃は大雑把で、しかし威力を持ってこちらの勢いを止めるのが目的だったとシュランは宙に飛ばされながら理解していた。
こちらの全滅を狙った一撃ではない。
その巧妙さに舌を巻きながら、しかし彼の中の闘志は萎えていなかった。
シュランは部下から槍を受け取ると声を上げた。

「グルフ＝フィーデルの息子は死んでおらんぞ！父を殺せても俺は殺せんかッッ！！」

声が届いた。
「お呼びのようですぜ、隊長」
団旗を伏せたまま黒狼騎士団の陣まで進んでいた親衛騎兵隊の一団の中で、相変わらず副隊長の座にすえられているオルロがガルを呼ぶ。
気負いの色など何一つなく、彼は馬上に佇んでいた。
彼が抱えているのは、オルロの語彙の中で言えば気負いではなく責任感であり、
（立派な騎士様の様な表情をするようになっちまいましたなぁ）
あくまで自分の感想は口に出さず、隊長の答えを待った。
「やっぱ、俺がいかにゃあならんよな」
「このままここで大人しくして、狼の隊長さんに任せるってのもいいんじゃねぇですかい。この前はこっちが功をあげちまったんです、向こうさんに順番ってぇのも悪かねぇでしょう」
「オルロ、それは俺たちの世界の貸し借りで成り立つモンでな……残念ながら貴族様方の世界でそのお譲りは相手様に失礼になっちまうのさ」
揶揄を込めた丁寧な口調で答えるガルに、全員が失笑を返す。
確かに。俺達の知ってるお高く止まった奴らはそう考える、と。
だから、
「ここは応えてやるってぇのが大事になるわけだ。行ってくるぜ」
ガルが馬から下りて歩いて行く。
送り出された隊長の背後で旗が上がった。

◆

眼前で敵の盾で出来た壁が割れ、その間を一人の黒服が歩いてくる。
頭に緑のバンダナを巻いたその男は鎧というには軽装にすぎる出で立ちで、まともな騎士には見えなかった。（だが、ただものではない）
この男が自分の呼び声に応えた者なのだと。確信できるだけの剣気が感じ取れる。
「シュラン＝フィーデル」
「……特派騎兵隊、隊長のガルだ」
特派騎兵隊、という物は初耳だったが、ついさっき立ち上がった初見の旗と共に王女の隠し種なのだろう。
こちらが槍を構えるのと同時に、男は腰に吊るした剣を抜き放つ。
華美な装飾の無い実に使い勝手の良さそうな剣だ。
「貴様が父を殺した男か」
「そうだ」
息を吸って、息を吐いた。

呼吸と同時に初撃を見舞ったのはシュランだ。
歩兵用と言えども槍を構えた彼のリーチはガリバルディのそれを遥かに上回る。先手を取れるのは物理的な道理と言える。
体の中央を走る正中線目掛けて額・喉元・鳩尾の3箇所に連続して槍を突きこむ。
対するガリバルディは冷静に剣を自分の正中線に重ねるように構え、槍の届くギリギリの位置にバックステップで下がって剣で受ける。
そのまま3段目の突きを引き込むシュランに合わせて懐に飛び込もうとするが、最期の一撃を弾かれたと見せかけて斜めに引き、ガルの足元に払うような一撃を加える事でシュランもガルを遮る。
振り払いながら後方にステップで二歩を下がり、距離は再び最初に戻る。
勝つための認識は共通していた。

一つのプロセスの奪い合い。この距離を崩せたらガリバルディの勝ち、逆にこの距離を踏み込ませなければシュランの勝ちだ。
今度はガリバルディが踏み込んで右から左へ払うような一撃を槍に叩きこむ、と同時に身を半身にしながら右前方に飛ばす。
弾かれた槍を抵抗せずに体ごと回してシュランがそのまま攻撃に移る。
右側から襲いかかってくる攻撃に対してガルが肘当てで槍の柄を叩きつけて弾き、
投げるように後ろに引いた槍を今度は回転させながら前方に投げ出すように黒衣の男に叩き込み、
飛び込みに合わされたカウンターに対して剣を盾にすることで空中で動きが止まった。

二人の動きは同じ物を繰り返すことなく常に変化しながら加速していく。
一合、五合、十合、そこから先は数えるものもなく、皆が二人の動きを見守り続ける。
既に太陽は天頂まで上り、陽光は容赦無く体力を奪い、大地に伏した輩(ともがら)の肉を腐らせる。
ガルとシュランは自分たちの決着が今日の戦いの終わりを告げると判断していた。
戦争は一日中続かない。特に国外ならいざしらず、国内での戦闘で発生した死体を腐らせるわけにはいかないからには、戦後処理が発生する。
だから打ち合いは止まらず、契機がつかめないまま二人の動きは絡みあう。

バランスを崩すために投げかけられたのはシュランの問いかけだった。
「父を討ち、これ程の腕前を持つ貴様ら特派騎兵隊とは何者だ！」

この男が使うのがエスト王国の正騎士が学ぶ剣術ではない事は明白だった。
武器の構え方、歩法、攻撃の受け方、身のこなし、全てが異常だ。
そして異常なのにも関わらずそこには整合性のとれた何かがある。
返事をしない黒衣の男に対して、全力ではじき飛ばすように槍を突き込む。
「貴様は何者なのかと問うている！」
槍の間合いの一歩外まで吹き飛ばされた男が膝をつく。
ゆっくりと立ち上がる男の口の動きと、声が、まるで耳元で囁かれるようにハッキリと聞こえた。
「ラオからの特派だ」
瞬間、立ち上がる男の姿がブレた。

反応が遅れた。否、正確にはガルが遅らせた。
右手を手前、左手を奥に槍を持ち、シュランは体の右側に槍を構えていた。
これまでと同じ、持ち手の裏側……シュランから見て左側に身を踏み込ませた敵に対して、先ほどまでと同じように迎撃の一撃を叩きこめば良かった。
だが、
（消えたっ？　馬鹿なっ！？）
敵は確かに一歩を踏み込み始めていた。直進していれば今頃、二歩、三歩とこちらに踏み込んでいるはずだ。そのはずなのに、敵の姿が認識できない。
決闘を見ていた全員が違和感に気づいたのは槍の半分、剣の間合いまで男が踏み込んでもシュランが動かなかったからで、
「じゃあな、シュリー」
最後に聞こえた名前は、酷く甘い過去の――。

◆

「ラオよりの特派騎兵隊隊長ガリバルディが、フィーデルの親子を共々討ち取ったぜ！！」
飛ばした首を剣の先に差し、高らかに掲げ、戦場から鬨（とき）の声が響き渡る。
すまねぇなという心のなかだけでつぶやき、続くアイラの言葉を待った。
「本日の戦闘はこれにて一時停戦だ！互いの輩（ともがら）の骸を祓う必要があろう！双方、剣をおさめて二百メートル下がれ！」
王女の宣言で両軍の争いの音は完全に消え去った。

部隊長格の者達の声が兵たちを引かせていく。
だが敵味方を問わず、全員の心の中には疑問が渦巻いていた。
ラオ。
その言葉が重く、深く、楔（くさび）として突き刺さっていた。

4―2

初戦を制したアイラ達の陣営は活気に満ちていた。
二大騎士団が味方に付いており、道中で諸侯の戦力が合流したとはいえ、味方は寡兵だった。
平原での決戦となれば、奇襲や地形を利用した作戦は練る事が出来ない。将軍達からすれば、陣形などで勝利を得ることは出来るかもしれないが、兵士からすれば一人殺される前に相手を二人以上殺さねば生き残れない計算だ。無茶な戦を前に、死ぬのが当たり前だと心している者も多かった。
だが蓋を開けてみれば黒狼騎士団と特派騎兵隊は敵の先鋒を壊滅させた。さらにはフィーデル領の嫡男で実力者であったシュランを討ちとりもした。
無事に命を繋ぎとめた者たちは死んだ者たちの分まで勝利を喜ぶ。
戦力として温存されていた本陣中央の諸侯軍は夜の前線に見張りとして立ち、昼の前線で命をかけていた者たちは後方に下がって肉を食い、酒を飲んで、命あることを祝っていた。

◆

「アイラは参加されないのですか？」
そう問うたのは一人天幕の中で酒も飲まず、剣を砥いでいた王女が気にかかったからだった。
停戦後の処理の指示をテキパキと終えたアイラを（心を無にして）湯に入れ、その後は食事を用意して給仕につとめていた。
あっさりと食事を食べ終えた王女は「うまかったぞ」と言うや否や、そのまますぐに具足の手入れに取り組み始めてしまった。
念入りに時間をかけて行なっているそれを手伝おうとフィオも申し出たのだが断られてしまい、寝台の支度なども終わってしまうと手

持ち無沙汰になって待つしかなかった。
団長達の誘いも断って天幕に篭るアイラを心配する心を、外のにぎやかな声後押ししていた。
声をかけられないと思っていたのはフィオだけだったのか、アイラはフィオが質問をすると間を空けずに返事をする。
「初戦を制することは戦意向上(モラル)には必要だが、所詮は緒戦に過ぎん。過信で己を過つ余裕は、私には無いぞ」
「団長殿方のお話を伺ってきた限りでは、明日は諸侯群同士のぶつかり合いで状態が膠着しそうだとのことでした。その状態を破る一手を考えがおありなのですか？」
「概ねその通りだが、相手が打ってくる手が分かっているからな。明日はコチラから仕掛けるよりもそれを凌ぐほうが重畳だろう。こちらから仕掛けるとしたら明後日だ」
目を見張るフィオを尻目に王女は剣を火にかざして満足気に頷くと、鞘に収めた剣を寝台の枕元に立てかけて寝台に腰をかける。
「クラウス様が張ろうとしている策がお分かりになられるのですか？」
敵の策を見抜く事は並大抵の能力では出来ない。それ故に”軍師”というものがこの世には存在するのだし、戦場で刻一刻と変わる状況に対応する将の指揮能力も、同じく並ではないものが求められるからこその将なのだ。
だというのに、侍女が針子仕事を何でもないと言うかのように、王女は相手の策略が分かると言ってのけた。
「分かるさ。城では盤遊戯を嗜んでいたが、私は指南役の師を除けば兄と最も対戦していたんだ。兄の使いたがる策も、お互いが終着させようとしている流れも、大体は分かっているさ」
「ですがそれはクラウス様にも言えることなのでは？」
アイラの自信は裏返せばそのままクラウスの自信ではないのか、というフィオの心配はもっともだった。
お互いに手の内が分かって裏をかきあうのであれば、相手に利用さ

れやすくなる。明るみに出ることのない刺客であったフィオにとって、有利な情報差というのは相手を知る事ではなく相手に知られない事だ。
私にとっても自分の策を知られないのは上策なんだが、と前置いて、
「お互いにとって、片方だけに都合の良い展開が分かっていればそれを潰しあう事になる。最終的に相手のだす一手が分かっていればお互いは”状態がどちらかに傾かないが、打破できる展開”を望むものさ」
フィオには彼女の指す展開が想像つかず、首を捻って続きを促す。
そういう可愛らしい仕草を自然に出さないでもらいたいな、とアイラは苦笑して思いながら、結論を続けた。
「つまり、盤上では互角の状態に持ち込んで、後は兵の質に任せる、ということさ」
策というにはあまりにも投げっぱなしなその発言にフィオは顔を歪ませた。
「それはあんまりでは御座いませんか？」
「まぁ詰めるところまで詰めたらそんなものさ。私達が頭を悩ませただけで決着が着くのなら、始めから個人で決着を着けるさ。実際に物事を動かしているのは私達じゃないし、そのために兵士は練兵を行うんだろ」
アイラがフィオを手招きする。
話の流れのまま、ただフィオは彼女の前に跪いた。まさか王女を上から見下ろすわけにもいかない。
アイラは自分の下で頭を垂れたフィオを見て彼のおとがいに手をかけて顔を上げさせる。
少年の名を呼んで、彼の頭を自分の膝の上に引く。かき抱くようにして体を折る。
折り重なるアイラから垂れた髪が、フィオの周囲を隠す。
「私を動かしてくれるのは、今日死んでいった兵達と、彼らを殺した兵達なんだ」

零れるようにアイラから漏れた言葉は、決して弱音ではなかった。
自分に辛い事を認め、噛み締めるのは悲しみだけではない。
フィオは無言のままアイラに体を預ける。
静かに夜が更けていった。

◆

「王女さんはどうやら寝たようだぜ」
外から戻ってきたガルがどっかとテーブルに腰掛けて言う。
同じく席についていたクリストフとアレクはガルを避けるように自分の皿を退避していた。
「兵たちに顔も見せられなかったが、本当に調子が悪いのか？」
クリストフが心配すれば、ガルとアレクが二人して首を横に振る。
「それはないだろう。アイラ様の事だから内乱に心痛めているアピールだとしても私は驚かんよ」
「だいたいアイツは今日、ただの一人も斬ってないんだぜ。大将らしく後方に控えていただけなんだからよ」
「ふむ、逆に自分以外の者に罪を委ねているのがお辛いのかもしれないね。とはいえそれは体調不良とは言わないだろう」
二人に反論されてクリストフは分かった分かったと諸手を挙げて降参する。
どうしてか自分と旧知の仲であったアレクはこの男をあっさりと受け入れていた。今でもこの男の態度が目に余り我慢がならない自分が狭量なのかと思い悩みもする。
アレクに言わせれば、
「アイラ様が自らお側に置かれている手駒なのだろう？　実力があるのならば問題はないさ」
と割り切っている。
今日の戦いまではそれでも若干の疑いを残していたようだったが、今日のシュランとの戦いを見てその疑念も晴れたようだった。

「さて、アイラ様も寝静まった事だし聞かせてもらおうか」
それでもやはり、抑えるべき所を逃さぬのは狐の団旗を掲げるだけはあった。
「貴様がラオからの特派だというのは本当なのか」
「本当だ」
ガルはあっさりと答えて、テーブルの上の蒸留酒を小樽ごと持ち上げて大きく飲み込む。
熱い吐息をはいて、ガルが今度はしっかりと椅子に落ち着く。
「ラオ全体じゃないけどな。エストと接してる地域の実力者と協働してんだよ、王女さんは。今頃イグヌスの国境付近で俺の仲間たちが奴らを足止めしているはずさ」
「魔族が私たち人間のために動いているだと……？」
クリストフの声は本来の快活さを失っていた。
異形の民となった彼らとは争いばかりで血を見ぬ日は無い。ラオにもほど近い砦を守っているクリストフにとって、魔族との戦いは日常茶飯事ではないが、頻繁に起こることだった。
そんなクリストフの思いを汲んだ上で、アレクが口を開いた。
「まぁ、もともと彼らもただの人間だったわけだからね。政治を分かる人間が頭角を表せばこういう状況になってもおかしくはないだろう」
アレクがチビチビと酒を喉の奥に送り込みながらガルを一瞥する。
「アイラ様とて、犬が懐くように彼らが味方しているとは考えていないさ。敵対することもあれば味方になることもある。単純にただの外交だよ。それに考えてみるがいいさ、私たちは魔族よりもより多く、人間を殺してきたし、人間に殺されているのだから」
「仰るとおりだ、狐さんは話が分かるねぇ。それに比べてそこの犬っころは頭が堅くっていけねぇ」
ころっと雰囲気が軽くなり、軽口を叩くガルに乗せられるようにアレクも笑いをこぼした。
面白い男だ。若くして騎士団長に上り詰めてから、久しくこの男の

ことを犬っころなどと呼ぶものは居なかった。それにこの男は”あえて”雰囲気を軽くしている。
（どうやら駆け引きだけならクリスよりも俺寄りのようだな）
これなら王女の側においておくのも悪くない。
改めてガルへの評価を底上げして、アレクが笑いを納めた。
「まぁそう言ってくれるな、頭が堅くて素直なのがこいつの良いところなんだよ」
その日の隊長達の席は照れたクリストフの一喝で締められることになった。

◆

明けて翌朝。
お互いの布陣はほとんど変わらぬまま戦端が開かれた。
前線では各地の領主達が掻き集めた兵達が戦っている。クラウス側の陣はひたすら分厚く、アイラ達は層の薄さを逆に活かして白狐たちが電撃戦を繰り替えしていた。
アイラと特派は前日と変わらず、前線では戦っていない。
「お前らしくねぇな、王女さんよ」
アイラの馬に横付けしたガルが暇そうに体を伸ばしながら文句を垂れる。
王女が武器を持て余しているラオの者達を見回す。
「お前達の出番は明日、戦の最後になる。今日は不測の事態が起こらぬ限り、ここで待機だ」
既に戦闘が始まってから数時間。そろそろ日も中点に昇り、ややアイラ側が前進してクラウス軍を断ち割っていた。
「不足の事態ねぇ……この平原でそんな事があるのか？　万が一にそなえて犬ころ達は後方に扇形に陣を広げて守りを固めさせてるが……。俺たちの役目はここに攻めこまれた時、お前が逃げるための

捨石か？」
「おいおい、不安を煽るような事は言わないでくれ。安心しろ、お前達を防御に使うようなことはしない。仕事を与えるときはとびきりの相手に攻めこむ事になるさ」
王女言葉を聞いて親衛隊の面々から喝采が聞こえてくる。
大仰な名前など彼らは気にしていない。
彼らの本質はあくまでも狩り続ける狩人であり、山賊だ。

その時、後方で不意に鬨の声が上がった。
先に振り向いたガルがにやりと笑う。
「これが不足の事態ってやつかい？」
自分たちが抜けてきた後方の双子山。
そこに突如として近衛軍第一師団の軍旗が表れ、大量の兵士が湧いて出てきていた。

◆

下卑た笑いをおさめて武器を抜こうとする親衛隊だったが、王女が一喝した。
「貴様らの出番は明日だと言ったはずだ！」
全体が静まり、逆に不安が沸き起こる。
「おいおい、そりゃねぇだろ。あの数は犬っころでもそうはおさえらんねぇぜ。数倍の兵力相手で、しかも正規軍だ。民兵ならまだしも、正規軍兵でそんな戦が出来ちまうほどエストの近衛師団は弱っちぃのか？」
「これは万が一の不測の事態ではない。起こるべくして起こっている予想済みの攻撃だ」
アイラの一言にガルが眉をひそめる。
「後方にいきなり敵軍が現れて奇襲されるのを予想してたってのか？　わかってたならなんでこんな状態にしやがった。そもそも、ど

うやってあいつらはあそこに移動したんだ。山向うに隠れてたってこたぁねぇだろう、俺たちが偵察済みだった」
興奮するガルから視線を外してアイラは正面のシロイ砦を睨む。
「単純な話だ。シロイ砦からそこの後ろの山まで、隠し通路が続いているのだよ。軍が移動できるようなものがな。軍の上位者のみしか知らず、使われたのも久しぶりだったろうに、よくもまぁこれだけの大群を通せたものだ」
「じゃあ犬っころ達を後方に展開していたのは警戒のためじゃなく、始めから迎撃のためだったのか？」
その通りだ、と頷かれてガルは顔に手を当てて天を仰いだ。

アイラが引いている戦略が、大方見えてきた。
（このままだと、俺がやる仕事は相当しんどいものになりそうだな、おい）
隠せぬ顔の一部に浮かんだ笑みを見てアイラも一つ頷いて前方に指示を出す。
「今日はこのまま出来るだけ砦まで距離を詰める！交代しながら迎撃戦を行う黒狼騎士団に追いつかれるなよ！！」

「団長、どうやらあっちでは王女が勝手な事を言っているようですよ」
黒狼騎士団の広い陣形の中央で、副団長が愚痴る。
「師団級の敵に対して全軍を連れてきているわけでもないのに、我々だけで防衛しろなど……いくら王女が無理難題を好きでも、普通の軍なら一瞬で瓦解するような作戦を立てるのはどうかしております」
兜の合わせを目深く下ろして団長にのみ聞こえる声で文句は続く。
自分から見ても生真面目すぎると評価している副団長なら、そう言いたい気持ちも分かるな、と団長も苦笑する。
「レア」

団長の呼びかけに、レアと呼ばれた女性の声が止まった。
そして続く声は団員全員に響くような大声だった。
「我々にしか出来ぬ任を与えてくださる事を何と呼ぶか分かるな？」
「はっ、栄誉かと」
副団長の凛と通る声に、全員が改めて姿勢を正す。
「軍靴で大地を踏みしめろ！我々は引かぬ者だ！狼の知恵の見せ所だぞ！」
団員全員が地面に足を打ち付ける音が響く。
「これより我らは後退しながらの迎撃戦に入る！今まで教えた事をしっかり守れよ！！」

◆

「アイラの対応についてどう思う、レックス？」
「隠し通路の事はもちろん分かっていたようですね。それにしても迎撃の手数が足りていませんが……ギルバルト前王ですら使わなかった程の古い通路でしたから、送り込まれるとしても少数精鋭の兵士程度だと思っていたのでしょうか」
クラウスはシロイ砦から単騎でレックスの元を訪れていた。
後方に陣を張っているレックスは戦闘で兵を減らしていないものの、各部隊への兵糧などの搬出で忙しく指示を飛ばしていた。作業を止めるなと言うクラウスの指示に従い、王への返事はおざなりになっていた。
「で、お前が出した暗殺計画は成功したのか？」
その言葉に気を取られたのが、書類を読んでいる途中で良かった、とレックスは内心汗をかく。
もしも筆を動かしている最中であったならば、動きが止まっていただろう。
落ち着け、と内心で何度も叫ぶ。まずは王子の目論見を知らねばならない。

「その案は貴方様に直接却下されましたが……」
「だが、俺に報告した時点で既に何者かが動いていたはずだ。だがアイラは無事だ。これは失敗したということなのだろうな」
王子は自分の話を聞いては居ない、と今頃になって気づいた。
知っていることを喋らせるためにココを訪れているのだ。
「もしそうだとすれば、アイラ王女は噂の通りの実力者で、暗殺者達も敵わなかったのでしょうな」
読み終わるのになかなか時間のかかった書類に印を記して伝令兵に渡す。
クラウスは相変わらず面白そうな顔でレックスの事をまじまじと観察していた。
「または、アイラもそれに対抗出来る者を手近に置いているか、だな」
バカな、という思いは決して表に出さないが、彼の本心からの叫びだった。
ラオ出身の特殊能力を持った暗殺を請け負う魔族集団を相手に対抗出来る暗殺者など、居るはずもない。
だがしかしレックスのその確信を揺らがす情報が、彼の手元の書類には有った。
国境線から入る報告書で、書かれていることはラディール公の引き起こしている問題についてだった。
「侵攻準備を進めていたイグヌスですが、どうやらラオの魔族たちの急襲によって兵糧などを焼き払われたらしいですな。イグヌスの国境近くではラオとの小競り合いも頻繁に起こっているとか……昨夜に上げられた報告とも関連性があるかと思いますが……」
あくまで暗殺者については言及せず、可能性のみを提示する。
しかし、どう判断されますかという言葉をレックスは思わず飲み込むことになる。
クラウスの顔がかつてみたことがないくらい、怒りに染まっていたからだ。

「妹ということもあってあくまで王族相手として戦っていたが、どうやらそのような気兼ねをする必要もないということだ。あのような人外の者共と協力するなど、王家の人間としての責任感が無いとしか言えん」
クラウスは手近にあった椅子を思い切り蹴り上げた。危うい所で躱したレックスだったが、王と仰ぐその人の暴挙を諌める言葉は行動は起こせない。ただただ頭を下げて平伏するしかレックスには出来なかった。
「人外の魔族共と比べて、我々人間は非力だ。共生など出来るわけがなかろう、対峙したら一方的に食われる事になるのだから。自国の民を守るという意志がアイラには無い。アイツにあるのは国を自分の思う通りに作るという理想だけだ！」
「……我が王の仰る通りで御座います」
その卑屈な態度に何を思ったのか、結果としてクラウスは怒りをおさめ、陣を離れていく。
「明日は私が主力を率いて出陣する。兵馬の揃えはお前に任せる、やり遂げよ」
最終的な宣戦布告を残して、彼は立ち去っていった。

◆

その日の幕切れは昨日と同じであった。
個人が携帯できる時計が無いため、兵士に限らずほとんどの国民が太陽の位置と時間の感覚をしっかりと持っている。両軍の兵士たちは昨日の停戦時間が近づいていたことを、アイラが宣言する前から予知できていた。
後退と戦の後始末はスムーズに終わり、アイラ達は前後を敵に囲まれた状態で夜を迎えた。
見張りの兵士を増やして警戒を促したが、夜襲も起こらず次の日の

朝を彼らは迎える事となった。

空が白み始め、山々の稜線から光が差し込み始める。
兵たちが列を整え、視線を向ける敵本陣に、全員の目が釘付けになった。
「ケイメン、見えるか」
対峙している近衛師団ではなく、シロイ砦の方向を振り返ってレアが問う。
アイラがルナルゥに辿り着いた初日に、手痛い訪問の挨拶を始めに食らった少年だった。
彼は始めての実践を迎え、同期が何人も大怪我をしたり、命を失っている中で生き延びていた。疲労は隠せないまでも、五体満足で立っていた。
新人は各部隊にバラされているが、周囲の若い兵士は全員が彼の回答に耳を傾け、年配の兵士達は彼女が言うであろう事を思って素知らぬ振りを続ける。
「見えるに決まってるだろ……大鷹の国旗。俺たちの国の証だよ」
この国に住むもので知らぬものはない。自分たちは大空を羽ばたく鷹に守られているのだから。
そう、そしてこうやって目の前に立ち塞がる事で始めて得られる実感が、ケイメンにはあった。
「俺たちが戦ってる相手は……」
「守る物が見えているならばそれで良い。傷つける物の事を考えるのは、私達に任せろ」
言い捨てた姉は馬を歩かせて団長の側に寄っていく。
（団長と話したいだけなんじゃねーのかな）
ケイメンは姉が背筋をさらに伸ばして進んでいく姿を見守りながら、目を細める。
だが、それでも彼女の言葉は反芻せざるを得ない。
兵の領分は考える事ではなく、ただ剣を持って応えるのみ。

自分達は選択したのだ。
応える主を自ら選んだのなら、後は前へ。Go forward
ただ前へ、だ。Go ahead

◆

我知らず、誰もが自らの武器を今一度握りしめた。
両軍の中央に二騎が歩を進めていく。

届かぬ程の小さな声が両軍から生まれる。
呼ばれた名は二つ。
お互いの剣の間合いに一歩の余裕を持って、兄と妹が互いに抜き払った剣を相手に突きつけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2918x/

君と往く戦記

2011年11月21日21時41分発行